

ま ん じ 第百七十九号 目 次

表紙絵の解説「塞翁が馬」……………田寺 怜 葦……………4

大和禎人氏作

「阿多多羅山涅槃（ある奇人伝）」……………新 井 宏……………5

你是一条河（その一）……………山 本 勉……………15

“ヨーロッパ唯一の仏教国”カルムイキア紀行……………井 出 晃 憲……………21

著書出版の動機……………隈 正 雄……………31

縄文の魂が宿る神仏習合の山……………田寺 怜 葦……………36

吾輩は紙魚ロボである その二五……………永 畑 俊 三……………42

短 歌 冬に寄せて……………鈴 木 興……………70

俳 句 雑俳十六句……………宇 井 偉 郎……………74

近代日本洋画こぼれ話（第九回）……………水 谷 嘉 弘……………76

終戦工作に動かなかった重臣たち（4）……………村 上 邦 治……………91

デイス・オールド・ハート・オブ・マイン……………岩 上 和 道……………98

（傷つきし我が心のこと）完結編……………

父と私とビルマとイギリス（第二回）……………杉 浦 崇……………123

近藤勇プロジェクト（八）最終話……………匠 克 仁……………144

人事部長 首切り姫 トウランドット 3 解雇自殺？（八）最終話……………匠 克 仁……………152

私の本州マラソン歴史紀行（中部編⑥）……………安 藤 剛……………158

編集後記……………編 集 子……………178

今年は午年。世界中があらゆる意味において激動している中、果たして今年はどんな年となるのでしょうか。昭和百年に当たる昨年は脱皮した蛇の絵を描かせていただきましたが、日本も世界もまだまだ脱皮途中という様子です。経済変動、政治的紛争、急伸するデジタル化社会等々、ついに行きだけで息切れしそうです。特にコロナ禍が始まった2020年辺りからは幸か不幸か、これまで意識していなかった世の中の裏側に気付かされることが多くなりました。知らぬが仏で呑気に生きていた昨日までの自分が羨ましい限りです。

そんな中で表紙絵を描かせていただいています。自分なりに一つだけルールがあります。それは、亡き三戸岡先生からご指示いただいた、「絵を見た時に思わず笑みが浮かび、気持ちが悪くなるものがないですね。」というお言葉を守ります。その年々の世相に依って表現したい内容は変わりますが、このお言葉が私の表紙絵の指針となっています。

今年の「塞翁が馬」はご存知のように中国の古典「淮南子」に由来しています。「人間万事塞翁が馬」という諺の如く、人生の中で起こる幸も不幸も一面的には判断できません。予測し難いこの世の幸と不幸。まさしく禍

福は糾える縄の如しです。

日常的な出来事に限らず、世界を揺るがすような問題も同じ摂理の中にあります。私たち人類はその繰り返しの中で進歩を続けてきました。大分大げさなお話になってしまいましたが、要はどんな事が起ころうと一喜一憂せずに、幸の時には不幸に備え、不幸の時には幸を信じてことです。これは自分自身への戒めの言葉でもあります。

表紙絵のコブツタさんの笑顔が皆様のお心の一助となれば幸いです。

『まんじ』（副題「作家群」）大和禎人氏作

阿多多羅山涅槃（ある奇人伝）

新井 宏

私は『まんじ』一七四号を勝手に私家版百号として「我が父、新井稔」を書いた。二十五年前に鯨游海氏に勧誘され入会し、一度の「欠稿」もなく、書き続けた百号分の「出稿」を以て、そろそろ『まんじ』を卒業しようとの意思表示のつもりであった。そして一七五号に日本語の持つ「続ける」と「頑張る」の特殊なニュアンスについて書き、更には一七六号で「幼なじみ」を持たない私が自伝の補足のつもりで、奇妙な交友関係「友垣なじみ」を書いた。

そして近況報告として、一七七号に自粛していた「病氣自慢」を書いて、いよいよ『まんじ』の現役会員を退くつもりで準備していたところに、三戸岡道夫氏のご逝去の報に接した。

その際、安藤剛編集長が、ご遺族から『まんじ』（副題作家群）の創刊号から二十号までをお預かりしたこと

を受けて、急遽、初期の『まんじ』のPDFを作成して、既に完成していた七四号以降のPDFに加え、追悼の意を表した。更には、現在の『まんじ』が同人誌としては、継続号数、年発行号数、各号の頁数などいずれの評価項目を採っても断トツの一位であり、それを育てあげた三戸岡道夫氏の功績を顕彰し、創刊号から現在にいたるまでの氏の作品名を挙げて紹介した。

今『まんじ』は大きな転換期を迎えている。この二十五年間に約八十名の方々が同人となり、そして去っていった。初期の頃の『まんじ』（副題作家群）は、発行人の大和禎人氏をはじめ三戸岡道夫氏など文芸誌を志向する同人が中心であった。しかし私が入会した頃になると、当初の有力同人は大和禎人の他には、三戸岡道夫氏と長期連載「近藤重蔵・富蔵の生涯」の金子正義氏くら

いしか残っていないかった。

その頃、鯨海氏が編集長になり、にわかにも同人を大拡張し「史遊会」からの入会に加え「協和銀行」の同窓雑誌の色彩を持つようになった。「文芸雑誌」から「総合雑誌」に変換し、『まんじ』隆盛期を迎えた訳である。

しかし近年になると有力同人の老齢化や退会により、流石の「協和銀行組」も勢いに陰りが出ていた。その一方で、永畑俊三（永田俊二）氏を初めとして水谷嘉弘氏、岩上和道氏、井出晃憲氏、杉浦崇氏など都立戸山高出身者が相次いで入会して、いまや『まんじ』の主流を占める勢いである。

非協和銀行組として永らく『まんじ』にお世話になった私としては、この過渡期にまだ何らかの役割を果たせるかも知れない。そんなイメージをもつて、『まんじ』二一号から六〇号までの全作品のPDF化を継続していた。その結果、創刊号から最新号まで、約二千六百作品の九五%以上について、『まんじ』ホームページ誌上で簡単にアクセスできる体制を作り上げた。

正直に言えば、かつて書きたい事が次から次へと思いつかなくていた時期があったが、最近では「原稿」を提出してほっとしていると、すぐに次の「納期」が迫ってくる。その圧迫感を逃れるために、私家版百号を以て『ま

の『まんじ』は副題に「作家群」と付けていたが、その副題の「作家群」の名称が消えたのは私が入会した七五号から更に約二年後の八二号である。

初期の作品といっても、「作家群」の副題のついた作品の内、四〇号までで二五七作品もある。

まず手始めに、私が入会した当時、健筆をふるっていた大和禎人氏の初期の作品から読み始める。氏の作品は『作家群』時代に、昭和二十八年には「産院」、昭和三十年には「使節譚」、そして昭和三十五年には「雲の上」で直木賞候補作に取り上げられている。更には、『まんじ』に連載した「有院家の人々」（平成七年）、「相聞歌の女流」（平成八年）、「ひら仮名うさぶろう功名譚」（平成十二年）を次々に栄光出版社より上梓している。

まず、氏の作品を『まんじ』二〇号まで読んでみる。大部分が一〇頁以下の小品であるが、しっかりと読むと創刊号四頁の「母ひで」だけでもかなり大変である。

「母ひで」は九十二歳で病床にあるが、ゼロ歳児の曾孫四万子の成長と弱りゆく母のことを淡々と描いている。創刊号の初稿であり、おそらく力を入れて書かれた作品であろうが、大きな出来事もなく、丁寧に読まないとおもしろみが判らない。

後ほど調べると大和氏は御自身の作品について、『まんじ』五五号から五九号まで「自作自解わが作品余話」

んじ』を卒業しようと思っていたのである。ところが、『まんじ』創刊号から六〇号までの作品をPDF用にコピー入力しながら、「タイトル」や文章を眺めていて興味ある内容に出会うと、作業を中断して読み始めることがしばしばあった。これら初期の作品に学べば、まだ『まんじ』に書き続ける意欲が生まれるかもしれない。

そのため初期の『まんじ』が「作家群」の後継誌を名乗っていたことから、気になっていた当初の「作家群」のことから調べ始めたが、国会図書館には所蔵されていない。ただし各種文学賞候補の選考のため『文学界』の同人雑誌評の欄で言及された作品を拾ってゆくと「作家群」の実像がわかる。

『作家群』は昭和二十八年創刊され昭和四十年まで十六号が出版されており、十四作品が直木賞等の選考対象になっている。その中には後に『まんじ』の創始者となる大和禎人氏が三件、その協力者の三戸岡道夫氏が一件、森本俊正氏が二件、山本儀一氏が五件載っている。いわば文学賞を狙う「文芸誌」だったわけである。

現『まんじ』が「作家群」の後継誌として創刊されたのが昭和五十六年であるから十六年ぶりの復刊であった。

初期の有力同人（創刊号一〇号）を調べてみると『作家群』から参加した大和氏と三戸岡氏を除くと男性四名、女性二名である。タイトルをみただけでも初期の『まんじ』が「文芸誌」を志向していたのは想定できる。当初

を連載している。いわば大和氏の全作品について、自己評論を試みていたわけである。その中から「母ひで」の部分引用しよう。

この作品は旧「作家群」が「まんじ」として再出版するにあたり、創刊号のために書かれた。雑誌復刊の機運に供え、私はタイプライターを購入し、下版までの工程を受け持ったことであつた。

……………

ゼロ歳の曾孫と九十歳の嫗と、その生と死を描こうとした作品であつた。私小説をあまり書かない私だが、好評を得た掌編となつた。母の死はこれを書いた九ヶ月後の十一月二十二日のことであつた。

その他、作品のいくつかに、中学校の卒業式とか暴力事件とか素材としたものがある。どうやら教頭先生や校長先生の経験があるらしい。ネットで調べてみると、北区立北中学校の第七代目の校長として昭和四十八年一月着任し、五十一年三月に勇退している。そして昭和五十六年に三戸岡氏と語らい『まんじ』を創刊したわけである。

PDFへの入力をするが、大和氏の作品で特に目を惹いたのが『まんじ』二〇号に掲載された「阿多羅山涅槃・ある奇人伝」である。二十三頁の作品で、当時の『ま

んじ』の掲載としては最も長い部類の作品である。まず、この作品の冒頭の書き出しを引用してみよう。

その一冊の「智恵子抄」はそれこそ（葦編三たび絶つ）という形容が相応しいほどよく読み込まれていた。如何に彼が愛読したかを物語っている。昭和十六年八月竜星閣という書肆から刊行された初版本だった。

四六版、一五一頁のその本こそは彼の心の奥底まで魅了し、ついにはそのために幽明の境を見失うに至る運命を導いたのであった。

「智恵子抄」はその声価ゆえに後には二十七年版特装本まで出ているが、それはあの大戦争の開戦に先だつ、わずかに四ヶ月という時期の刊本であることに注目しなければならないようである。「智恵子抄」の高村光太郎は明治二十年下谷の鍊堀小学校に入学した時、父光雲が切出し小刀を与え、それが彫刻の契機に入る契機になった、と年譜に見える、しかし、同じ彼はいつぼうにより多くの詩作にも偉業を積み、敬仰して止まぬファンを多くもっている。わが柳浦源吾氏はまさにその一人だ。開戦前夜の暗い時代に氏はこの「智恵子抄」の何に魅せられたものか。およそ氏の素行のありようから言えばまさに不可思議としか言いようもない一人の人物伝である。

光太郎の詩「裸形」を並べただけでもちよつと不釣り合いなことにつく。「裸形」は初刊本の『智恵子抄』には載っていないのである。こんな些細なことを気にするから、私はなかなか「小説」を書けなかったのかも知れない。

作品の主人公柳浦源吾氏は、ここまでの文章にやっと一回名前が出ただけで。それは草野心平氏の「悲しみは光と化す」という一文の紹介、更には高村光太郎の「十和田湖畔の裸像に与ふ」の紹介が続くなかで、柳浦源吾氏を登場させ、十和田湖の湖面をわたってくる寒風にたえながら、「十和田湖畔の裸像に与ふ」を朗唱させるのである。

銅とスズとの合金が立ってゐる。

どんな造型が行はれようと

無機質の図形にはちがひない。

はらわたや粘液や脂や汗や生きものの

きたならしさはここにない。

すさまじい十和田湖の円錐空間にはまりこんで

天然四元の平手打をまともにうける

銅とスズとの合金で出来た

女の裸像が二人

影と形のように立ってゐる

いさぎよい非情の金属が青くさびて

智恵子の裸形をわたくしは恋ふ。

つつましく満ちてゐて

星宿のやうに森厳で

山脈のやうに波うって

いつでもうすいミストがかかり、

その造形の瑪瑙質に

奥の知らないやががあった。

智恵子の裸形の背中の小さな黒子まで

わたくしは意味ふかくおぼえてゐて、

今の記憶の歳月にみがかれて

その全存在が明滅する。

わたくしの手でもう一度、

あの造形を生むことは

自然の定めた約束であり、

そのためにわたくしに肉類が与へられ、

米と小麦と牛酪とがゆるされる。

智恵子の裸形をこの世にのこして

わたしはやがて天然の素中にかえらう。

この詩「裸形」を発表したのは昭和二十四年十月のことで、これが昭和二十八年の十和田湖畔の智恵子をモデルとした「乙女の像」の製作に繋がったのは間違い無いだろう。

ただ、このように大和禎人氏の『まんじ』原稿と高村

地上に割れてくづれるまで

この原始林の圧力に堪えて

立つなら幾千年でも黙って立ってろ。

そして、柳浦源吾氏はその場を立ち去りかね、湖面が茜染む時間までたたずんでいた。大きな、それは大きな感動が胸いっぱいを占めて、まるで呪縛にでもかけられたように動けなかった。

ただし、この「十和田湖畔の裸像に与ふ」は後年の増補された「智恵子抄」にも載っていない。柳浦源吾氏が十和田湖を訪問した時にはまだ雑誌には発表されていなかったのである。この件は後に述べる。

ここまでの約三頁の記述は、実質的には全て作者大和禎人氏が『智恵子抄』に感動している内容で、それを柳浦源吾氏の固有名詞を借りて、読者に主人公の感動を共有させる手法を採っている。見事な構成と感心もするが、これが文学賞を志向する「小説」の手法なのであろうか。

さて、この辺でいよいよ柳浦源吾氏の紹介がはじまる。彼の生い立った家は穀物商で裕福に育った彼は、目銭で米を買いに来る子の貧しさがどんなものかおもしろくない人物であった。

その源吾が奇蹟的に県の師範学校に合格した。奇蹟的というのは、彼の中学校の成績ではとても無理だとさ

れていたからである。戦時下のこととて、面接が重視され、持ち前の身体の頑健さが幸いしたという。彼の在学中に真珠湾の戦果とシンガポールの陥落があったが、戦争の激化、戦況が不利に傾くに従い、ろくに勉強なぞ身につかぬまま卒業、ついに召集にもあわずに終戦を迎えている。

「智恵子抄」との出会い、戦時下の抑圧された青春期に何とはなく詩的情緒に憧れを抱いたことだという。師範の定める義務奉公年限を過ぎると、やがて県外出向の上、僻地を希望して八丈島に赴任した。

その流人の島で彼が熱中したのは、流人に関する文献の調査である。「八丈島実記」七十二巻、島拔けに詳しい「朝日逆島日記」、流人の日記「八丈寢覚草」、「八丈志摩並伊豆七島之記」、また「八丈島存命表」や「家数人別書上帳」、「南汎録」なども読んでいる。

その上に、彼を捉えたのは、八丈島は黒曜石の遺跡で、石鏃や抗火石の石皿、縄文土器敷石住居跡も発掘されている。このような探索活動は「奇人」としての柳浦源吾氏を紹介する一環なのであるが、歴史考古学研究を生涯の趣味として過ごしてきた私にとっては、「奇人」というよりは好ましい人物に写る。

このように順調にスタートした八丈島の生活も突然「腸捻転」のため二年間で終わってしまった。ヘリコプターで身柄を筑地の病院に救急輸送されたのである。昭

訪れている。「千鳥と遊ぶ智恵子」の句は既に紹介したが、智恵子は昭和九年五月から年末まで九十九里の真亀納屋に転地静養していた。

また昭和二十八年十一月には、学校の職員が多数参加する研修協議会の慰労をかねて花巻温泉一泊の懇親旅行が行われた。その際に、柳浦源吾氏は宴席にはべっていた芸者とつれだって、そのまま姿を消して、旅館には戻らなかった。そして翌朝には十和田湖に向かっていく。

これが前出の「除幕式の直後」の柳浦源吾氏の十和田湖行であることはまちがいないであろうが、そこでは「彼はその日の内にバスで発荷峠を越え、黒沢尻へ出て、そそくさと帰京している。まだ独身であったし、貧しい懐ぐあいもあって夜行列車を利用しての旅であった」とあり、全く情景が合わない。源吾氏は既に結婚していたし、職場の慰安旅行を利用しての十和田湖行きであった。「十和田湖畔の裸像に与ふ」の句は既に紹介したが、その初出は「婦人公論」二八巻一号、中央公論社、昭和二十九年一月一日である。十和田湖「乙女の像」除幕式は昭和二十八年十月二十一日なので、あるいは新聞などで既に紹介されていたのかも知れないが、大和氏の創作かもしれない。

もう少し、その後の源吾氏のことを続けよう。

彼はその翌年（昭和二十九年）にはまたもや転任をしている。無断の欠勤その他、いくつかの不都合が、重

和二十七年九月十二日、朝日新聞は次のような記事を書いている。

離島の急患、空輸で入院

本社機救急活動に協力

無事手術に成功

記事中には柳浦源吾（29）教員とある。ここでやっと柳浦源吾氏の正確な年齢がわかる。一九二三年（大正二年）関東大震災の時には既に生を受けていた。終戦の年には二十二歳、師範学校入学年齢を中学二年生終了時の十四歳とすれば、師範学校卒業は十九歳である。師範の定める義務奉公年限を一二年とすれば、おおよそおさまる。

当時としては珍しく新聞記事沙汰となったヘリによる緊急移送で腸捻転の手術は無事におわったが、入院中に世話になった看護婦相良伊都子さんと急遽婚約し、八丈島に戻って、出し抜けに校長に交渉して強引に転勤を勝ち取った。在任二年で、それが昭和二十六年六月のこととある。これでは、ヘリ事件の昭和二十七年九月と合わない。しかも、転任先がどこにも載っていない。ただ後ほど転任が昭和二十八年四月のことで教科担当は体育とあるので単なる誤植なのであるか。こんな些細なことはどうでもよいが、読み手としては不安である。だから私は未だ小説が書けないのであろう。

その転任先の学校で、初めての夏休みに九十九里浜を

なっていて居づらくなった結果であった。こんどの学校は北辺、前任の区は（川向う）と相も変わらずドサ回りであると書いてある。ここに言う（川向う）は隅田川より東、江東区、墨田区、江戸川区、葛飾区、足立区など意味すると思われるが北辺は台東区の北辺を言う場合もある。放送禁止の隠語かもしれない。

彼はこんどの学校では化石収集を再燃させる。そこでは多少彼にも自重の気持ち芽生えたらしく、その後十年ばかりはおとなしくしていた。学校は昔、（深んぼ）と呼んで百姓が胸まで泥沼にかかる苦勞をした湿地帯で、そんな環境に白鷺の群棲する場所があった。白鷺の生態研究をはじめ、「市街化が進む中の白鷺」としていい研究テーマと思われたが、化石収集も更にレパートリーを拡げ、学校に勝手に収集場所を作って、相変わらずの面があった。このような雑務に対処するのは一般的に教頭の役割だという。ここに現れた教頭は年齢関係や漢学の素養から見ても、大和氏自身のことのように思われる。

化石収集は都営六号線の地下鉄工事ですます忙しくなった。昭和四十一年から四十五年頃のこととて、いくら置き場所に不自由しない学校でも困るようになる。教頭はその頃、源吾に次の漢詩を訓読して示す。

爾俸爾錄 なんじのほうなんじのろくは

民膏民脂 みんなうみんしなり

下民易虐 かみんしいたげやすきも

上天難欺　じょうてんあざむきがたし

これは戒名石と言われ、出典は中国唐宋のものであるが、福島の本松霞が城の通用門入口にあったと言う。公務に携わるものの戒めとして有名な漢詩なのだそうだが、教頭の専門は国語、しかも漢文で、大和氏自身のことであるのは、冒頭の「葦編三絶」の表現からも裏付けられる。これはねえ、君の心酔する「智恵子抄」の智恵子さんの生家にも近いところにあるんだよ。霞が城には「智恵子抄」の有名な句碑「樹下のふたり」

あれが阿多羅山

あのひかるのが阿武隈川

もある。

昭和四十八年四月二十九日、源吾は軽装で「ちよつと福島まで行ってくる」と言い残し、そのまま戻ってこなかった。彼の遺体は六月になって偶然安達太良山中で発見された。ナツザックのなかにぼろぼろになった「智恵子抄」が一冊見つかった。

大和氏の記述をたどり、かなり詳細にその内容を紹介したが、私の入会した頃の『まんじ』合評会は、いつも厳しい相互批判もあり、自ずとしつかり予習して出席しないと恥ずかしい雰囲気があった。

その習慣もあり、なにかの縁で『文芸同人誌』を送った。

た。

吉本隆明氏が感じた視線は私にも共通するものがあつた。氏は東京工大の新聞部の大先輩、同じような感想を生じるのはその所為であろうか。

『智恵子抄』に収録された詩は二十九編であるが、「智恵子狂いて」の六年間の詩は、人生遠視（*自分の妻が狂気*昭和10・1）、風に乗る智恵子（*狂った智恵子は口をきかない*昭和10・4）、千鳥と遊ぶ智恵子（*もう人間商売さりとやめて*昭和12・7）、値ひ難き智恵子（*智恵子はもう人間界の切符を持たない*昭和12・7）、山麓の二人（*わたしもう駄目になる*昭和13・6）、ある日の記（*智恵子狂いて既に六年*昭和13・8）の六編でゼームス坂の病院に入院してからの作品である。そのいずれの作品にも*内に「狂った智恵子」を意味する言葉を挿入している。

読みながら、『智恵子抄』に現れる事柄に私達夫婦にも共通することを発見する。

◆詩のなかにしばしば現れる阿多羅山は、私達も婚前と晩年、二度も登っている。

◆智恵子の終焉の地は私の育った懐かしい大井町のゼームス坂。

◆光太郎が初めて智恵子を上高地に誘って宿泊した清水屋には、ある夏、義母が避暑と療養を兼ねて長逗留し

て下さる方が居ると、礼状に簡単な感想文に『まんじ』も付けてお送りしていた。今でも一度もお目に掛かったことのない方から著書や同人誌を頂くと極力、全作品に目を通して感想文を送っている。私は「小説」を書くより「評論」を書く方が性にあっていられるかも知れない。それにしても大和氏の作品を丁寧に読んで学ぶことがおかつた。そして、この原稿を書きながら参考のため『智恵子抄』を読んだ。

『智恵子抄』は、光太郎が妻・智恵子を知ってから、智恵子が死ぬまでの三十年間にわたる作品を集めて、智恵子の死後二年目に出版したもの。その一部分は中高校生の教科書にも載っている。

実は、わが妻和子が四年ほどの闘病生活の後、今年の九月十四日に逝った。光太郎と智恵子の三十年間の歴史の丁度二倍の六十年間であつた。

『智恵子抄』を読んでいると、おおまかな流れも似ていて、小さな経験も、共通する項があつた。しかし、吉本隆明氏も指摘しているように、『智恵子抄』は相聞歌ではなく高村光太郎の一方の視点で書かれた「小説」である。

私も大和禎人氏の「阿多羅山涅槃」を読みながら批判的な感想をもつたのは、びとえに大和氏がこれを「小説」として書いているのを認めがたく思ったことにあつた。

ていた。私達も数回同泊し、上高地の散策や焼岳の登山を楽しんだ。上高地は彼らの実質的な新婚旅行地であつた。

◆智恵子はヨーロッパに行っていないが、光太郎は夢のなかで、一緒にベスビオス火山に登り、モンパルナスの坂に遊んだ。私達もベスビオス火山をナポリ側からとポンペイ側から見て、モンパルナスのサクレ・クール寺院の階段を登り、バリを眼下に見下ろした。

◆病院での智恵子の切り絵と和子の折り紙の挿話。和子を初めて欧州の計量史学会に伴った時、言葉の通じない彼女が和服を着て、折り紙を紹介し、座の主役のように堂々と振る舞っていた。

◆智恵子が逝く時のことを描いた「レモン哀歌」に和子の最後を重ねると、じわつと想いが募る。

◆優しいが芯が強く覚悟のよかつた智恵子、妻も優し

いが芯が強い女であつた。

最後になったが、『智恵子抄』の有名なフレーズを抜粋要約して示す。いつの日か私も私家版『和子抄』を書けたら良いなと思っている。

「あどけない話（昭和3・5）」

智恵子は東京に空が無いといふ、

ほんとの空が見たいといふ。

阿多多羅山の上に
毎日出てゐる青い空が
智恵子のほんとの空だといふ。

「山麓のふたり（昭和13・6）」
わたしもうぢき駄目になる
涙にぬれた手に山風が冷たく触れる
わたくしは黙つて妻の姿に見入る
意識の境から最後にふり返つてわたくしに絶がる

「レモン哀歌（昭和14・2）」
そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ
トパアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ばつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが
かういふ命の瀬戸ぎはに
智恵子は何との智恵子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた

それからひと時
昔山嶺でしたやうな深呼吸を一つして
あなたの機関はそれなり止まった
「荒涼たる帰宅（昭和16・6）」
あんなに帰りがつてゐる自分の内へ
智恵子は死んでかへつて来た。
十月の深夜のがらんだアトリエの
小さな隅の埃を払つてきれいに浄め、
私は智恵子をそつと置く。

高村光太郎は智恵子が逝つて二年後にこの『智恵子抄』を編集した。

你是一条河（ララ、あなたは帰らざる河）（その一）

池 莉 原作
山 本 勉 訳

はじめに

武漢在住の女流作家、池莉はこれまでに数多くの作品を手がけている。本誌にも『口紅』、散文『就这样爱上热干面』（こうして熱乾麵を好きになった）を掲載させていただいたが、作品の中に一九九一年に『小説家』に発表した『你是一条河』がある。この作品は、発表以降、現在把握しているものだけでも、以下のように各出版社から再版、加筆されている。

この度、翻訳するに当たり、江蘇文芸出版社から二〇〇六年四月に出版された『你是一条河修訂版』を翻訳し掲載する。なお、なぜ多くの出版社から再版、加筆して出版されたのかは、稿を改めて論じることにした。

○『你是一条河』（小説家一九九一年三期）初稿

○『你是一条河』（小説月報一九九一年七期）小説家から転載

○『九頭鳥叢書 你是一条河』（中国文学出版社 一九九五年六月）

○『池莉小説精選』（長江文芸出版社 二〇〇〇年一月）

○『中国当代作家選集叢書』（人民文学出版社 二〇〇〇年二月）

○『你是一条河修訂版』（江蘇文芸出版社 二〇〇六年四月）

○『池莉經典文集』（北京十月文芸出版社 二〇一〇年十一月）

(一)

あの夜は月の光が微かに赤みがかった。辣辣が黒い石が敷いてある路地から舗装した大通りに踏み込んだ途端、大通りの真向かいの好義茶館が大きな音を立てて倒壊した。大地は震え、ものすごい土ぼこりがけたたましい騒ぎの中で巻き上がった。こそこそと逃げる人たちが飛び散る建物の木板の間から、辣辣は彼女の夫がまるで天から降ってきたかのようにホール中央の煮えたぎったお湯の入った鍋の中に落ちて、一匹の大きな魚がピピチと跳ねるように藻掻いているのを見た。直ぐに続いて激しい炎がこの百年の茶館を飲み込んだ。

辣辣は身を躍らせて火の海に向かったが、蔣繡金は彼女の両方の足に抱きついた。かすれた声で天河花鼓（注記：湖北省の三大伝統演劇の一つ）を歌い、哀調を帯びた歌声で名を馳せた江漢平原の女優、蔣繡金がぼうぼうと髪を乱して瓦礫の中に横たわり、役者特有の情愛深い二つのきれいな目が深く悲しく辣辣をのぞき見ていた。

「この商売女！夫を返せ！」と辣辣は叫んだ。
蔣繡金はしがみついて離れずに言った。「奥さん、行つてはダメ」

辣辣は叫び声を上げながら、力の限り足を引き抜くと蔣繡金のからだに倒れ込んでしまった。二人はからだをねじりながら大通りを駆け回り、一筋の真っ赤な血が彼

女はこっそり裏口から抜け出して、襄河（注記：長江の最大の支流、別称、漢江）の堤防にはい上がって、ぶらつくように岩場を行ったり来たりして、周囲に人がいなくなるのを待って、服をまくり上げて、顔を覆い隠していきなり襄河に飛び込んだ。

意外にも辣辣の次女の冬児は抜け目のない女の子で、彼女は終始母親の行動をひそかに注視していた。辣辣が襄河の堤防にはい上がった時に、冬児は直ぐに叔父の王賢良に知らせた。近視のひどい王賢良が堤防で一頭のロバとぶつかっていなかったら辣辣は河に飛び込むことはなかった。一足遅かったが、王賢良は渦巻く河の中から兄嫁をうまく救い出した。

沔水師範附属小学校の先生をしている王賢良は彼の背中にうつ伏せになってびしょ濡れになっている兄嫁に言った。

「どうしてこんなことができるのですか？命は一つしかないのですよ！」

辣辣は夫の弟の上品ぶった慰めに返事をせずに、ひどく頭をたたいて大声で泣き叫んだ。

(二)

部屋に閉じこもって身体を拭いて服を着替えたときに、辣辣はヘソの上にあるひとつの赤い痣を見つけた。彼女は十四年前に人相見がこの赤い痣を指して言った不吉な

女たちのからだの下の方から流れ出てきて、ゆつくりと舗装した路にくねくねと広がっていった。

沔水鎮の住民は、この思いがけない災難にショックを受け、何と長い時間人々はぼんやりと眺めているだけだった。あちこち渡り歩いている見聞が広い飴細工職人の孫糖模が駆けつけて声を上げて叫んだので、みんなは一斉に前の方に進んでいった。

(二)

辣辣は三十歳の時に未亡人になった。

その時辣辣には七人の子どもがいた。一番上の子は得屋で十三歳、一番下の子は、男女の双子で、男の子は福子、女の子は貴子で、二歳になったばかりだ。その上、彼女のお腹の中にまだ妊娠四ヶ月半の子を身ごもっていた。身体強健の王賢木が生きていたときには、辣辣はこれまで避妊のことを考えたことがなかったので、産みながらなのは商売女だけだと思っていた。

一九六四年十一月一日の明け方、沔水鎮の心が温かくさっぱりした性格の住民が、三十歳の身持ちの辣辣を好義茶館の廃墟の中から担いで家に連れて来てくれた。彼女は七人のさめざめ泣き、ご飯を待っている子どもたちを見てまた気絶してしまった。

辣辣が再び目覚めたときはもう二日目の昼だった。部屋中の人が、忙しく葬儀を執り行っているうちに、彼

予言を思い出して身震いした。苦難に満ちた生活がある。あなたの未来の夫はこのほか気をつけなければならぬ！

当時は、いくら考えてもわからず、理解できない不吉な予言が、今日は意外にも的中した。まさしくこうなってしまったのではないか。こんなに多くの人が二階で観劇し、ただ王賢木だけ一人、湧き立った熱湯の鍋に落ちて、すぐさま激しく燃え盛る火に焼かれてしまった。予想したとおりになってしまった。これが運命でなくてなんなんだ？辣辣は運命の力に逆らえず震え上がった。彼女は理にかなっていない考え方から抜け出せず、片方の袖を通しただけだった。ほの暗い部屋の中でずっと、漢口から上がったってきた客船が長く尾を引く汽笛を鳴らすまで座っていた。

清光緒二十一年（一八九五年、明治二十八年）、日本の三井洋行（注記：三井物産の中国での呼称）が最初に繭を買い付けた外国汽船が沔水鎮に入ってきてから、毎晩十一時半に埠頭に定期便をつけた。一八九五年来、時世の移り変わりは激しく、汽船は何度も経営者が代わったが、しかし、この汽船は時間どおり定刻に到着し、到着時の汽笛が沔水鎮の住民の時報になっていた。一般の家庭では、汽笛が鳴り響くと灯りを消して床に就いた。王賢良は汽笛でせわしく目が覚め、深夜十一時半になっていたが数時間兄嫁の姿を見ていなかった。彼は慌ただ

しく部屋のドアを押し開けると、辣辣は「まあ」とひと声、夢から覚めて、慌てふためいてはだけた胸を覆った。

(四)

明け方の濃霧が沔水鎮をすっぽりと包み込んだ頃、辣辣はカトリック教会付近の朽ち果てた家の中から人相見の家を探した。十四年前に母方の祖母が彼女を騙して連れて来た。当時、十六歳の辣辣は正に王賢木ら仲間の青年とヤンコ踊り（民間舞踊）を踊り、腰に小さな太鼓を結んで、あの色白の人相見の氷のように冷たい長い爪が彼女のお腹に触れたとき、彼女はむず痒くてクスクスとしきりに笑った。

「これって迷信」と彼女が言うと、お祖母さんがパチンと彼女に平手打ちを喰らわせた。

「デタラメ言うのをやめなさい。後でひどい目に遭うから、おまえは笑えなくなるよ」

少しも気にも留めなかったので、辣辣はまったく人相見の家のことを覚えていなかった。ただ、壁に萌葱色のツタで覆われていたカトリック教会の前を通り過ぎると、やっと辣辣はほんやりとした記憶が蘇ってきた。解放後のことだ。カトリック教会は沔水鎮第一中学となりツタも枯れてしまっていた。あの萌葱色のツタを見かけることができなかったので、辣辣は自分が場所を間違えたのではないかと疑おうとしたが、幸いにも早起きしたある

てきたの？」

おばあさんの腹の中で直ぐに王賢木の声で僕だよ、僕だよと答えた！

辣辣は驚いておばあさんの前に跪くと、泣き叫んで言った。

「賢木！あなたはどうして私と子どもを残して行ってしまうの！どうやって生きていけばいいのよ！私を待って、直ぐにあなたのそばに行きますから」

王賢木の亡霊がすぐさま泣きだした。

「そんなふうに言うなよ！僕ももう寿命だ、仕方ないんだ！お前はまだ若い、子どもたちには母親が必要なんだ！」

夫婦はおばあさんのお腹越しに永遠の別れの胸の内を涙ながらに訴えた。亡霊の話は悲痛を通り越し曖昧だったのだ、全ておばあさんが通訳した。王賢木の亡霊は辣辣に絶対に命を粗末にすることなく、くれぐれも体を大切にしたいと繰り返し言い聞かせた。人は死んだらそれまでだ。現世の寿命は天が定めたのだ。ただ残念なことに私は自らの手であなたの涙を拭いてあげることもできない。私の妻よ！あなたは私の息子や娘たちを大きく育ててくれさえすれば、私は草葉の陰で心おきなく死ぬる。

突然、おばあさんはまた大きなあくびをした。

「時間になってしまった。閻魔大王が呼び寄せている」

おばあさんが、間違いない、曾ての人相見はここに住んでいて反革命運動を鎮圧する最中に政府によって銃殺させられたと彼女に教えてくれた。

「なぜなの？」辣辣は非常に驚いた。

「人相見は反動的な話をばら撒いたんだよ。なぜか台湾が大陸に反攻しようとしていると言ったのだ」

このおばあさんはゆっくりと話をしながら辣辣を観察した。辣辣が顔じゅう失望した面持ちでその場を離れようとしたときに、おばあさんは言った。

「姉さんよ、わたしのところには仙人のように見通しのきく人がいるんだ。あんたの身内はまだ遠くに行っていないよ。あんたは彼と話をしたいんじゃないのかい？」

辣辣は靈感のあるいたこのおばあさんに偶然巡り会った。古い歴史を持つ広大な江漢平原では、長いあいだ物事の吉兆を占うことが流行し、至るところに仙人がいた。辣辣はぐいとおばあさんの手をつかんで言った。

「夫と話をさせてください。お願いします。仙人さま」

おばあさんは辣辣を家に呼び込んで、彼女に一杯の水を淹れると二人は座った。すると、おばあさんは直ぐに靈感のあるいたこのおばあさんに変わった。おばあさんは大きなあくびをすると、慈悲深い姿が突然冷淡になって、ここに王賢木の亡霊を招き入れた。

「彼がやって来たよ」

辣辣は声を上げた。「賢木、私の旦那さん！あなた帰っ

辣辣は止めどもなく呼びかけた。「待って！待って！」亡霊は早口で喋って別れの言葉を言うと、誰かに連れ去られてしまったようだった。おばあさんはまた長いあくびをすると、枯れた蔓のような手で顔をさつと拭くとすぐに慈悲深い元の姿に戻った。慈悲深いおばあさんは辣辣の手を取って亡霊に代わって別れの最後の言葉を伝えた。

「あなたは、まだこんなにも若くて器量もいい。もし、相応しい人がいれば嫁いでほしい、息子や娘たちによくしてくれればそれでいい」

「姉さん、ほら、あなたの旦那さんは本当に物わかりがいい人だ。あなたと境遇の同じような女の人が私のところに来て旦那さんと話をしたんだが、どの旦那さんも奥さんに対して厳しくしているのさ。何としても再婚させないように言っただよ。私の見るところではね、軽々しく再婚すべきではない。あなたの子どもたちを恐らく苦しめることになってしまったんだ。後家をとおすのは苦勞するけれども、女の気概を守ることが出来るんだ」

辣辣は鬱積した生々しく痛む胸のつかえから解き放たれて言った。

「おっしやるとおりです、神さま」

「わかりました。家に帰ってやるべきことをやりなさい。古今にはひとつの道理があるだけです。わかれば良いのです。人の生死は神さまがお決めるのです。夫

婦はもともと一緒に生活するものですが、彼の寿命が尽きたときは、そうさせればいい。あなたは一生懸命あなたのことをすればいい。わかりましたか？」

辛辣は理解した。
「わかればいいんだよ。あなたたち夫婦が話をしたければ、いつでも来てくれればいい。もちろん、政府に知られてはいけないよ」

最後に辛辣はおばあさんに五毛（注記：中国の通貨の単位）を支払った。外へ出ると、深い霧が晴れ太陽が光り輝いていた。辛辣は気持ちが悪くなったように感じた。辛辣は遂に家から一步踏み出した。彼女は髪を梳かして、地味な服を着て、ハンカチを額に巻いて耐えがたい頭痛を鎮めた。

彼女は夫の弟に尋ねた。

「得屋たちは元気でしょう？ご飯を食べた？」

王賢良が肯定して返事をした後で、彼女は頷いて自分もご飯を食べに行き、お茶を飲んで便所に行った。それから、裁縫箱を取り出して、喪に服していることを表す喪章の白い綿布をひとつひとつ七人の子どもの靴に縫い合わせた。

“ヨーロッパ唯一の仏教国”カルムイキア紀行 ～草洋にたゆたう民族と人生～

井出晃憲

まだ学部学生だった1993年、初めて訪れたカルムイキア。“ヨーロッパ唯一の仏教国”と言われ、またロシア連邦内初の“資本主義者の大統領”がいる魅力ある国だった。当時はまだソ連崩壊の余波でロシア国内も混沌たる状態だった。モスクワではマフィアを名乗る3人組に襲われて金品を奪われる経験もした。そうした末にたどり着いた国である。その後も何度も訪問しており、この記録はその複数回の訪問を総じての印象記である。今から思えば懐かしい90年代のロシア連邦の雰囲気伝えるものとして、そのまま掲載する。

はじめての地へ

モスクワ郊外のヴィコボ空港に到着すると、そこには

もうロシアの田舎の雰囲気か漂っていた。この空港には地方都市を結ぶ国内ローカル便だけが発着している。故郷へ帰るのであるう、大きな荷物を抱えた普段着の人々で賑わっていた。エリスタ行きで搭乗手続きが始まると、まるで日本人のような顔つきをしたカルムイク人達が集まってきた。飛行機はモスクワから一路南へ向けて飛ぶ。3時間ほどして降下が始まると、草原の只中に小ぢんまりした町が見えてきた。目的地―カルムイキアの首都エリスタである。（写真1）小さな空港の滑走路に降り

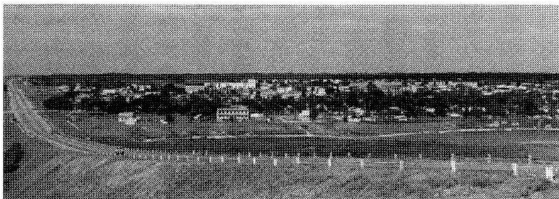
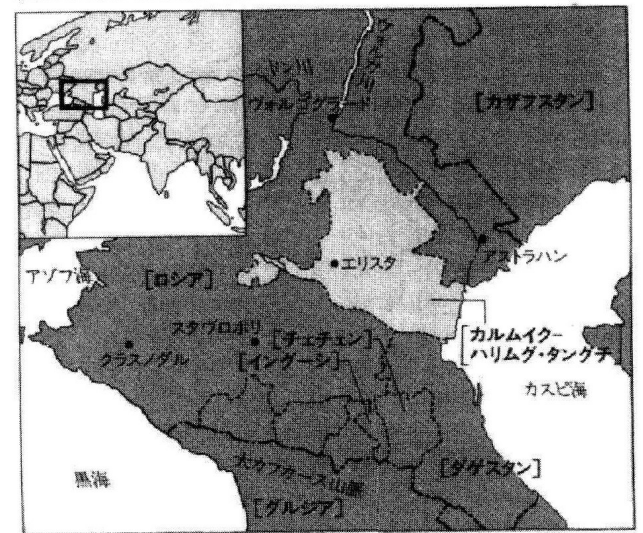


写真1 エリスタ市街地を臨む。1993年当時。

【カルムイク(人)】①—カルムイク—ハリムグ・タングチ共和国



出典 『世界民族問題事典』 平凡社 1995年

立つてぐるりと見回すと、辺りには何もなく地平線まで見渡せる。ちょうど西の果てに大きな赤い夕陽が沈んでいく黄昏時だった。

1993年の夏、私はロシア連邦のカルムイキヤ共和国を初めて訪れた。もともと内陸ユーラシア世界に憧憬を抱いていた私は、ある日『私が当選したら各家庭に100ドルずつ配る』と公約して大統領になった青年実

タングチ共和国という。ヴォルガ河下流の西岸、カスピ海の北西に位置し、面積は7万6千平方キロメートルで北海道よりやや小さく、人口は32万2千人である。首都とはいえエリスタは人口8万5千人にすぎない。(注1) 主な産業は牧畜だが、ロシア連邦のなかでも最貧国に属する。国土の大半は海拔0メートル以下の低地で、町を外れば単調なステップがどこまでも続いている。

カルムイキヤ人は、西モンゴル族オイラートの一部でチベット仏教を信仰する遊牧民であった。もともとは現在の中国・新疆ウイグル自治区のジュンガル地方に居住していたが、内紛や清朝の遠征により17世紀前半に現在の場所に移住してきた。勇武をもって知られる彼らは帝政ロシアに対して、北方戦争・ナポレオン戦争・露土戦争などの対外戦争の度に軍事的に協力してきたが、一方ではロシア人の入植やロシア正教への強制改宗への反発からラージンの乱・ブガチョフの乱などの農民反乱にも加わった。帝政ロシアの圧政により、一部のカルムイキヤ人は1771年に故地のジュンガル地方へ、その道中に人口が半減するような過酷な旅路を経て帰東したが、ヴォルガ河が凍結していなかったためにその西岸にいた人々を取り残され、現在当地に居住するカルムイキヤ人の祖先となった。(注2) ロシア革命後の1935年に自治共和国が成立したが、第二次大戦中にドイツ軍が一時期当地を占領したことから、ドイツ軍退却後の43年に

業家がいる』というカルムイキヤについての奇妙な新聞記事を目にして興味を覚え、その地へ行ってみようと決めたのだった。そんな単純な動機からの訪問ではあったが、その地に愛着を持ってしまいいく度々訪れている。世界地図を広げてみれば、東洋と西洋のあいだに横たわる広大な空間—内陸ユーラシア世界が眼に留まる。『シルクロード・ブーム』などで歴史的な視点からロマンチズムをもつて語られることは多いが、この地域の現状についての我々の知識はあまりにも乏しいのではないだろうか。とくに、ソ連という社会主義体制をしく巨大な中央集権的人工国家に包摂された地域は、国際社会の表舞台から長らく姿を消していた。ところが、ソ連崩壊後にこの地域は再び動きだした。固有の政治経済圏の復活や宗教の再興などで独自性を現しつつあり、一方ではチエチェンやカフカースでの戦争、さらに9・11以後はテロとの関連でクローズアップされてもいる。このように変動する内陸ユーラシアを把握する上でのひとつの手がかりとして、カルムイキヤを取り上げたい。この拙稿では、何度かの訪問の体験で得た印象を、とくに出会った人々を通して素描してみたいと思う。

ユーラシアの大海に翻弄された歴史

カルムイキヤは正式名称をカルムイキヤ・ハリムグ・

突然「対独協力の罪」を着せられて自治共和国は解体された。そして、ある日突然シベリア・中央アジア各地に強制移住させられたのである。この措置が撤回されて自治共和国が復活したのはスターリン批判後の58年であるが、そのときには人口がまたもや半減してしまっていたという。

再興する「民族」

毎回カルムイキヤを訪問して印象的なのは、失われていた民族の記憶を取り戻そうとする試みの数々がなされ、町が大きく変貌していく様子である。

93年の初訪問では、大学の教室の壁に大きくチンギスハーンの肖像が描かれているのを見た。ソ連時代には敬うことなど禁じられていたものである。町の食堂にはダライ・ラマ14世の写真が掲げられていた。ダライ・ラマはその時点ですでに何度かカルムイキヤを訪問していたという。また、カルムイキ語の表記に伝統的な文字であるトド・ビチュクが復活したのもその頃だ。読めない人も多いため発音表が新聞に掲載されていた。仏教寺院を訪ねる機会もあった。ロシア革命までは多くの寺院があったのだが、ソ連時代にほとんどが破壊され、当時エリスタで活動を行っていたのはたった一か所だった。そこで僧の読経を聞いたのだが、周囲の熱心に祈りを捧

げる人々の姿が心に残った。

それ以後、エリスタ郊外に大統領が私費を投じた大規模な新寺院が完成するとともに、町中には仏塔（ストウパ）がサンクト＝ペテルブルグから来たロシア人仏教徒の若者達の助力により完成し、その除幕式にはネパールからわざわざ高僧が招かれていた。（写真2）

国内各地にも寺院と僧が配置され、仏教普及のための国際交流も盛んになっている。98年には、大統領が国際チェス協会の会長をつとめていることにより国際チェス・オリンピックが開催され、町のはずれに豪華な建物



写真2 エリスタ市郊外の新仏教寺院。



写真3 エリスタ市郊外に建設されたシティ・チェス。

群が並ぶ別世界のようなシティ・チェスという区画もできた。（写真3）こうした催しを通じて世界に向けて自国をアピールしている。

レーニンはカルムイク人の血も引いているという理由で民族の英雄とされており、当地のレーニン像が破壊されることはなかったが、ある日突然180度向きを変えられた。（写真4）

背後に新しく仏像が建立されたためで、仏像に対してお尻を向けるのは失礼に当たるからだそうだ。また、西から東を征圧するのではなく東から西を見据えるのだ、



写真4 レーニン像と政府庁舎。像が180度回転した後。

とも聞いた。「東風が西風を圧する」との毛沢東の言葉が思い出される。毎週末にレーニン像前広場は野外デイスコと化す。大音響のもとで踊り狂う若者たちを足下に眺めつつ、偉大な祖先様はどんな気持ちでいるのだろうかと考えてみたりもする。

国土がヴォルガ河の西側に位置することから、「我々のルーツはアジアにあるが、今はヨーロッパ人だ。ここはヨーロッパ唯一の仏教国である。」という言葉が当地ではよく聞く。実際、カルムイク人は衣食住の面でロシアやカフカースの影響を強く受けており、言葉もモンゴル国のそれとはかなり異なる。このような重層的なアイデンティティは興味を惹かれるところだ。

それぞれの人生

この項では、現地で出会った幾人かの人達の生活史の一端を紹介したい。

ウランさん（仮名）は、中国・新疆ウイグル自治区出身のカルムイク人である。中国の大学を卒業してウルムチで教師をして経済的には安定した生活を送っていたが、どうしても自民族の国家カルムイクアに一家で移住しようと決意した。ウルムチからまずモンゴル国のウランバートルへ、さらにロシアのこの地へ。遠い道なりであった。同じモンゴル系であってもモンゴル国では大変

な差別に遭うなど、その道のりは平坦なものではなかったという。モンゴル民族としてのアイデンティティを持つてはいても、それがただちに汎モンゴル主義につながるものではなく、出自による確執もあるという。彼は、ウランバートルで妻との間にできた長女にイジルという名をつけた。カルムイク語でヴォルガ河を意味する。それだけ、この地への思い入れが深いのである。彼ら夫婦は働き者だ。移住当初は、ある人の好意で小さな小屋を借りて住んでいたのだが、今では自分たちのアパートを所有している。当地で次女も生まれ、今では一家4人のほか両親や兄弟も一緒に落ち着いた日々を送っている。

民族英雄叙事

詩「ジャンガル」

を謡う吟遊詩人

「ジャンガルチ」

であるオクナ

ツァガンハル

グさんを訪ねた。

（写真5）

ツァガンハル

グとは「白い



写真5 英雄叙事詩「ジャンガル」のモニュメントと吟遊詩人「ジャンガルチ」の像。

道」という意味だ。両親が望郷の思いでつけた名である。彼は強制移住先のシベリアで生まれたのだ。故郷に戻った後も、ソ連時代にはなお民族固有の文化をあからさまに表現することは不可能であった。だが、それらは密かに大切に守られてきた。彼が演奏を聴かせてくれた。伝統楽器ドンブラを奏でながら、ホーミーを織り交ぜて朗々と謡う。それは祖父父母から習い受けたものだが、自身はモスクワの大学に進み別の仕事に就いていた。転機が訪れたのはソ連崩壊の時である。彼は失われつつある民族文化を守ろうとジャンガルチを本業とする決心をした。今では民族衣装を身にまといて弁髪を結び、政府からは人間国宝のお墨付きをもらって立派な家も与えられた。フランスでCDを製作し、日本をはじめ世界各地にも演奏旅行に出かけている。彼の歌声を聞きながら、複雑な民族の歴史に思いを馳せた。

シベリアへの強制移住の後、自らの意志でサハリンに一時居住した人達もいる。生活環境の良さと高給のためだ。戦後間もない頃のこと、まだ多くの日本人がいた。サハリン協会長のセルゲイ・サガーエフさんは、サハリンで鉄道や缶詰工場に勤務した経験を持つ。彼は、仕事仲間で親しく付き合っていた「カネコ」という日本人の不慮の事故死をしみじみと語る。また、会津の職人の銘が刻まれた鋸を大切に保管していた。押して切る西洋式と違って引いて切る日本式は使いにくかったそうだ。



写真6 カスピ海の漁船。カルムイク人は遊牧の民であり、かつ海の民でもあった。

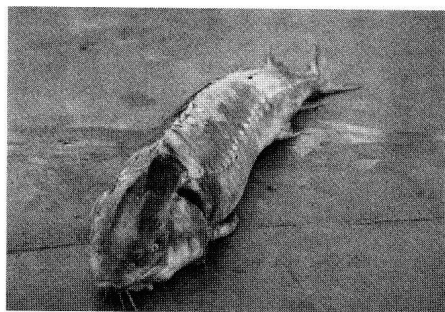


写真7 獲れたチョウザメ。名産品であるキャビアばかりでなくその身もおつなものだ。

そして、日本人が建立した寺に密かに参拝していたとも言う。意外なところに東の果てと西の果ての仏教徒の出会いがあったのだ。

日本人といえば、カルムイク南部の寒村に一人の日本の老人が住んでいる。元兵士でシベリア抑留を経験した中川サダオさんだ。1919年東京の生まれで、軍学校を卒業してパイロットになった。マニラ沖海戦など南方戦線に従軍した後、45年にユジノサハリンスクに転属して終戦を迎えた。抑留の後、49年に帰国を許されたが残る道を選んだ。その理由は、病氣療養のため、惚れた女性がいいため、など尋ねる人ごとに答えも変わるという。語れない事情もあるのだろう。こうした未帰還者は、いまだに数百人に上るといふ。厚生労働省は旧ソ連内に462人が残留しているとみる。(注3)だが、現地調査をしなければその正確な数は把握できないだろう。未帰還者が高齢化している現在、早急の調査が望まれよう。中川さんは、ウズベキスタン・ダゲスタンを転住して、82年にカルムイクアにやって来た。2年という約束の仕事のためだったが、おいしい魚が気に入って定住したとか。(写真6, 7)

今では、三番目の妻とその家族とともに住み、人造湖の水位管理の仕事をしてながら、村の子供達に「ザーシャ」と慕われつつ一緒に釣りを楽しむ。中川さんからは「ありがとう」の一言以外日本語は聞かれなかった。自分の名さえ漢字が思い出せない。日本への帰郷を望むかという問いにははっきりとは答えてくれなかった。印象深かったのは、真つ直ぐの一本道を帰る私達の車が地平線の彼方に消えるまで、いつまでも直立して手を振り続けてくれたことだ。帰り道の両脇にはいつの誰のものかも分からない古代人の墳墓が点在していた。

カルムイクには「アルグ・ホルワ」という言葉があるという。人生さまたまという意味だ。それぞれの人生そして興亡する民族と、それらを飲み込む変わらぬ広大無辺な大地。そのコントラストが私の心を捉えた。

舵取りの行方

冒頭で触れた、大統領となった青年実業家というのは、キルサン・イリユムジノフ氏である。エリスタのごく普通の家庭に生まれた彼は、モスクワ国際関係大学の日本語学科を卒業して一時期日ソ合弁企業に勤務した後、経済自由化の波に乗ってビジネスで成功し、年商5億ドルの富豪になったという。1993年に30歳の若さで保守派候補に圧勝してロシア連邦内初の「資本主義者の大

統領”となつてからは、大規模な政治改革を進め、私費を投じての経済安定化を行い、カルムイキアは“ロシア急進派の実験場”と呼ばれた。

初訪問時に、国民が大統領に直接面会して相談できる制度があると聞いて、私達も政府庁舎を訪ねてみた。残念ながら大統領はモスクワ出張中であつたが、そのかわり補佐官をしているキルサン氏のお兄さんに会うことができた。執務室の前には、幼い子供の手を引いた母親や老夫婦など何人かの人々が列を作っていた。私達の順番が来ると彼は温かく迎えてくれた。「このような制度は非常に素晴らしい」と感想を述べると、彼は嬉しそうに頷いた。そして、ステップを見学したいという私達の唐突な願いを叶えてくれ、政府の公用車を差し向けてくれた。大統領が日本と関わりを持つことから、非常に親目的な雰囲気を感じた。何人かの口から「世界に日本語の話せるプレジデントは三人しかいない。日本の首相とペルーのフジモリと我が国のキルサンである。」という言葉聞いた。(実際には当時、日本語を話すプレジデントは他にもいたが。)

それから時が経ち、大統領に対する評価もさまざまである。民族主義的な施策を執る一方で、自国憲法を廃してロシア連邦内に留まる意志を明確にするなど、バランス感覚に優れているとの人物評がある。とはいえ60あまりもの民族を抱える同国において、カルムイク民族を

りなどした。その中の一人は環境省の次官だつた。この例も含め、非常に若い人達がこの国を支えている。我が国の明治維新でもそうであつたように、大きな時代の変革期には若い力が必要なのだろう。政府要人が全員短期間ウクライナに出かけ、その間若手官僚だけで国家を運営するという実験的な試みもなされたという。新しい国づくりの担い手としての自負を彼らに感じた。その友人達の今後の舵取りに注目していきたいと思つている。

最後に、カルムイク民族の特徴として重要なのは、ディアスポラ(民族離散)の状況にあるという点だ。歴史の項で既述したように、ロシア連邦以外では、中国・新疆ウイグル自治区に多く居住している。そのほか、スターリン時代に亡命した人達がヨーロッパ各地、さらにアメリカのワイラデルフィアやニュージャージー州などにコミュニティをつくつた。ソ連時代には、各地域のカルムイク人達が連絡を取り合うことさえ困難だったが、現在では相互の交流が活発になつている。エリスタで知り合つた音楽家も新疆でコンサートを開催してきたばかりだつた。面白いことに、二百年以上の隔絶の期間を経たにも関わらず、「ブムブルジャン」という犬を題材にした戯れ歌が、双方で変わらず歌い継がれていたようだ。カルムイキアから仕事や留学で親族を頼つて欧米に移住する若者も増えている。また、中華民国(台湾)の行政院には大陸時代から蒙蔵委員会という部署があり、現在



写真8 大統領とダライ=ラマ14世が握手した町中にあるポスター。

中心に据えた施策は他の民族には不評だ。それが失業問題などとも絡んで反大統領の気運を高めている。さらに、独裁傾向への批判もある。民族衣装で馬にまたがったり、ダライ=ラマと握手したりした、たくさん大統領の宣伝用ポスター。(写真8) ほかにもラベルに大統領の写真をつけたキルサン・ウオツカなるもので売られている。今後どのような政治的展開が見られるだろうか。

カルムイキアと関わりを持つて最も有益だったのは、同世代の若者たちとの交歓だ。彼らと露天のバーで夜遅くまで語り合つたり、ヴォルガ河にキャンプに出かけた

では中国本土以外に居住するモンゴル・チベット民族との提携を図っている。同委員会の仲立による交流も、国家間関係を見るだけでは分らないもので興味深いところだ。

交通・通信の発達でグローバル化の進展する昨今、国際情勢の舞台裏では、離散したマイノリティのネットワークの緊密化や、それによる新たなナショナリズムの勃興も顕著だ。私は、漠然としてはいるが、ヒト・モノ・情報の移りや交わりを研究テーマにしたいと考えている。その意味からも、ディアスポラとしてのカルムイクのありようは、さまざまなことを教えてくれる。これからも、ひとつのフィールドとして関わりを持ち続けたいと思う。

(初出・大東文化大学アジア地域研究科『大東アジア学論集』第4号 2004年3月)

思えば早いもので、最後の訪問から24年の歳月が流れた。その間、世界は協調から分断へと潮流が変わり、ロシア連邦内では強権的支配が強化された。キルサン・イリユムジノフ大統領はすでに退任し、連邦の規定で、構成共和国の選挙制による大統領は廃され、任命制による首長となっている。今はロシアによるウクライナ侵攻が行われており、カルムイキアも戦場から遠くない。

ロシアからのニュースでは、少数民族が前線に送られ死傷者をより多く出しているとのことで、カルムイキアの若者についても気がかりなところだ。

カルムイキアで知り合った親友2人のうち、一人はすでに故国を離れフランスのバリで中国大手通信会社の仕事をしている。もう一人は絶縁してしまい今になるまで消息がわからない。

〈注〉

〔注1〕

『ロシア・ソ連を知る事典』 平凡社 1989年に記載のデータによる。

〔注2〕

このため、カルムイクという語はトルコ語の「カルマツク（残った）」から派生したとの説もある。

〔注3〕

朝日新聞2002年12月2日「旧ソ連に強制連行された日本人 未帰還者、いまだ数百人」による。

〈参考文献〉

（単行本）

トウリシエン「著」 今西春秋「訳注」 羽田明「編訳」
1985年『異域録―清朝使節のロシア旅行報告』

著書出版の動機

「失敗しないシステム企画

―経営コンサルタント視点でビジネスを捉える―

隈 正雄

昨年、これまでの研究成果を総括する形で、著書を出版した。システムエンジニア向けの啓蒙書である。システムエンジニアは真摯に技術を習得するが、経営や業務にはあまり関心を示さない。企業情報システムを構築するには、技術だけでなく、経営や業務の視点が不可欠である。そうした背景から、システムエンジニアが経営面の理解を深める一助となるよう、本書を執筆した。

企業情報システムという分野は、馴染みの薄い方もいらっしゃるかもしれないが、ご容赦願いたい。

1. DXの課題

1.1 DXの現状

平凡社東洋文庫445

宮脇淳子『最後の遊牧帝国―ジュンガル部の興亡』講談社選書メチエ 1995年

リヴァー「著」辰巳篤夫「訳」『追はれて半減し生きた民族―トルグート族』（第一部・第二部）生活社 1940年

歴史的な視点から、比較的手しやすい和文献を列挙した。

（新聞記事）

本田直人「記事」鎌田正平「写真」朝日新聞日曜版 2001年7月22日「仏教国 欧州でただ一つの

―カルムイキア」（旅する記者50人）
筆者の幼なじみでもある記者が、筆者とともに同国を旅した記録。

はじめに本書における「DX（デジタル・トランス・フォーメーション）」という用語の使い方について説明する。DXという言葉は、使用者によって非常に多様な意味で用いられており、統一された理解が難しい側面がある。経済産業省のDXの定義では「データとデジタル技術を活用して、業務そのもののや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」とされている。本書では、この定義に基づき「デジタル技術を活用し、ビジネスモデル及びビジネスプロセス変革するなど、企業そのものの大変革」という用語として使用する。

DXの必要性は広く認識されている。しかし、DXの成功事例はあまり聞かれない。その理由の一つは、経営

者の理解や支援不足と言われている。もう一つの要因は、DXを推進できるスキルを持つ人材が不足していることである。

多くの企業では社内にDX人材がおらず、DXはデジタルの問題としてITベンダーに依頼している。ITベンダーのシステムエンジニアは、デジタル技術や情報システムの開発、さらにプロジェクトのマネジメントには習熟している。

しかし、DXは単なる情報システムの開発ではなく、プロセスの大改革やビジネスモデルの改革までも対象とする。したがって、ビジネス知識が大前提となる。多くのシステムエンジニアは、ビジネスを体系的に学習する機会が少なく、十分なビジネス知識を有しているとはいえない。

そのため、現状では的確にDXに対応できるシステムエンジニアがあまりおらず、これがDX進展を妨げている要因と考える。

1.2 システムエンジニアの能力

DXは情報システムの開発に留まらず、プロセスの大改革やビジネスモデルの変革も含むものである。そのため、DXを推進する人材には、システムエンジニアの能力（デジタル技術ノウハウ、プロジェクト管理能力）、経営コンサルタントの能力（ビジネス知識）が必要となる。

もちろん、これらの方法によってDXが成功するケースもある。

しかし、多くの経営者はDXを情報技術の問題だと考えており、そのような経営者を説得してDXへの認識を変えるのは難しいことである。また、既存の本でも、従業員の理解や協力を得る方法が、具体的に説明されているものもある。しかし、従業員の中には次のような考えを持つ人もいる。

- ・DXへの不信「なぜDXなどをやる必要があるのか。コンサルティング会社から押し付けられたのか。私たちは今の仕事に慣れ親しんでおり、それがうまくいつている。なぜ変える必要があるのか。」

- ・DXへの不安「DX改革によって新しい仕事を覚えることができないかもしれない。最悪の場合、仕事がなくなり、リストラされるかもしれない。」

- ・傍観者「これまで多くの改革が行われてきたが、ほとんどの改革がうやむやになった。適当に要領よくふるまっていればDXもそのうち消えるだろう。私たちの会社は終身雇用と年功序列で、業績もまずまずだ。何も苦労して改革しなくても何とかなるだろう。」

- ・既得権を守る「私の仕事は他の誰にもできないものだ。だから、会社から頼りにされ給与も高く、わがままも通る。もしDXで誰でもできるようになれば大変だ。表立って反対はできないが何としても私の仕事を

システムエンジニアはデジタル技術と情報システムの開発、さらにプロジェクトのマネジメントのスキルも持っている。しかし、ビジネス知識に習熟しているとは限らない。これは、システムエンジニアの教育が主にデジタル技術に焦点を当てられているためである。

システムエンジニアは、システム設計技術なども習得しており、これらの技術は汎用的にシステム開発へ適用できるため、特定の業種や業務に限定されないのが特徴である。その反面、具体的なビジネス知識については、ほとんど含まれていないのが実情である。

そこで、多くの技法では、ビジネスへのアプローチをユーザーニーズに基づいて分析する方法を取っている。ユーザーにDXについて理解してもらい、意思の疎通を十分に取れば、適切なユーザーニーズが把握できるという性善説に立った技法である。

しかし、次項で説明するが、実際のユーザーニーズは、誤解や部分最適、DXへの抵抗などが含まれていることもある。ユーザーニーズに基づくDXには落とし穴があるということである。

2. 既存のDX書籍のアプローチ

DXに関する書籍は数多く出版されている。これらの本には、DXを成功させるための手順などが説明されており、経営者の理解や協力を得る方法も記載されている。

変えさせない。」

多くの従業員はDXに協力してくれるかもしれない。しかし、上記のような考えを持った人も一定程度いるのである。つまり、企業にもよるが、従業員もシステムエンジニアの説明だけで、DXに協力してくれるとは限らないのである。このように、多くのDXに関する本は、性善説に立って述べられているところに限界があると考ええる。

3. 課題解決への本書のアプローチ

以上のようなDXの現状やシステムエンジニアの能力、DX関連書籍やシステム設計技法のアプローチを踏まえ、本書は「DXに必要なでありながら、システムエンジニアに不足しがちなビジネス知識」について、経営コンサルタントの視点から執筆したものである。

情報システムの企画において、経営コンサルタントは、情報技術面では当然システムエンジニアに及ばない。しかし、経営コンサルタントは、企業の意味決定を行う経営層へのアプローチにはたけている。経営層の意向と乖離があれば、コンサルティングは成功できないからである。また、ユーザーや業務の表面だけを見るのではない。ユーザーの本音や業務実態を見抜く力も持っている。

経営コンサルタントの専門分野のビジネス知識はDXに必須である。しかし、ビジネス知識の元になる経営学

のすべてを、必要とするのではない。DXに対応できるエンジニアは「経営のプロ」ではなく、「ビジネスシステム構築のプロ」なのである。企業を発展させるべく「ビジネスシステム」の企画立案を行うのである。簡単にいえば、もうかる「仕組み」の立案といえる。

システムエンジニアは、経営学の中から「もうかる仕組み」を企画立案するのに必要な分野を必要程度に応じて、習得すればいいのである。ただ、経営学の理論をDXに適用するにはそのまま適用することはできないこともある。企業の実情に合わせて、アレンジするノウハウも必要となる。

DXでシステムエンジニアに特に必要とされるのは、経営者へのアプローチ、業務実態の把握、ユーザーの本音を見抜く力等である。そして、本書の視点は、現実の企業実態を見抜くべく、性善説ではなく性悪説に立つて、ビジネスプロセスや企業風土を捕らえることができるものである。

つまり、「経営コンサルタントの視点によるシステム企画」とは、「経営学の中から、DXの企画・推進に必要な知識を抽出し、DX推進に適用できるようにアレンジしたもの」といえる。そして、本書の視点は、現実の企業実態を見抜くべく、性善説ではなく性悪説に立つてビジネスプロセスや組織風土を捕らえたものである。具体的には、以下の3つのアプローチからなる。

- ・第7章では、経営戦略のとらえ方と経営戦略をプレイクダウンし、どの業務をどのように改善すれば、経営戦略が実現できるかについての方法を述べる。
- ・第8章では、経営コンサルタントの視点から、経営者の思考を分析し、経営者の本音の把握と対応策の方法を記述する。

- ・第9章では、経営コンサルタントの視点から、従業員

の思考を分析し、従業員の本音の把握と対応策の方法を記述する。

本書の特長は、従来の方法論ではほとんど取り上げない、経営者・従業員の本音など、組織風土まで踏み込んだことにある。ここにDXの失敗の主要因があると考ええるからである。

【紹介文献】

隈正雄『失敗しないシステム企画―経営コンサルタントの視点でビジネスを捉える―』

技術評論社、2024年

- ・システム設計技法のアプローチではなく、経営学からのアプローチ

- ・DX推進に必要な経営学の分野を抽出
- ・DXに適用できるようにアレンジされたノウハウ

筆者は情報システムの上流工程を、12年にわたるコンサルティング経験を元に、20数年にわたり研究してきた。しかしながら、様々なシステム設計技法等が開発されているが、情報システムの失敗は後を絶たない。やはり、性善説でユーザーニーズに頼り切った立ったシステム設計技法には限界があると考ええる。本書は研究の集大成として、システム設計技法にビジネス分野からのアプローチを試みたものである。

4. 著書の概要

主な内容は以下の通りである。

- ・第1章から第2章で、「経営コンサルタントの視点」とは何かについて説明する。
- ・第3章から第6章で、企業実態を把握しビジネスプロセスを改革する方法を説明する。既存の方法論でも対象としている分野であるが、経営コンサルタントの視点から、生の人間が働いている企業の実態に焦点を当てたものである。

縄文の魂が宿る神仏習合の山

田 寺 怜 葦

令和七年九月三十日（火）に茨城県日立市にある御岩山に行つて来ました。

この山の古称は賀毘礼山（かびれさん）と呼ばれ、縄文時代晩期の祭祀遺跡が発掘されています。社の創建時期は不明ですが、日本最古の書の一つである「常陸国風土記」（七二一年）には、「浄らかな山かびれの高峰に天つ神鎮まる」と記されていることから、古代より信仰の聖地であったことが推測されます。中世に入ると山岳信仰と共に神仏混合の霊場となり、江戸時代に至っては水戸藩の祈願所となりました。御岩神社の主なる御祭神は国常立尊（くにとこたちのみこと）・大国主命（おおくにぬしのみこと）・伊邪那岐尊（いざなぎのみこと）・伊邪那美尊（いざなみのみこと）他二十二柱の神様が祀られています。また、その奥にある「かびれ神宮」には天照大神・邇邇芸命（ににぎのみこと）・立速日男命

になりました。

私がこの話を知ったのはつい最近の事です。ここ数年は、世界を覆う不穏な情勢に頭も心もかなり疲れていました。一向に終わらないロシア・ウクライナ紛争、中東ではイスラエルとパレスチナの戦争。そしてヨーロッパの多くの国々では移民問題の破綻から激しいデモが多発、国内でも政府の愚策による経済低迷、美しい日本の自然を破壊して増殖するメガーソーラー等々、暗黒の時代を予感させられることばかりです。世界はどうなってしまうのでしょうか。日本はどうなってしまうのでしょうか。人生の終わり近くにこんな時代が来るとは思ってもいませんでした。そんな鬱々とした気分で、普段はあまり開くことがない神社仏閣のSNSのサイトを見始めていました。そして目に留まったのが「宇宙から見える光の柱」というタイトル。茨城県日立市にある御岩神社との出会いでした。

日々情報を得るほどに行きたい気持ちが強くなってきました。交通手段は電車か車ですが、日立駅から遠く離れた山奥の神社はどう考えても車が便利でしょう。高齢の自分としては時間的な余裕をもってゆつたりとした旅をしたい。そこで日立駅近くにホテルを取りました。思い立ったが吉日です。

車の運転にはまあまあの自信がありますが、最後に首都高を走ったのは十何年も前でした。急に不安が沸き上

（たちはやひをのみこと）の三神が祀られ、山全体では百八十八柱の神様と仏様を祀る神仏習合の真正正銘の霊山といわれています。山じゅうが神様だらけというか、この岩山そのものがご神体なのです。お賽銭用の小銭は山ほど持つて行ったほうが良さそうです。山の一部では白亜紀やカンブリア紀の地層も見られます。

この御岩神社が有名になったきっかけは、意外にも二人の宇宙飛行士の証言でした。一人はアポロ14号の宇宙飛行士であるエドガー・ミッチェル氏、もう一人は日本人初の女性宇宙飛行士、向井千秋氏です。この両氏が、宇宙から見える地球上の不思議な光の存在に気付き、その緯度と経度を調べたところ、その場所が日本の御岩山だと判明したのでした。エドガー・ミッチェル氏は後日來日して、実際に御岩山を訪れたとのこと。この逸話をきっかけに御岩山はパワースポットとして一躍有名

がりましたが、「来年は難しいかもしれないけど、今ならまだ大丈夫」とポジティブ思考に切り替えました。

九月二十九日（月）、首都高の渋滞状況を見て、出発は遅めの十一時頃になりました。車での一泊旅なので準備は簡単なものです。横浜の三ツ沢入口から入り羽田方面に進みます。久しぶりの長距離高速走行に緊張感とワクワク感が高まります。

もともと首都高は苦手でしたので慎重に安全走行を心がけました。何箇所か軽い渋滞はありましたが、比較的順調に進んで十三時半頃には守谷サービスエリアで休憩を取ることができました。

三郷インターから水戸までは三車線なので、スピードも楽しめる快適ドライブです。常磐道は水戸より先未經験だったせいもあり、水戸から日立インターまでの距離が実際以上に長く感じられました。トラックの数が急に増えるようです。

日立駅近辺はコンパクトながら、スツキリとした近代的な街並みです。辺りには似たようなホテルが幾つかあり、方向音痴の私は駅付近をぐるぐると車で彷徨う羽目になりました。毎度のことではありますが目的地に辿り着いた時には正直ホッとします。ホテルの部屋は狭いけれど快適でした。一番印象的だったのは寝る前に窓から見た夜景です。大都会とは違い街の灯りは控えめながらも計算されたように愛らしく、慎ましく、疲れた神経を

癒してくれました。

翌日は薄曇りで、風が涼しく感じられる登山日和？でした。日頃から夜型生活の人間には辛い七時起きでしたが、この朝は目覚ましのお世話になることもなくすっきりと目覚めました。九時前にはチェックアウトを済ませ、車のナビを御岩神社にセットしていざ出発です！国道三十六号線で約十キロの道程。山道は当然のことながら上るほどにカーブがきつくなりましたが、これまでの経験の中では初級クラスの「いろは坂」と言ったところでしょうか。ウィークデーのせいか車の数も少なく、風景を楽しみながらの運転です。やがて道の前方に御岩神社と読める白い立て看板が見えてきました。近隣は木々と緑一色。その所々に朽ち果てたような家や、とうの昔に閉店したと思える食事処の看板の建物が見られます。神社入口付近にパーキングがあり、「パーキング1は満車のため2、3、4にお願い致します」との張り紙がしてありました。平日でもそこそこの人が訪れているようです。

神社の正面鳥居前広場には社務所があり、お守りやお札などが売っていましたが、それ以外にはトイレと自販機くらいしかありません。社務所も質素なものです。観光地化した神社仏閣とは少し異なる雰囲気を感じましたが、知らぬが仏の脳天気な私は、足取りも軽やかに修行の岩山への一歩を踏み出しました。

石造りの白い鳥居をくぐると一面の杉木立。砂利道を

ない多くの古い石碑が苔に覆われていました。杉木立を通して降り注ぐ神秘的な光と美しい苔に魅了されながら御岩神社を目指します。御岩神社の手前に小さな祠と鳥居があり、姥神という子育ての神様が祀られていました。出産を控えた若い知人の顔が浮かび、安産を祈りました。参拝道の所々には小さな祠とセツトの小さなお賽銭箱があるので、財布の小銭は徐々に軽くなっています。この山中に散らばっている大小のお賽銭箱の集金は誰がするのでしょうか。さぞかし大変な仕事だろうと、俗な考えがふと頭をよぎりました。

御岩神社に到着。二十六柱の神様がおられる神殿にしてみれば小ぢんまりしていますが、神殿の大きさと中身の価値は比例しません。

御岩神社参拝直後、早くも自分の浅はかさに気付く羽目となりました。「山登りには必ず飲み物を御持参下さい」という注意書きが目に入っただけです。山の何処かに自販機の一つくらいはあるだろうと思いついて己の都会病が悔やまれます。入口の自販機で買えば良かった。それ以前に、もっと下調べをして来るべき場所でした。持参していた小さなペットボトルはほぼ空です。慌てて神社付近を見渡しましたが案の定自販機はありません。どうしたものかと思案の末に、神殿の隣にある祈禱者の待合所の引き戸を開けて声を掛けてみました。応答はなく人の気配もありません。不法侵入者の気分で恐るおそ

数歩進んだ時に、急に胸がいっぱいになりました。涙が溢れそうになったのです。本当に不思議な感動でした。この不思議な感動の原因が何なのか分からないまま、ゆつくりと歩き始めました。神社仏閣は人並みには訪れていますが、こんな気持ちになったのは初めてでした。答えは御岩山を参拝し終わった時に出るのでしょうか。

正面入り口の鳥居をくぐるとすぐの左側に愛宕神社があります。神社と言っても、見過ごしてしまいそうな岩の上に造られた小さな神社で、素通りしてしまいう人も多いようです。崩れそうな石段をよじ登って参拝をしましたが、下りはスニーカーでも足を滑らせそうで怖いですが、静かな杉木立の木漏れ日の中、砂利道の音だけが響きます。道を進むほどに辺りの空気がより清らかに軽やかになっていきます。道の右側に御岩山の御神木である推定樹齢五百年の「御岩山の三本杉」がそびえていました。根元から三股に分かれて伸びる杉の木の間には天狗が住んでいたとか。

緩やかな上り坂の先に楼門（大仁王門）が見えてきました。この門は平成に入ってから百二十年ぶりに再建されたとのこと。それほど大きくはありませんが、左右に仁王像、天井には日本画家である浜田泰介氏の「日天月天図」が描かれています。こんなところに神仏習合の不思議さが伺えます。

本殿に向かっていく道沿いには、既に文字も判読でき

る中に入りキョロキョロすると、トイレの外の廊下の手洗い所がありました。「やはり神様が守って下さっている。」と身勝手に納得しながら蛇口をひねり、ペットボトルにありがたく水を満たします。お札の言葉を言って引き戸を閉じましたが、世が世であればこれは明らかに水泥棒となるでしょう。

御岩神社を過ぎると片道一時間の本格的な登山道になります。表参道・裏参道の標識を確認して、登りは表参道を選びました。道の両脇の木を柱にして張り渡されたしめ縄をくぐると、道は次第に木の根と岩の欠片が創り上げた荒々しいオブジェに変わっていききました。杉木立を通して差し込んだ陽の光は、きらきらとした小さな宝石のように空中に散らばって、辺り一面の美しい苔の上に落ちていきます。苔好きの私は思わず、その冷たく柔らかな緑に手を差し伸べました。手の平から古代の息吹が体中に伝わって来るようです。小さな子供となった私の魂は、暫し清らかな異世界で遊び戯れました。東の間の休憩の後、一段と険しさを増した道を進み、かびれ神宮にたどり着きました。時空を超えたような空気の中にひっそりと気高く佇む神宮は、質素で清楚な大和心を具現化したような建物です。ここからはいいよ本格的な登山道となり、御岩山頂、かびれの高峰を目指します。私以上に軽装で、革靴、サンダル履きの方はここで引き返すのが正解かと思えます。（そんな方はいないとは思

います。実際に禁止とされていきました。白亜紀の地層を過ぎてカンブリア紀の地層に入ると、道はますます急勾配となつていきます。時折出会う人が手にしていた杖の意味が身に染みて納得できました。生来インドア派の私にとって、杖を持つての山登りは後にも先にも小学校の遠足で行った筑波山だけです。

一歩ずつ慎重に歩を進めて、ようやく「御岩山頂上」という木の道標を見つけました。ほっとした気分でもた歩を進めます。道はますます急勾配となり、二足歩行のわが身が恨めしくなりました。犬か猫だったらどれほど楽でしょう。途中ですれ違った下山の方に「山頂はもうすぐですか？」とお聞きすると、複雑な表情でしばらく考え込んでから「うーん、もうすぐではありませんね。」と笑いました。彼の言葉通り、やがて目に入ったのは「御岩山頂上」の標識。

身も心もへとへとなりながら石と木の根の道を通じ登ります。そしてまたも現れる「御岩山頂上」の標識。何だかもうゲームの世界に迷い込んでしまったような気分です。後日にSNSで、ある動画の投稿者がこの登山道の標識を評して「さぎ標識」と茶化していたのには強く同意しつつ笑ってしまいました。

ようやく到達した山頂付近には数人の人影があり、各人が静かな達成感を満喫しているようでした。頂上の岩に立って彼方を眺めると、眼下には古の大地の大地が果

足を取られて転んだら捻挫か骨折は免れません。この年で怪我をしたら今後の生活も人生も変わってしまうかも知れません。今更ながら、登山靴も履いていない自分の無謀さに呆れてしまいました。ひたすら足元に注意を向けて進む中、ふと手を伸ばした枝の木肌の色に目が留まりました。私が掴もうとした部分だけがまるで磨かれたマホガニー家具のように変色して艶めいているのです。きつと何百何千という人々の手がこの枝を掴んだのでしょう。可笑しくなりましたが、同時に有難さを感じました。ただそこにあるというだけで人々を助けている木の枝。こんな木の枝が私達の人生の中にも沢山あるのでしょう。

ようやく御岩神社に戻れた時には身も心もへとへとはずでしたが、疲れ切っているはずの身体は意外に軽く爽快感さえありました。この山の空気で体質が変わってしまったのでしょうか。そういえば、ここはゼロ磁場であるとか、その影響なのでしょう。

神社入り口の鳥居を出た時に、改めて、無事に下山できたこと、何か大きな導きをいただいたことへの感謝を込めて深く一礼をしました。

入口前の社務所でお守りを幾つか購入した時に気づいたのですが、膨らんでいた財布の中の小銭はきれいさっぱりと無くなっていました！小銭がゼロになるという経験もめったにありません。これもお清めの一環？

てしなく広がり、薄青くかすんだ地平線が地球の丸みを感じさせてくれます。およそ三千年近くもの歴史を持つこの美しい国への感謝と責任が身に溢れました。

頂上にはご神体とされる石柱が祭られています。宇宙から見たという光の柱の正体です。確かに、この山の石の欠片をよく見ると、きらきらとした細かい粒子からできているようです。帰宅後に調べてみたところ、御岩山の地層は白雲母片岩を多く含んでいるとのことでした。白雲母片岩は太陽の光に反射させると白く輝いて見えるのだそうです。しかしながら、それほど大きくもない石柱の光が宇宙から見えたという事には今一つ納得がいきません。そこで、自分勝手な解釈を試みました。御岩山の地層は白雲母片岩を多く含んでいます。それを実証するように、山道の石の欠片を拾って観察すると細かく輝いていました。つまり山全体が光を秘めているのです。苔の上に落ちる宝石のような陽の光を感じたのは、ただの感傷ではなくて科学だったのかも知れません。縄文の時代から続いた信仰の魂が、ある一定条件の下で岩石の光と融合して宇宙に届く。量子物理学の登場によって科学と宗教が近づいた現在では考えられる話ではないでしょうか。

下りは上りの数倍も大変でした。木の枝や隆起した根に掴まりながら、一足ひとあし慎重に歩きます。「杖が欲しい！」と痛切に思いました。万が一にも石の欠片に

朝食が軽かったのかかなり空腹のはずでしたが、それ程の食欲はありません。駐車場2に隣接する唯一のカフェでバナナとチョコの2色ソフトクリームを買い、気持ち良い風の中でべろりと舐めた時には幸福感に充たされました。

帰路は流山トンネルから早くも事故渋滞となりましたが、軽い疲労感と爽快な高揚感が相まってイライラすることはありませんでした。

鳥居をくぐった後に感じたあの感動に思いを巡らせます。これまでも幾つかの神社を訪れた時には、其々に気持ちの良い空気を感じたものです。しかし、今回のものはそれらとは大分違いました。体中が何かで満たされ、涙が溢れそうになったのです。例えてみれば、長く辛い旅の後に我が家に帰った時の安堵感。生まれて初めて自分の故郷の地を踏んだ時の感動。そんな種類の気持ちに似ているかもしれません。そして「お帰り。」という声が聞こえたような気がしたのです。

それは母親を超えた「お母さん」の声でした。

吾輩は紙魚ロボである その二五

永畑俊三（永田俊一）

一、三つの出口（トランプ出口）（二〇二五年一〇月一日）
日（二月一九日）

（一）ウクライナ・ガザ

一〇月一三日、九月末示された二〇項目の包括的トランプ和平案に関し（二〇日停戦発効）、この日ハマスは生存する人質二〇人全員を解放。同日ト大統領はイスラエル国会で「ハマスは武装解除され、米国はガザ再建のパートナーとなる」と述べ、アラブ諸国にイスラエルと外交関係を正常化する「アブラハム合意」の枠組み参加を呼びかけた。同時にエジプトのシシ大統領と共催で欧州・中東二〇か国首脳参加の「中東和平サミット」を開催、「ガザ停戦は第一段階（人質解放と停戦が軸）が残り」「合意の第二段階（恒久停戦に向けたハマスの武装解除や官

僚政府によるガザ統治、イ軍の撤退など難題）が始まった」と述べた。

一五日、ベッセント米財務長官はこの日の日米財務相会合（ワシントン）で「日本がロシア産エネルギーの輸入を停止する（LNGの輸入停止など）ことへの米政府の期待について議論した」と述べた。同日ト大統領はインドのモディ首相がロシア産原油の購入停止を私に確約したと表明（停止時期はすぐには出来ない）、「次は中国にも同じことをさせなければならぬ」と話した。

一六日、プ大統領と電話協議後ト大統領は自身のSNSで、ブタペストで対面会談することで合意したと明かした。記者団には「おそらく今後二週間以内に会うだろう」と述べた。時期や議題は米口高官協議で詰める。

一七日、米ウ首脳会談で、ウが求める巡航ミサイル「トマホーク」を巡っては、同国に供与せずに戦争を終結さ

せたいと表明、慎重姿勢を渗ませ、ゼ大統領は改めて訴えたが会談後「米はエスカレーションを望んでない」とした。会談は防空体制の強化やドローン分野での提携等協議、「有意義だった」と述べた。

その後英FTによると、ト氏はプ氏の要求を受け入れる形で（プ氏は東部ドネツク州全域の割譲を求め見返りに南部ザポリージャ・ヘルソン両州の一部地域の支配を放棄する考えを示唆したとされる）、ゼ氏にドンバス地方の領土割譲を迫ったが、ゼ氏は拒否した、とされる。

一九日、イ軍は停戦後初めてガザで大規模空爆、ラファでイ軍が攻撃され兵二人が死亡、停戦合意違反として実施。その後攻撃対象をガザ全土に広げた。ガザ当局によると一連の空爆で少なくとも四五人が死亡した。

二一日、米当局者は二週間以内とした米露首脳会談の「近い将来の開催はない」と述べ、ト大統領は「二日以内に我々の対応について知らせる」と記者団に応えた。

二二日、米財務省はロシアの石油大手ロスネフチ等を経済制裁の対象に加えたと発表、財務長官は「同盟国にもこの制裁措置に参加し順守するよう呼びかける」と表明、またト大統領はプ大統領との会談を「中止した」と明言、ウとの停戦協議に入る糸口が見えない中、露への圧力を強める。同日、これに対抗口大統領府は陸海空の部隊が戦略核の演習を実施、ICBM発射と発表した。

二三日、プ大統領は米の追加制裁について「圧力に屈

して何かを決めることはない」と述べるとともに「中止」ではなく「延期」との認識を示し、ト大統領との対話を引き続き探る考えも滲ませた。同日EU首脳会議で露凍結資産の活用を広げて一四〇〇億ユーロ（約二四兆円）規模のウクライナ向け貸付を検討したが、制度設計を巡り加盟国間の調整が難航、決定を見送った。

一二月に入って四日、ロ国防省は同国軍がドネツク州北部ボクロウシクで包囲網を狭めているとし、三五の建物からウクライナ軍を撤退させたと主張した。ロ軍兵士二五〇〇人が南東部から市内中心に侵入、激しい市街戦を繰り広げている。兵士一万人を投入北部主要都市攻略へ布石を打とうとしている。

一二日、G7外相会議がカナダで開催され、ウクライナへの支持を再確認する共同声明を採択、ロによるエネルギー施設などへの直接攻撃を一致して強く非難、即時の停戦が緊急に必要だとした。議長国のカナダはロシアへの追加制裁を発表した。「ロシアのエネルギーによる収入減を図る」とし、対象は一三人の個人と一一団体で複数の液化天然ガス（LNG）企業もふくめた。

一四日、ロシア連邦統計局発表の七〜九月期の実質GDPは前年同期比〇・六％増、前期の一・一％から鈍化、継戦能力を左右する戦時経済は原油安が響き減速が鮮明になってきている。

一六日、ト大統領は、ロから石油やガスを購入した国

に最大五〇〇%の関税を課すとの、議会が超党派で検討中のロシア追加制裁法案の採決を支持した。

一七日、国連安保理はト大統領が示したパレスチナ自治区ガザの和平計画を支持する決議案を採択した。ガザの治安維持を担う国際安定化部隊の設置を承認した。ガザでの人道状況が悪化する中、各国が早期の事態打開を重視した。反対はゼロ票、ロ中は棄権した。計画の第二段階移行に向けた一歩となるが、ガザ情勢は依然不透明。部隊参加の担い手を巡る各国間の調整は難航している。

一九日、英F Pはウクライナ停戦に向け米国が、ドンバス地方の割譲やウ軍の規模縮小等ウクライナに大幅な譲歩となる和平案（二八項目からなる）を受け入れるよう求めたと報じた。なお、ゼ大統領は身内の汚職を内外から問われ政治刷新を求められる開戦以来最大の内政危機に直面、最側近のイェルマーク大統領府長官の処遇について難しい判断を迫られている。

二一日、ト大統領はウクライナに対して二七日までに米国が主導したロシアとの和平案に同意するよう要求した。一部領土の割譲などを求める一方、停戦後の安全保障を米国が担保する硬軟両様で受け入れを迫る構えである。ゼ大統領は「尊厳を失うか、主要なパートナー（米国）を失うリスクを負うかの非常に難しい選択に直面する可能性がある」と発言、「我々の歴史の中で最も困難な時期の一つだ。ウクライナへの圧力はかつてなく高まって

平な和平、ウは米とト氏関与に謝意、欧州パートナーとも緊密連携する、といったもの。

二四日、ウ政府高官は一九項目からなる修正案を米ウで作成したと公表。ト大統領は自身のSNSに「和平交渉で本当に大きな進展が起り得るか、確認する迄信じざるべきでないが、何かいいことが起きているかもしれない」と投稿。

ウシャコフ露大統領補佐官（外交担当）は欧州・ウの代替案は「非建設的」だと述べ、米提示の和平案が議論の前提になるとの立場を示した。

二五日、ト大統領はSNS投稿で「両国の相違点はわずかだ」「ゼ氏、プ氏と近いうちに会談するのを楽しみにしている。ただし、この戦争を終わらせるための合意が最終的なものあるいは最終段階にあるものに限る」と述べ、二七日の期限については「私に期限はない、期限は両国の紛争が終る時だ」と答えた。来週ウイトコフ中東特使をクリシュナー氏をつけてプ大統領と和平案について協議するよう派遣すること（二六日ウシャコフ露大統領補佐官追認）、ウにも週内にもドリスコル陸軍長官をキエフに派遣すること、を明かした。

二七日、プ大統領は米ウの修正案を受け取ったとした上、「最終的な案はまだ存在しない」と述べ、米との協議に前向きな姿勢を示しつつ、合意を急がない考えを示した。戦闘停止には（完全制圧を目指す東部ドンバス地

いる」と危機感を示した。他方プ大統領は「和平解決の基盤になり得る」と肯定的な見方を示した。

二二日、ゼ大統領は、米欧のパートナー国と近日中に協議を始めると表明、イェルマーク大統領府長官が代表団を率いて近くスイスで協議するとしている。次第に和平案の内容が明らかになってきておりその要旨として、ウクライナについては強固な安全保障を受ける、軍の規模を最大六十万に、NATO非加盟、クリミアと東部二州を割譲、南部二州は前線を凍結し境界線に、一〇〇日以内の選挙等。ロシアについては、制裁緩和の協議、G8への再招待、欧州やウクライナへの非侵略政策を法律に明記、クリミア・東部南部四州以外で支配するウクライナ領放棄等が掲げられている模様。また二三日米国とウクライナは英独仏も参加して和平案を協議するともいう。ト大統領も和平案は最終案ではないとの認識を示し修正に含みを持たせた。

二三日、米・ウ高官はスイスで協議、ルビオ米國務長官は「大きな進展があった」と語った。欧州・ウクライナが提示した代替案は、領土交渉は前線を起点に交渉、安全保障は平時ウ軍八〇万と米の防衛保証、NATO軍平時駐留なく加盟の合意も無く、対口制裁は段階的解除、G8復帰要請、といったもの。米・ウ共同声明の骨子は、協議は生産的、立場の調整と次段階の特定に有意義な進展、どんな将来合意もウの主権完全確保、持続可能で公

方を念頭に）ウ軍の撤退が必要だと主張した。

二八日、国営原子力企業を巡る政府高官の汚職疑惑が広がり最側近のイェルマーク大統領府長官の解任に追い込まれたゼ大統領は、国民に向けて「ウクライナの戦いは続く。団結しなければすべてを失うリスクがある」と更迭に踏み切った決断をこう説明した。政権は交渉の柱を失うが、内政の混乱が長引けば、和平協議でロシアにつけ入る隙を与えかねず欧州のサポートにも影響する。

三〇日、プ大統領は軍の司令拠点を訪問、ゲラシモフ参謀総長からウクライナ東部ドネツク州の要衝ポクロウシクを制圧したと報告を受けたと発表した。これに加えハルキウ州のボウチャンスクも制圧と報告とのこと。

一二月入り後二日、プ大統領（ウシャコフ補佐官、ドミトリエフ特別代表同席）は米ウイトコフ米中東担当特使（クシュナー氏同席）とモスクワで会談、口高官によると米ウクライナ和平案を巡り領土問題で溝が埋まらず進展はなかった。

三日、欧州委員会は域内保管の口中銀の凍結資産九〇〇億ユーロ（約一三兆円）を原資にウクライナに無利子で融資する案を発表（一八日の首脳会議で合意を目指す）。

七日、ロのウシャコフ大統領補佐官は二日の会談で、首脳会談の開催の議論は出なかったとし、米和平案の複数項目に「根本的変更を求めている」と述べた。ドンバ

スの領土割譲などを念頭においているとみられる。

八日、ゼ大統領はロンドンで英独仏首脳と会談、米和平案を協議。「一定の進展があった」と述べ、最終的修正案を九日にも米に提示する考えを示した。

九日、ト大統領がゼ大統領に和平案への回答を「数日以内」に示すよう要求していると英FTが報じた。米は二五日クリスマスまでに口との停戦合意実現を目指し、ウに圧力をかけている。同日ゼ大統領はこれを受け、延期されている大統領選について「安全が保証されれば六〇〇九〇日間のうちに行う用意がある」と記者団に語った。そのための立法措置をとるとした。

一〇日、ゼ大統領は同国の経済復興について米財務長官やクシュナー氏とオンラインで協議後、「生産的な議論だった」と強調、報道によるとこの日米和平案全体への修正案も提示されたとされる(①二〇項目の和平条件②安全の保証③復興)。米欧が週末にもこの修正案を基に和平条件や「安全の保証」について詰めの協議に入るとされる。ゼ氏によると米案は、ドンバス地方の割譲について仲裁案としてウにドネツク州からの撤退を求め、口軍に同地への非展開を求め非武装中立地帯とし実質紛争の凍結に繋げようとするものとのこと。

一日、EUはウクライナ西部のリビウで非公式閣僚級会議を開き、ウと共同声明を発表、「ウのEU加盟は大陸全体の安全保障を強化する」とした。(英FTは米・

よう支援し、有志国で多国籍軍の結成を目指す、とした。また米政府当局者は「ウクライナの安全の保証に関与する」と発表、集団防衛を定めたNATO条約第五条をモデルに「第五条のような安全の保証を含む極めて強力な安全保障パッケージがある」と述べた。

一日、欧州評議会は口の侵攻でウが受けた被害の賠償に向け、「国際請求委員会」を創設するための条約を採択した。条約は二五カ国の批准後に発効し、委員会はオランダ・ハーグに創設される。欧州評議会は二〇二三年、侵攻による損害を記録する登録制度の設立を決め、これまでに住宅やインフラの破壊など八万件以上の被害が登録された。新設委員会はこれらを引き継ぎ、賠償額を算出する役割を担う。欧州評議会は二次大戦後の一九四九年、民主主義や法の支配、人権の尊重といった欧州共通の価値を守る目的で設立された。EUの全二七カ国、英・ウ等計四六カ国が加盟、米・日等五カ国がオブザーバー参加している。九六年参加した口は二〇二二年三月、ウ侵攻を受けて除名された。

一九日、プ大統領は年末恒例の大記者会見で、進軍中の地名を列挙し「戦場の主導権は露軍に移った」とし、危機の「根本的な原因」が取り除かれれば侵攻を終わらせる用意があると語った。和平協議はト大統領が「誠意を以って力を尽くしている」とする一方「問題は欧州とウクライナだ。ウクライナに議論する用意があるように

ウ調整中の最新の和平修正案に、二〇二七年一月一日までに加盟させる内容が盛り込まれたと報じた。

二日、EU閣僚理事会は、域内にあるロシアの国家資産を無期限に凍結することで合意した。全会一致ではなくEU条約の緊急条項を発動し域内人口を勘案した特定多数決で決めた。ロがウに賠償するまで解除しない。親口のハンガリーの拒否権行使により資産利用のウ支援の滞ることを避ける狙いがある。

四日、米(ウایتコフ氏・クシュナー氏)・ウ(ゼ氏・ウメロフ氏)交渉団はベルリンで米提案の和平案について協議(メルツ独首相同席)。ゼ大統領は欧米などによる「安全の保証」が確約されれば、かねて求めてきたNATO加盟を断念する用意があると表明した。一五日も協議を続け、ルッテNATO事務局長、フォンデアライエン欧州委員長、仏大統領・英首相も参加予定。

五日、米・ウの和平協議後の会見でゼ大統領は、戦闘終結後の「安全の保証」に米が応じる意向をあきらかにしたものの、領土交渉を巡り「なお相違点がある」と述べた。同日ト大統領との電話協議もあり、今週末フロリダで事務協議の会合を開く可能性がある。欧州首脳有志は協議後、「和平に向けたト大統領の取り組みは大きく進展した」とし、ウの領土問題は「安全の保証」が確立された後に同国民が決定すべきだ」とする共同声明を公表した。またウが八〇万人規模の軍隊を維持できる

見えない」と述べた。

(二) コロナ

二月入りして一二日発表の定点当り新型コロナウイルス新規感染者(127)は一・二六人で前週比〇・八七五倍、一九日発表(12/8-12/14)は一・二一人で前週比〇・九六〇倍。八月後半(8/18-24)八・七三人と本年ピークを付け(その時点で前年同期と同水準)、そこから前年、前年とはほぼ同水準で下降し、一月に入って再び上昇し出した前年、前年(年を超え冬にまたピーク)と違い下降を続けている。

代わりに今年はインフルエンザ変異型が一〇月に流行入りして猛威を振るっている(昨年より一か月、一昨年より二か月早く)。

(三) 金融政策(経済)

一〇月一四日、FRBパウエル議長は講演で、償還国債の再投資などを控え資金を市中から引き揚げる量的引締め(QT)を今後数か月で停止する可能性に言及、物価と雇用の見通しについては「入手可能なデータに基づけば、九月会合以降大きく変化していない」と利下げ見通しの維持を示唆した。

二〇日、中国国家統計局発表の七、九月実質GDPは前年同期比四・八%増と四、六月期の五・二%を下回った。不動産不況で内需不振。

二一日、首相は就任後初の記者会見で、金融政策へのスタンスについて「日銀が政府と十分に連携を密にして意思疎通を図って行くことが何より大事だ」と述べ「アコードについては直ちに見直しをすることは考えていない」とした。市場には早期利上げのハードルが高まったとの見方もある。また財政については「財政の持続可能性には常に配慮しつつも『責任ある積極財政』の考えのもと、戦略的に財政出動を行う」と新閣僚に指示したとし、会見ではガソリン税の旧暫定税率については「速やかに廃止する」と明言した。

二三日、中国第二〇期中央委員会第四回全体会議（四中全会）が、二六、三〇年の五か年計画の骨格を固めて閉幕した。半導体自立へ集中投資しハイテク分野の水準を高め科学技術強国を目指すとし、米国との長期対立を念頭に内需拡大戦略の堅持・消費の喚起・多国間貿易体制の維持等も挙げ「国際影響力を大幅に引き上げる」方針も示した。

二四日、総務省発表九月のCPI（消費者物価指数）総合（生鮮食品を除く）は一一・四となり、前年同月と比べ二・九%上昇、上昇率拡大は四か月振り。同日米労働省発表の九月CPIは前年同月比三・〇%上昇、前

ら転職に慎重になる動きも見られた。

一月に入ってから五日、ト政権の関税の合憲性が争われている訴訟で、米連邦最高裁は双方から主張を聞く口頭弁論を開いた。ロバーツ長官が政府側の主張を「不適切」と指摘した場面もあった。原告は国際緊急権限法（IEEPA）を根拠に関税を発動したのは大統領権限の乱用で違憲、関税発動までは明記しておらず関税に関する権限は本来米連邦議会にある、としている。保守派判事も疑義を表明しており、最高裁は年内にも判断するとしている。政権敗訴なら一一〇兆円の還付が必要となる。

六日、厚労省発表九月の毎勤統計によると、実質賃金は前年同月比で一・四%の減少。名目賃金を表す一人当たり現金給与総額は二九万七、四五円と一・九%増加、実質賃金の計算に使う消費者物価指数（持ち家の家賃換算分を除く総合）の上昇率は三・四%だった。三月から総合指数を使う新方式も導入しているが、新方式によると九月の実質賃金は一・〇%の減となる。

七日、第三〇回国連気候変動枠組み条約締約国会議（COP30）の首脳会議が米国不在のまま終了（日本首相も欠席）、間隙を縫うように中国は「グリーン転換」を唱え、脱炭素の覇権を窺う姿勢を前面に出した。二一日の閉幕までに焦点の途上国支援などのテーマで何処迄進めるか見通せない。なお、三五年時点の削減目標を提出したのは七日時点で一〇四カ国、パリ協定加盟国の半

月の伸び率（二・九%）から加速したものの市場予想（三・一%）は下回った。

二九日、FRBはFOMCで政策金利を〇・二五%引き下げた。利下げは二会合連続。米政府の一部閉鎖で主要な経済統計が軒並み停止する中、雇用の勢いが失速するリスクへの対応を優先した。FF金利は三・七五、四・〇%となり三%台は二二年一二月以来となった。量的引き締め（QT）と呼ばれるバランスシートの圧縮を二月一日で終了することも決めた。パウエル議長は会見で、次回の利下げを「既定路線ではない」とも述べた。

三〇日、日銀は金融政策決定会合で政策維持を決め六会合連続で利上げを見送った（無担保翌日物コールの誘導目標金利を〇・五%程度に据え置き）。米国の関税政策の影響について「不確実性はなお高い」とし経済データを極めるとした。会見で総裁は、来年の賃上げの「初動の勢い」が強ければ利上げを判断する考えを示唆した。三か月ごとに見直す展望レポートも公表、二五年の実質GDPの伸びを〇・七%（前回〇・六%）に上方修正したほかは概ね前回見通しを維持した。審議委員九人の内田村・高田両委員は〇・七五%程度への引上げを提案したが否決された。

三一日、厚労省発表の有効求人倍率（季調済み）は一・二〇倍で、前月から横ばい、省人化や物価高騰などで求人を探える動きが見られ、一部で景気先行き不透明感

数近くがまだ提出していない。

一〇日、政府は日本経済の成長促進に向けた「日本成長戦略会議」の初会合を開催、月内にまとめる総合経済対策に「投資促進につながる税制措置の方向性を示す」とした。会合ではAI・半導体など一七の戦略分野を掲げるとともに、新技術立国・競争力強化等八項目の「分野横断的課題」を示した。二六年夏に成長戦略を纏めるが、経済対策に盛り込む重要課題は前倒しで実行とした。一二日、新政権で初めての経済財政諮問会議を開き、近く纏める総合経済対策や中長期の財政政策を議論した。対策を裏付ける二五年度の補正予算を巡り、新任の民間議員（リフレ派の永浜・若田部議員）は前年を上回る規模での編成を訴え、収支均衡に拘らぬ意向も滲む等、政権の積極財政の姿勢が浮き彫りに。

一四日、ト大統領は二二〇品目を超える食料品を対象に相互関税を撤廃する為の大統領令に署名した。原産国を問わず珈琲や牛肉、バナナなどの多くの食料品に適用、価格高騰に対処する。物価上昇加速高止まり、四日投開票の三つの地方選挙で生活費高騰対策を訴えた民主党候補の全勝等が背景にある。

一七日、内閣府発表の七、九月期実質GDP（季調済み）は前期比〇・四%減、年率換算で一・八%減、米関税による輸出減が響いている。一〇、一二月期は日中摩擦や円安リスクもあるが企業の底堅い設備投資などでプ

ラス成長に戻ると予測されている。同日欧州委員会は秋の経済見通しで、ユーロ圏の二六年の実質成長率を一・二%と前回見通し（五月）から〇・二ポイント下方修正した。個人消費や投資の持ち直しが成長を支えるものの、米国の高関税政策を巡る不透明感から景気の下振れリスクがあるとした。

一八日、東京市場で株安・債券安・円安が進む中、首相は日銀総裁と首相官邸で二五分程初会談、会談後総裁は金融政策正常化については「インフレ率が二%で持続的安定的にうまく着地するように徐々に金融緩和の度合いを調整している」と伝えたところ「そう云うことかな」と首相は了解したとのこと。円安の進む為替相場についても「議論したが具体的なコメントは控える。ファンダメンタルズに沿って安定的に推移することが望ましい」との言い方に留めた。なお、官房長官は定例会見で「日銀法・アコードに沿って緊密に連携を図り政策運営に万全を期して行く」と述べた。

二〇日、国内債券市場で長期金利が急騰、新発一〇年物国債利回りは一時一・八三五%と二〇〇八年六月以来の高水準となった。市場の想定以上に国債増発補正予算見込みに反応した。同日政府は臨時閣議で家計支援・成長投資に重点を置いた二一・三兆円の経済対策を決定、補正予算の歳出規模は一七・七兆円（二四年度の二三・九兆を上回る）、国費に財政融資を加えた財政措置は二

五・五兆円、更に地方歳出や民間支出などを加えた事業規模は四二・八兆円に上る。政府は経済対策は実質GDPを二四兆円押し上げ、物価上昇率はガソリン減税で年〇・三ポイント、電気ガス補助で月平均〇・四ポイント抑える効果をみる。

二八日、政府は総合経済対策の裏付けとなる二〇二五年度補正予算案を持ち回り閣議で決定した。一般会計の歳出は、経済対策の一七兆七〇二八億円に他の費用を加えて総額一八兆三〇三四億円で前年から四兆円増。費用を賄うため、新たに国債一一兆六九六〇億円発行、二五年度末国債発行残高は一二二九兆円に増える見込み。経済対策の柱の一つ「物価高対応」、子供一人当たり二万円の給付や電気・ガス代補助に計八・八兆円、「危機管理投資・成長投資」では経済安全保障の強化としてAIや量子技術への支援などで合計六・四兆円を充てる。「防衛力・外交力の強化」では防衛費を一・一兆円積み増すなど一・六兆円を計上した。防衛費は当初と合わせ一一兆円となりGDP比二%を前倒し達成に。宇宙戦略基金や造船再生基金等合計四一の基金に特別会計も含め約二・五兆円を計上。財源は税収上振れ分二・八兆円、税外収入や前年度剰余金二七兆円も活用、それでも足りない為一一・六兆円の国債新規発行、超長期は金利上昇が激しいため主に満期五年以下の国債で調達する。同日参院本会議でガソリン減税法案が可決された。

二八日、厚労省発表の一〇月有効求人倍率（季調済）は一・一八倍と、前月から〇・〇二ポイント下がった。省人化や物価高騰に伴い求人を探る動きがみられた。

同日総務省発表の一〇月完全失業率（季調済）は二・六%で前月横ばいだった。また同日経産省発表の一〇月鉱工業生産指数（季調済）は一〇四・六で前月から一・四%上がった。自動車工業が牽引二か月連続の上昇となった。生産の基調判断は前月の「一進一退」を維持。また総務省発表の一〇月東京部部のCPI総合は一一・四と前年同月比で二・八%上昇、前月と同水準。七〇九月実施の電気・ガス料金補助が終了しエネルギー価格が二・六%上昇した。

二八日、政府は官邸で総合科学技術・イノベーション会議を開いた。二五年度中に閣議決定する科学技術計画（二六年度から五か年計画）の骨子案は「科学技術の力により日本の安全保障を強化する」と強調、計画の柱として初めて「国家安全保障との有機的連携」を打ちだす。首相は会議で「勝ち筋となる産業分野で、国際競争力強化と人材育成に資する戦略的支援を進めてゆく」と語った。人工知能（AI）・先端ロボット、量子、半導体・通信、核融合、バイオ・ヘルスケア、宇宙など六分野が「国家戦略技術」創設候補となっている。

一二月に入り一日、植田日銀総裁は講演で、「利上げしてもまだ緩和的な状況だ」として一八〇九日の金政策

決定会合で「利上げの是非について適切に判断したい」と述べた。

五日、総務省発表の一〇月の家計調査によると、二人以上世帯の消費支出は三〇万六八七二円で実質では前年同月比三・〇%減少、六か月ぶりのマイナスで、二〇二四年一月以来の減少幅となった。

八日、厚労省発表の一〇月の毎勤統計によると実質賃金は前年同月比で〇・七%減少、二五年一月以来一〇か月連続のマイナスとなった。名目賃金を示す一人当たりの現金給与総額は三〇万一千四百一十二・六%伸びた。同日内閣府公表の七〇九月期GDP改定値は、実質季調済み前期比が〇・六%減（年率換算二・三%減、暫定値は前期比〇・四%減）、米関税による輸出鈍化等で四半期ぶりの成長率マイナスだが、一〇月以降は再びプラスになり、緩やかな景気回復が続くというのが大勢見解。

一〇日、アジ銀はアジア新興国・地域の二〇二六年のGDPが前年比四・六%増加するとの見通しを発表した。九月の前回予想より〇・一ポイント上方修正（二五年のGDP増加率見通しも五・一%と九月予想を〇・三ポイント引き上げている）。個人消費が堅調なうえAI関連輸出も好調推移とのこと。

同日、米FOMCで、三会合連続となる〇・二五%の利下げを決定。三人が反対票を投じ、参加者の予想では二〇二六年にあと一回の追加利下げを実施する見通しで

ある。FFファンドレートは三・五〇三・七五%となった。パウエル議長は「雇用に対する下振れリスクが高まっている」としつつ「物価上昇率が（参加者全員）高すぎるとの認識で一致した」と述べ、政策金利が経済を熱しも冷ましもしない中立金利の想定範囲内に入ったとして「利下げの停止が近づいている」とも示唆した。

一五日、日銀発表の二二月短観で大企業製造業の景況感を示す業況判断指数（DI）は、前回九月調査（プラス一）から改善しプラス一五だった。3四半期連続改善でDIは四年半ぶりの高水準となった。大企業非製造業のDIは横ばいのプラス三四だった。同日日経が発表した（上場企業中心に比較可能な）社を対象に「日経時点のデータ集計」二五年冬のボーナス調査によると、一人当たり支給額（加重平均）は前年比六・四%増の一〇二万九八〇八円となり、初めて一〇〇万円台に乗り、三年連続で過去最高を更新した。建設や防衛関連が牽引、関税政策の影響を受ける自動車や鉄鋼関連は伸び悩んだ。一六日、米労働省発表の十一月の雇用統計によると、非農業部門の就業者数（季調済み）は前月比六・四万人増で、市場予想（五・〇万人増）を上回った。失業率は四・六%で市場予想及び前回発表から〇・二ポイント上昇した。

一八日、英中銀は政策金利を〇・二五%引き下げ三・七五%とした。今年に入り四回目の利下げで八月以来三

閣情報調査室の国家情報局への格上げ）、スパイ防止法制検討、憲法については、九条改正に関する協議会設置、緊急事態条項を設ける改正案の来年度中の国会提出、皇室・家族制度では、男系男子による皇位継承を優先、旧姓の通称使用の法制化、といったところである。連立四つの火種として「臨時国会での関連法案成立を目指す」とした議員定数削減（衆院一割）、献金禁止先送り、選挙区競合、細いパイプ、が危ぶまれる。

二一日、自民党高市早苗総裁は、衆参両院本会議で第一〇四代首相に指名された。女性首相は初め皇居での首相親任式と閣僚認証式を経て同日夜高市内閣が発足した。発足後の会見で新首相は「基本政策と矛盾しない限り野党の政策提案を受け入れる方向で前向きに議論する」と述べ、自らの内閣を「決断と前進の内閣」と名付けた。初閣議で物価高に対応する経済対策の策定を指示する。

二四日、首相は衆参両院本会議で初の所信表明演説に臨んだ。ポイントには、経済財政については、「強い経済」を構築するため、「責任ある積極財政」の下戦略的に財政出動を行うこと。外交・安全保障については、世界の真ん中で咲き誇る日本外交を取り戻すとし、また来年中に安倍関連「三文書」の改定を目指すこと。外国人政策については、外国人による違法行為やルールからの逸脱に毅然と対応し、土地取得などのルールの在り方について検討を進めること。社会保障については、早期に給付

会合ぶり。労働市場は悪化の兆しが見え、総裁は「インフレ率は直近のピークを越えその後も低下を続けている」と述べた。

一九日、総務省発表の十一月の消費者物価指数（総合）は一一・二・五となり、前年同月比三・〇%上昇した。二ヶ月連続で三%で、生鮮食品を除く食料は七・〇%上昇となり鈍化しているが依然として全体を押し上げている。

同日、日銀は金融政策決定会合で政策金利を〇・二五%引上げ〇・七五%とすることを決定した。米国の関税政策の悪影響は想定より軽微で、二六年の春闘も賃上げの勢いが続くと見込まれ、円安の定着が物価高を齎していること等を踏まえての決定で、異次元の金融緩和からの金融正常化をさらに進めたいとしている。

（四）政治（社会）

一〇月一七日、自民高市総裁と維新藤田共同代表は、国会内で首相指名選挙や連立政権の構築に向けた二回目の政策協議を開いた。終了後藤田氏は「大きく前進した」と話し、立民と国民との協議は打ち切る考えを示した。高市氏が首相に選ばれる公算が大きくなった。

二〇日、自民・維新が連立合意書を交わした。主な政策は安全保障では、安保三文書の前倒し改定、防衛装備品輸出の五類型撤廃、インテリジェンス機能の強化（内

付き税額控除の制度設計に着手すること（維新との合意のOTC類似案を含む薬剤自己負担の見直しの迅速検討、現役世代社会保険料負担抑制も）。維新との合意については、副首都の検討を急ぎ、教育の無償化として高校・給食のそれを安定財源の確保と合わせ来年四月から実施すること（所信表明には入らなかったものとして衆院定数削減とスパイ防止法があるが、後者については同日官房長官が国家情報局創設を検討と述べた）。

二六日、日経・TV東京二四〇二六日実施世論調査によると、高市内閣支持率は七四%で石破内閣発足時の五%より二〇ポイント以上上回った。一八〇三九歳の指示も八割超、男女の支持率も均しく高い。自民党支持率は三六%で前回より五ポイント上がった。また二五・六日朝日実施の全国世論調査（電話）によれば内閣支持率は六八%、不支持率は一九%、政党支持率は前回九月と比べ自民が二六%から三〇%、維新も二から五%に上がり、参政が八から四%に下がり他政党は殆ど変化なし。

二八日、アセアン首脳会議（二六日）のマレーシアから二七日帰国した首相は元赤坂の迎賓館でト大統領とワーキングランチ含め九〇分会談。「同盟の新黄金時代を作り上げたい」「日本も世界の平和と繁栄に貢献」「防衛力や経済力、技術力、情報力など強化」と述べた高市首相に、「日本はもっとも重要な同盟国」「米国からの防衛装備品調達に謝意」「日米関税合意は公平」とトラン

ト大統領は応じた。そして首脳間で「日米関税合意の履行確認文書」「重要鉱物の供給確保への協力文書」が交わされ、政府間では「日米間投資に関する共同ファクトシート*」「七分野の科学技術協力の覚書」「造船能力強化の協力に向けた覚書」の文書を交わした。ここでト大統領は拉致被害家族と面会「拉致問題は忘れていない」解決に向けて出来ることをすると強調した。其の後両者は米軍横須賀基地を訪問し、停泊中の米原子力空母「ジョージ・ワシントン」に乗艦、艦内で演説、ト大統領は「米国と日本の大切な同盟は全世界で最も卓越した関係のひとつだ」と述べ、首相は「インド太平洋を自由に開かれたものとし地域の平和と繁栄の礎とする決意を新たにしたい」と語った。ト大統領は当夕、日本大手企業経営者参加の夕食会を開き、対米投資の拡大を求め、経営者らは日米の貿易関係が再び緊張しないよう、対米投資や米国産製品の輸入をアピールした。

*会談にあわせ発表したのが、原子力発電などのエネルギー、人工知能向けの電源開発、AIインフラ強化、重要鉱物の四つの投資分野を列挙、日本企業八社がプロジェクト組成に関心を表明。

二九日、ト大統領は相互関税と自動車関税の二五%から一五%への引き下げ合意等したイ・ジェミョン韓国大統領との会談冒頭、今回は日程が合わず米朝首脳会談は見送ったと明らかにした。

データ保護等具体策を詰める為有識者会議での議論を始める。党経済安全保障推進本部でも議論を詰める。同日衆院予算委員会でも予想外の事態が起こった。立憲の岡田委員の質問に答え「(中国による台湾侵攻に関し)武力攻撃が発生したら(日本の)存立危機事態にあたる可能性が高い」と発言。存立危機事態とは日本が直接攻撃を受けていなくても、密接な関係にある他国が攻撃された際、日本の存立が脅かされ、国民の生命などに明白な危険が事態を指し、集団的自衛権行使の要件となっている。首相答弁は、台湾有事の状況によっては自衛隊が独自に武力行使に可能性を示し、歴代内閣の見解を踏み越えたものだった。これを受け中国は「強烈な不満と断固とした反対」を表明撤回を求めた。また中国の大阪総領事が「勝手に突っ込んできたその汚い首は一瞬の躊躇もなく斬ってやるしかない」とXに投稿(八日)、政府が抗議。一〇日同委員会でも首相は自身の答弁を釈明、従来の政府見解を変える考えはないことを強調、撤回については否定し「反省点として特定のケースを想定したことについてはこの場で明言は慎もうと思う」と述べた。

一二日、米連邦議会下院は政府閉鎖を終わらせる「緊急予算案」を可決、既に上院を通過しており、同日中に大統領署名で成立する見通し。過去最長になった政府閉鎖は四三日間で終了する。

一四日、中国外務省が国民の日本への渡航を自粛する

三〇日、ト大統領と習国家主席は韓国釜山の金海空港で会談、会談後、習氏が合成麻薬フェンタニル対策を講じると約束したと明かし、対中関税を一〇%引き下げると表明した。中国船の入港料の徴収一年延期。中国も報復関税を引き下げるとともに、レアアース輸出規制の一年延期、米農産品の大量購入。そして二六年四月のト氏の訪中、その後に習氏の訪米も約す。台湾問題は議論せず。緊張緩和を演出したものの根本的な難題は棚上げした形、圧力をかけるための手札を互いに温存する危うい状態はなお続く。同日APEC首脳会議で訪れていた韓国慶州で首相は就任後初めて韓国の李在明大統領と四〇分ほど会談、信頼関係の構築を重視、両首脳は現実路線の外交追及で一致、「シャトル外交」の継続を確認し緊密な意思疎通を続け、未来志向の協力を強化する。

一月に入ってから四日、「外国人の受け入れ・秩序ある共生社会実現に関する関係閣僚会議」の初会合が開かれ、首相は来年一月までに基本方針を纏めるように指示、不法滞在者に関するルールの厳格化、土地取得等のルールの在り方を含む国土の適切な利用などの検討が行われる。木原官房長官がトップを務め小野田経済安全保障相らに加わる。

七日、経済安全保障推進会議で首相は経済安全保障推進法の改正を指示、サプライチェーンの強化、基幹インフラ制度、重要事業の海外展開支援、シンクタンク創設、

よう促す等実体経済にも波及し始めた。台湾有事を巡る発言は、退くに引けぬ応酬となり、中国は、日本留学も慎重に検討するように呼び掛けた。根拠は示さず「中国人を狙った犯罪が多発し、安全リスクが高まっている」と主張している。

一六日、一五・一六日実施の朝日全国世論調査で内閣支持率は六九%(発足直後六八%)と歴代屈指の高さを維持。直前渡航自粛のでた日中関係については改善が期待出来る四三%、出来ない四四%と割れた。

一七日、外務省大洋州局長が中国を訪問、中国外務省アジア局長らと会談するとのこと。

一八日、北京での両国局長会談は首相発言の撤回を巡って応酬になり何ら進展は見られなかった。

二〇日、自民党は安保関連三文書の改定に向けた議論を開始した。GDP比二%を超す水準に引き上げるか如何か話し合い、次期計画が始まる二七年度以降の実施を念頭に二六年四月中に政府への提言を纏める。

二三日、南ア開催のG20首脳会議が閉幕、ボイコットした米国だけでなくアルゼンチンも首脳宣言に反発、グローバルサウス主要国はまとまりを欠き合意形成が難しくなってきた。首脳宣言は気候変動への対応やWTOのルールに基づく貿易の促進等ト大統領が異を唱える内容を盛り込んだ。戦闘が続くスーダンに加え「占領地パレスチナでの公正、包括的かつ永続的な平和の実現

のために努力する」と記した。なお出席中の日中首脳（李首相と高市首相）は結局言葉を交わさずに終わった。

二四日、米中首脳は電話協議。新華社通信によると、習氏は「台湾の中国への復帰は戦後国際秩序の重要な構成部分だ」と強調、ト氏は「米国は中国にとつての台湾問題の重要性を理解している」と述べたという。ト氏はSNSで「一〇月のフォローアップだ。双方が合意内容を維持して行くうえで大きな進展があった」と主張「今我々は大局に目を向けることが出来る。その一環で習氏は二六年四月に私を北京に招待し、私は受け入れた」「返礼として二六年後半に習氏を国賓訪問で米国に向かえる」と表明。習氏はウクライナ紛争を巡り「中国は平和に向けた努力を支持する。関係国が相違点を縮小し、公平で持続可能かつ拘束力のある合意へ早期に到達し。この危機を根本的に解決することを望む」と表明した。

二五日、二四日の米中電話協議後ト氏からの申し出で日米首脳電話協議が行われた。ト氏から「中国が反発を強める中で、事態を鎮静化させていかなければならない」といった認識が示された。日中対立が激化すれば自身の進める米中通商交渉に悪影響が出ると判断したからと見られる。日本政府は協議内容についてト氏から米中首脳会議を含む最近の米中関係の状況についての説明があり、「現下の国際情勢のもとで日米間の緊密な連携を確認した」と発表。ト氏から首相に「いつでも電話して欲しい」

との話があったとしたが、国会答弁の撤回要請や支持の発言はなかった模様である。

三〇日、日経とTV東京二八・三〇日実施の世論調査によれば内閣支持率は七五％で一〇月の前回調査（七四％）から横ばい、支持しないも一八％にとどまった。経済対策が物価高の抑制に「有効」と思うと答えた割合は三五％で「有効だと思わない」四〇％を下回った。自民党支持率は四一％で前回より五ポイント上がった。日本維新は前回から四ポイント低下して五％、野党は産政七、立憲六、国民六であった。

一二月に入り一日、高市自民総裁と吉村維新代表は衆院議員の定数削減について、定数四六五人の一割を目標に削減する法案を今国会に提出、法施行から一年以内に与野党で協議、結論が得られなければ小選挙区二五、比例代表二〇を軸に、計四五議席を自動的に減らすことで合意、両党は法案文面を詰め今国会中の成立をめざす。

一日、本年度補正予算案が衆院本会議で通過した。一般会計総額が一八・三兆円と昨年度補正予算と比べ三％増加、生活安全保障・物価高対策八・九兆、危機管理投資・成長投資六・四兆など経済対策経費中心で、歳入の六割強の一・七兆円を国債発行で賄う。維新・国民・公明の成果争いの要求取り入れを首相が容認膨張したと言われる。一二日から参院予算委で審議入り一六日にも参院本会議で可決・成立の見込み。

一六日、参院本会議で二五年補正予算案が可決成立した。今臨時国会成立を目指した衆院定数一割削減法案は政治と資金の議論が先とする野党に阻まれ審議入りも出来ず、与党間で改めて通常国会成立を目指す方針合意。

一七日、臨時国会閉会。記者会見で首相は、日中関係については「存立危機事態答弁は日本政府の従来の立場を変えるものではない。さまざまなレベルで中国や国際社会に粘り強く説明してゆく」とし、責任ある積極財政については「先を見据えた『戦略的財政出動』であり、規模ありきでいたずらに歳出を拡張してゆくものではない」「二五年当初・補正予算合わせた国債発行額は二四年度の補正後を下回る見込みであり、一九日に二六年度与党税制大綱を取り纏め二六日にも閣議決定する二六年度予算案の編成は財政の持続性を確保しながら、国内外の市場の信認を高める」と述べ、補正予算成立で「国民との約束を果たすことが出来た。一日も早く効果を実感いただけるよう、迅速な執行に努める。強い経済、強い外交・安全保障の実現に一定の方向性を出すことが出来た」とした。また社会保障政策を超党派で議論する国民会議を立ち上げると述べた上、「給付付き税額控除」や「社会保障と税の一体改革」について与野党で議論を加速するとした。なお、議員定数削減法案は通常国会で成立を期すこと、企業・団体献金については、議員定数と並んで民主主義の根幹にかかわる重要なテーマであり各

党とよく議論し取り組みを進めること、年収の壁については基礎控除を物価に連動した形で更に引き上げる税制措置を与野党間で最終調整していること等にも触れた。

《補足》三つの出口（トランプ出口、二〇二五年一二月二〇（二六年一月一三日）

（一）ウクライナ・ガザ

二月一九日、EU首脳会議はウクライナに九〇〇億ユーロ（約一六兆円）を融資する案で合意。予算を担保に市場から借り入れ融資に回す。ウクライナの二二六・七年必要資金の約三分の二に相当し、復興やロシア反攻を支援する。

二一日、フロリダで一九日からの和平案を巡る米・ウ間協議を終えた。ウメロフ国家安全保障・国防会議書記は「協議は生産的で建設的だった」とSNSに投稿した。会議は欧州各国の安全保障補佐官も同席。同日米・ロの高官協議（ロシアからドミトリエフ大統領補佐官）も行われ、会談後ウシヤコフ露大統領補佐官はウクライナの和平修正案について「永続的な平和を達成する可能性を高めるものではない」と発言、受入れに否定的な考えを改めて示した。

二二日、パンス米副大統領は英メディア取材に応え

て、ウ・ロ和平交渉について「平和的解決に到ると自信を以って言えない」「(ドネツク州は) いずれ失う可能性が高いとウは非公式には認めている」等と述べた。中立地帯化案もウは要求を拒む姿勢を変えておらず、ロは七割制圧の戦況有利と譲歩圧力を強め、「ここ数週間で判った事は何か絶対に譲れない条件で何が交渉の余地があるか双方に明確な認識があることだ」と語った。

二四日、ゼ大統領は米国と協議が続く和平案の全二〇項目概要を初めて明らかにした。①ウクライナ主権の再確認②ロ・ウ完全無条件の不可侵の合意文書③強力な安全保障④平時八〇万のウ軍規模⑤NATO及び欧州署名国の北大西洋条約五条に準じた保証⑥露の欧州・ウに対する不可侵政策の法的明記⑦ウの明確期限内のEU加盟⑧ウは強力な開発支援を受ける⑨復興や人道支援のため複数の基金設置⑩署名後の米・ウ自由貿易協定の交渉加速⑪ウの核非保有国継続⑫ザポリージャ原発のウ・米・ロ三国共同運営⑬両国は異文化理解促進や人種差別をなくす教育プログラム実施⑭領土については未解決で複数の選択肢Ⅱ(選択肢1)「現状維持」事実上の境界線で国際部隊による監視(選択肢2)ドンバス地方に潜在的な自由経済圏を設定非武装化・領土問題の最終決定は首脳レベルで行われる可能性⑮将来の領土についてウ・ロは武力で変更しない約束⑯ロはウのドニプロ川と黒海の商業利用を妨害しない⑰人道委員会を設置⑱ウは署名

三一日、プ大統領公邸をウがドローン攻撃したとのロの主張を巡り、米CIAが「標的にしていなかった」と結論づけたと報道された。

新年に入って一月三日、ト大統領は自身のSNSで、反米左派政権が率いるベネズエラに対して「大規模な攻撃を成功裏に実施、ニューヨークで提訴されているマドゥロ大統領を妻と共に拘束し国外(NY)に移送した」と述べた。国際法違反の可能性を指摘する声上がるほか、ロシアや中国による一方面的な現状変更の動きを増長させるとの指摘も出ている。

四日、米攻撃で一〇〇人に上る死者も出、国防相は徹底抗戦を呼びかけ、副大統領は「マドゥロ氏こそ唯一の大統領」とト政権に抵抗の構えを見せ、国際的にもその時代錯誤的他国干渉批判が強まる。ト大統領はロドリゲス副大統領を「有力な後継候補と位置付けている」と働きかける一方、「安全保障の為に我々にはグリーンランドが必要だ」と改めてデンマークの自治領獲得を強調した。同日夜には一転ロドリゲス暫定大統領が「国際法の枠組みの中で、共通の発展に向けて、米政府と協力することを呼び掛ける」と「米国と世界に向けて」と題したメッセージを発信した。

五日、マドゥロ大統領は、麻薬・テロリズム・共謀等の罪で起訴された裁判の被告人としてニューヨーク連邦地裁に初出廷「私はベネズエラの大統領であり、拉致さ

後出来るだけ早く選挙実施⑲合意は法的拘束力を持ちト大統領が議長を務める平和評議会が実施の監視と保証を行う⑳全ての当事者による合意後完全な停戦が直ちに発効。これに対しロが大幅に修正を求める方針と報じられた。

二五日ゼ大統領は米ウイットコフ中東担当大使やクシュナー氏と電話協議、「安全の保証」や復興計画を含む経済の分野で進展があったと発表した。

二七日、イランのペゼシキアン大統領は「私の見方では我々は米国、イスラエル、欧州との全面戦争に突入している。彼らはイランが自立することを望んでいない。」と反撃の可能性を示唆した。二九日米との会談でネ首相がイランへの再攻撃計画を説明するとメディアが報じている。

二八日、ト大統領とゼ大統領が会談(フロリダのト氏私邸マール・ア・ラーゴ)、ト氏は和平案の完成に「非常に近づいている」と強調したが、焦点の領土問題では結論が出なかった。一方、プ大統領は米ウ首脳会談直前にト氏と電話協議をして改めて譲歩を拒否する姿勢を示しており、和平実現への道のりは依然として厳しい状況。米国による安全の保証についてゼ氏は「一〇〇%の合意に到った」としたがト氏は「合意まで非常に近いところ迄きているものの、難しい問題が一、二点ある」とした。領土問題についてト氏は「未解決だ」と明言した。

れた」と述べ四件の罪状を全て否認した。同日国連安保理は緊急会合を開催、加盟国からは国際法や国連憲章への違反だとする批判が相次いだ。また、グリーンランドについては、デンマークは勿論EU各国から批判の声が上っている。そんな中ト大統領は、麻薬対策が不十分だとしてコロンビアにも軍事行動をとると威嚇し、政府への抗議デモの続くイランにも介入を示唆している。

六日、欧州を中心としたウクライナ支援有志国は、同国の「安全の保証」に関する首脳会議をパリで開催。共同声明で、ロシアの再侵略抑止のために欧州などの多国籍部隊を陸海空で展開し、米国も支援するとした。共同声明でも米国主導で停戦監視を行うことや奥州主導の多国籍部隊を作ること等基本合意したが、部隊の規模や具体的な米国の役割などには踏み込まなかった。ウ・仏・英首脳はこの日部隊派遣に関する共同文書に署名、ゼ大統領は「有志国による具体的な文書は重要だ」と進捗を歓迎した。

同日ロシアはベネズエラでロドリゲス氏が暫定大統領に正式就任したことを歓迎、必要な支援を引き続き提供するとし、「地域の国々が主権を持ち、発展する権利が確実に保証されるべきだ」と強調した。しかし支援に具体的には踏み込まず、ウ侵略を巡るト政権との関係を重視し、対米批判を抑えている。

七日、米軍はベネズエラを出入りする石油タンカーを

拿捕、ロシア国旗を掲げ航行していたのは偽装で、米が制裁対象とする無国籍の影の船団だとした。同日米大統領報道官はグリーンランド購入について「買収は新しい考えではなく一八〇〇年代の大統領から歴代国家安全保障にとって有益だと主張して来た」とし、ルビオ国務長官は「来週デンマーク政府高官と会う予定」と表明した。

同日、G7外相は電話協議を行い、米国の説明を受け引き続き緊密に意思疎通を行い連携して行くことで一致した。一刻も早いベネゼエラの民主主義回復、自由・民主主義・法の支配といった基本的価値や原則尊重、ウクライナの安全の保証に関する進展の歓迎など意見交換が行われた。

一二日、ト大統領は自身のSNSに「イランと取引する国は米国とのあらゆるビジネスに二五%の関税を課す」と投稿した。一日にはデモ隊の鎮圧で死者が出ている事態を受け「強力な選択肢を検討している」と述べていたが、この日レビット大統領報道官は「大統領にとって常に外交が最優先だ。しかし必要と判断した場合は軍事的な選択肢もためらわず行使する」と説明した。

同日、英国防省は報道（グリーンランド派兵検討）に「NATO同盟国と協力し、北極圏での抑止力と防衛力を強化することに尽力している」と答えた。

(二) コロナ

セーフティ・インステイテュート【AISI】の改革。なお一九日新たにA Iの研究開発におけるガイドライン（指針）も基本計画と共に策定した。

二四日、二〇二六年度の実質GDP成長率が一・三%（名目三・四%）になるとの経済見通しを閣議了解した。八月内閣府（季節調）試算から〇・四ポイント上昇となる。実績見込みとなる二五年度は一・一%（名目四・二%）。経済対策の効果で内需が成長を牽引する姿、個人消費一・一%増、設備投資は二・八%増。

二六日、厚労省発表の一一月の有効求人倍率（季節調）は一・八倍と前月横這い、物価高騰や省人化、最低賃金の引き上げに伴う求人控えの動きが見られた。同日総務省発表の一一月の完全失業率（季節調）は二・六%と前月と同じだった。

年が明けて一月八日、厚労省発表の二五年一一月の毎勤統計によると実質賃金は前年同月比で二・八%の減少、一一か月連続のマイナスで物価上昇に届かず。一人当たり現金給与総額は三一万二〇二円と〇・五%増えた。

九日、総務省発表の二五年一一月家計調査によると、二人以上家計の消費支出は三一万四二四二円、実質で前年同月比二・九%の増でプラスは二か月振り、食料品が全体を押し上げた。同日、米労働省発表の一二月の雇用統計で非農業部門雇用者数（季節調）は前月比五・〇万人増だった。事前市場予想（六・〇万人増）を下回った。

一二月二六日、厚労省発表の新型コロナウイルス感染症の発生状況で、一二月一五～二二日の新規感染者数は、定点当り一・二四人で前週比約一・〇二五倍。

年が明けて一月八日、厚労省発表の一二月二二～二八日の新規感染者数は定点当り一・三二人で前週比一・六五倍。

一三日発表の一二月二九～一月四日の定点当たりは一・一三人で前週比約〇・八六倍。インフルが前年よりピークが一か月早く一月一七～二三日の週に定点当り五一・一二人でピークを付けその後この時点で一〇・三五人迄減少、逆に上し出したコロナも新年に入って減少してゆくのかどうか、注視が必要である。

(三) 金融政策（経済）

一二月二三日、政府は人工知能（A I）の開発や活用の方角を示す「A I基本計画」を閣議決定した。日本の強みを生かしたA Iの開発や研究インフラの整備に注力する。医療や介護、金融など人手不足が顕著な分野への導入を支援する。産業用ロボットなど日本が強みを持つ領域で海外展開を巻き返す。また安全性・利用の適正化に日本独自の「信頼できるA I」の作成を目指すためA Iの信頼性や安全性を評価する機関を充実させる（A I一方失業率は四・四%で市場予想（四・五%）を下回った。

一三日、週明けの日韓首脳会談や与野党の解散準備加速を受け、円は一時一ドル一五九円台の円安をつけると共に株価が五万三千円台へと急騰した。

(四) 政治（社会）

十二月二一日、日経とTV朝日実施の世論調査によると、高市内閣の支持率は七五%で前回横這い、一〇月の内閣発足後三か月連続で七割台の内閣支持率を維持した。自民党の支持率は三七%で前回調査より四ポイント低下。定数削減については、「選挙制度見直しと一体でなすべき」五六%、定数削減のみが二四%、必要ないが一二%だった。朝日全国世論調査でも内閣支持率は六八%、一〇月から三か月連続で七割近い支持率である。首相の対中姿勢についても評価が五五%、評価しないが三〇%だった。

二三日、取材に応え高市首相は、責任ある積極財政について「無責任な国債発行や減税を行うことではない」とし、長期金利が上昇圧力を強める中市場の信認を意識し財政運営する姿勢を強調。プライマリーバランスも役割を終えた訳でなく数年単位でバランスを確認するとした。早期の衆院解散については明言を避け「いま私が必死になっているのは成立した補正予算の執行だ。国民に

高市内閣の物価対策と経済政策の効果を実感して頂くことに没頭している」と説いた。

二六日、政府は閣議で二〇二六年度予算案を決定した。一般会計総額一二二兆三〇九二億円で前年度当初を七兆円余り上回り六・二%増となった。物価上昇を各経費に反映し歳出が膨らみ、二年連続で過去最大を更新した。医療や介護などの社会保障費が三九兆五五九億円で最大となり二・〇%増、それ以外の一般歳出が四・三%増の三一兆九百八十八億円で、地方交付税交付金等が二〇兆八七七八億円で一〇・六%増、国債費が三一兆二七五八億円の二〇・八%増となっている。歳入は税収が八兆九百九十九億円の七・六%増、その他収入が八兆九百九十九億円の三・〇%増、新規国債発行が二兆九百八十四億円で三・三%増となった。国債依存度は二四・二%、国債費を除く歳出を税等収入で賄えるかを示す基礎的財政収支（プライマリーバランス）は一兆三四二九億円の赤字に転ずる（前年度当初は七八一六億円の赤字）。同日政府は二〇二六年度の税制改正大綱を閣議決定した。所得税がかり始める「年収の壁」の一七八万への引上げや全業種を対象とする設備投資減税の創設などを盛り込んだ。各項目を一年間適用した場合、税収は国と地方の合計で七一〇〇億円ほど減る。

年が明けて一月二日、日米首脳が電話協議、首相は「日米同盟の強固な連携を確認できたことは極めて意義深

一二月に入ってから四日、政府がまとめた個人情報保護法改正の内容が判明。病歴や犯罪歴などの「要配慮個人情報」について、統計情報の作成が目的の場合は本人同意なしで取得出来るようにする等、経済界の要望を受け企業などが人工知能（AI）の開発を進め易くするよう規制を緩和する。悪質な違反に対する課徴金制度も導入する。

一日、トランプ米大統領は、人工知能（AI）を巡る規制を全米で一歩化するための大統領令に署名、AIに関する連邦法を作り、企業の負担増につながる州の独自規制を制限する方針を示した。過剰な独自規制を導入していると判断した州には訴訟を起こす。カリフォルニア州やコロラド州等既に導入済みの州からの反発は必至であり、一月二五日には全米三六州知事が連名で反対書簡を下院議長などに送っている。

（二）「自習の試み」との関係で考えるところ

といったように、トランプ登場以降AI規制の動きは遅れがちで、経済ではAIバブルの兆候が囁かれ、ロボティクスでは生成AI搭載で人間知性や感情を備えるロボットが視野に入ってきている。加速早期化しているシンギュラリティ到来に危機感を持ち、AIのあるべき姿・人間との共存・その為の対応など手遅れにならないよう正面から議論し打ち手の決断実行を願うところである。

かった」と述べ「ト大統領から訪米のご招待を改めてもらった（今春訪米で調整を進める）」と説明した。

九日、外為市場で円が一時一ドル一五八円台に急落、首相が衆院解散の検討に入ったとの一部報道を受け積極財政の加速による財政悪化が改めて懸念され円売りが膨らんだ。一方財政出動による景気下支えを期待した株式市場は日経平均先物が急騰した。疑問や反対の声を上げた野党等、首相も「物価対策や経済対策に実感を持って貰うことが重要」と答えるだけだが、次第に与野党臨戦体勢モードに入っていく様子を呈している。

一日、高市首相の出身地奈良で日韓首脳会談が開催された。シャトル外交継続で一致し、供給網分野も含む経済安保や科学技術、共通課題、文化面等の協力、北朝鮮完全非核化、日韓・日米韓（米韓留連携）の協力の重要性確認を行った。日中関係絡みでは、共同会見で、先般中韓首脳会談を行って両国関係の改善を図った大統領は「日中韓三カ国が最大限の共通点を見つけ出し、共に意思疎通し協力する必要がある」と加え、中立の立場を貫いた。

二、ロボット論

（一）AI開発・規制の動き等

三、自習の試み

（仮題）道

（その一〇）別ライフの道

（一）山中湖の道

【富士登山】

一九六〇年（昭和三十五年）夏休み七月半ば過ぎ、中央線大月駅で富士急行線に乗り換え、高校の級友三人と夕暮れ近い富士吉田駅に降り立った。目的は富士登山、それ迄中学時代の仲間と週末の奥多摩の軽装山登りハイキングはやって居たが、初の本格登山しかも日本最高峰の富士である。進級し組替えになり登山サークルに属している新たな級友が山登りの魅力を熱心に語った。あとの二人もそれに乗った。美形で高山故実際歩く五合目以上の殆どには樹林草木も複雑な地形もないから、皮肉なことに初心者には最初の山として最適だという。難しい山の経験のある案内役と何にも邪魔されない三百六十度の絶景にのみ心奪われて、早速行動（登山）となった。

あの夕焼けに秀麗天高く聳える頂に登るのだと、五合目登山口に向かうバスに心躍らせて乗り込んだ。この時点では、道をしっかり踏まえて歩くべき足はむしろ浮足立っていた。着いた五合目はそうした気持ちに違いない

老若男女が大勢、浮き浮きと構内外で準備をしたり談笑したり休息をとったりしていた。

その喧騒の中私達も身支度を整え、足元を支える六根清浄の棒杖を買い求め、ぞろぞろと続く列に加わる日暮れや遅しと、逸る気を抑え機を待った。

空の夕焼けが消えなす頃四人で鎖き合うとやおら登り口に取り掛かった。しばらく歩くと林を抜けて、果てしなく広がる大地を後姿を重ね連ね蛇行して何処までも登って、天空に溶け込んで行くような登山者の列に我々も飲み込まれて行く何か霊場に入ったような不思議な感覚を味わった。列のそこそこに蠟燭が揺れるように懐中電灯の光が揺らめいている。足元で棒杖の石を打つ音がし出し、やがて岩のごつごつしたジグザグの山道を、前を追いつつザクザクという足音だけの世界になる。上からの落石に注意しつつ懐中電灯の暗い明りを頼りに黙々と登る。長蛇の列の道の曲がり角の平らなスペースに、疲れて休んで、夜空一杯に散りばめられ煌めく星々や暗い眼下山裾に展開される影絵のような森や湖や街の存在を示す点々の明かりに見入っている人々が増えてくる。声を掛け合って我々は黙々と登り続ける。登山靴の足の感覚も馴染んできた。

より広い休息スペースのある山小屋も一度を除き素通りで夜つびいて八合目まで登り続けた。ここで朝の頂上からご来光を仰げる時間との間隔を推測、登り時間まで

休息・仮眠をとり、朝の冷涼な気を感じる頃また四人声掛け合って頂上を目指した。頂上に着くと辺りが白んできたこともあり、こんなに沢山の人々が登っていたことに改めて気づき、皆と今か今かと雲海の向こうに登ってくるご来光を待つ。

天空を染め上げながら世界を光で包むページェントにため息しながら皆が見入っている。やがて朝の冷気を身体が強く意識する時が来ると、目を後ろに向けて火口を振り返りその巨大な穴の大きさと何処迄も吸い込まれるような深さを垣間見つつ、火口外延を歩き乍ら陽の光に霧雲の切れ行く中、遙か眼下に向かって姿を現し拡がりゆく、四囲の圧観を眼で追い求め楽しんだ。

帰路下山道は登りと別、はじめ砂利のジグザグ道がひたすら続き八合目の山小屋が見え、さらに下ると、八合目の須走ルートへの分岐点にさしかかる。元の吉田口へ降りるようルートをとる。次第に砂が深くなりこの砂の道が、岩が混じるなど多少変化しながらも、延々と六合目辺りまで続く。遮るものなき炎天下高度が下がるから気温も倍速で上がってくる砂の道(砂走り)。はじめは小股で滑ったり倒れたりしないようにそろそろ降りていたのが、次第に後傾姿勢と足の出し方で滑り降りるような爽快感を味わいながら、数百メートルの砂礫の道の砂走りに興じた。六合目の広いところに降り立って、そのまま

この調子でと思ったが足元の感覚が違う、薄く砂が覆う岩畳の道であり今度は滑らないよう気を付けねばならなかった。やがて樹林の道に入り五合目に降り着いた。

富士山について残る記述で古いのは平安時代の「富士山記」(都良香)、山頂に美女が二人舞うとのこと。そこから富士山の神は浅間大神・女神で後に木花開耶姫(このはなさくやひめ)が定着、度々起る噴火を鎮める為に麓に浅間(あさま・せんげん)神社が立てられた。そんなことを八合目から頂上まで同行した若いカップルが教えてくれた。バスでまた富士吉田駅(現富士山駅)に戻るが、側の(吉田)浅間神社を訪ねた。高く深く続く杉の木立の夏でも森閑とした参道を進むと、奥に歴史を感じる社殿がひっそりと心鎮めるように迎えてくれる。無事富士登山を終えたことを浅間の神に感謝御礼した。

帰京後三日目には山中湖へ。

【山中湖畔キャンプ場】

九人の高校クラス仲間が新宿に集合、夫々にキャンプ生活に必要な考える荷物をリュック等に詰め抱えて山中湖行きのバスに乗り込んだ。この頃は遠距離バスにはバスガイドさんが同乗することが多かった。国道二〇号線をひた走ると、沿道の相模湖の風情や猿橋の由来やら、見えだした富士の見え隠れの度にそれにまつわる話を繰り出

したり、観光バスガイド文化の残る時代であった。

気が付くと前週立寄った吉田の浅間神社を右手に見て、国道一三八号線を山中湖に向かって走っていた。湖水に出る間際には山中湖の浅間神社と諏訪神社が道を挟んで同居しており、抜け出て暫く湖畔を走ると旭日丘ターミナルがありここで降車。右手に曲がれば一三八号線が駕籠坂峠への昇り道として遠ざかっている。ここからの定期バスは時刻表に見つけるのがやつの紙魚点である。

皆荷物を担いでぞろぞろとキャンプ場である湖山荘までと、湖東端の平野から道志村の山伏峠を越え相模原市に続く道志路に繋がる湖畔沿いの道を歩き出した。炎天下偶に車が走り過ぎると白い砂煙が立ち、一瞬友の顔が見えなくなる。何故かフェーン現象でカラカラの真夏の佐渡の田舎道をアイスキャンデーを買いに走った道でこの白煙に包まれた思い出がよみがえった。やがて、左手は湖畔の砂浜、右手は林の中に小さい白いバンガローが点在する湖山荘停留所ボストの字がその煙の中に現れた。

高校生の若者が九人、犬小屋を大きくしたような重ね板の白屋根・白壁長方形の五坪畳一〇畳あるかないかの中を覗いて先ずは吃驚を口々声にした。手続きした管理事務所から布団を持ち込んで処狭しと積み上げ、重なり合わず寝れるのかと心配しつつ、ゴザ敷きの床の上で運動着姿に着換え荷物を置いて、弱気を振り払うように猛然と湖へ皆で走り出た。いかにも山の湖の古びた木製の

棧橋からそして手漕ぎボートから、湖越しに山裾を長く延ばした富士を仰ぎ見ると、あの頂に居たんだと何か信じられない様な感慨に陥って気が落ち着いた。

心配はそこまで。兎も角キャンプだから、飯盒炊飯とまで行かなくても、キャンプ提供の食材・食器・炊事煮炊き場・青空食卓を使って何とか用意、わいわい騒ぎながら腹を満たし、折り重なる程人口密度の高いキャンプ小屋でぶつかり合いながらも寝起きを共にした。昼は湖畔での水遊びや背後の低山登りやキャンプ場内の遊戯・スポーツ施設で羽根を伸ばした。誰かしらの口吻が途切れる感も無くあつという間のキャンプになった。

そしてまた炎天の白い砂埃の湖畔の道を歩く日がやってきた。白い歯が目立つと思ったら皆顔が黒く焼けていた。自然児になって旭日丘のバスターミナルから皆元気に帰京バスに乗り込んだ。

三日後には、小・中・高と一緒だったり別だったりする四人組の那須縦走登山の旅が待ち受けていた。

【山中湖大学寮】

それから五年後の夏、高校のクラスは毎年組替えがあったがずっと同じクラスで大学も学部は違うが同じで名前も頭文字Nでクラス名簿は隣の親友と、山中湖の大学寮で二・三日過ごした。古い下宿宿のように窓ガラスもガタピシし擦り切れた畳だけの殺風景な部屋に二人寝

一九七一年連れ合いが出来た。それに山中湖がついて来た。連れ合いの家は昭和初期祖父の代から主に夏、山中湖畔の棲み家に滞在するのを旨としていた。初めての夏、北海道に赴任する直前短時日、ここで一緒に過ごした。初日肌寒い夜明け前に起き出して、陽に染まりだす富士を背に湖面の霧が薄れだし、陽炎が立ち上りだす砂浜で手を注ぎ、あの国道一三八号線をあの旭日丘バス停からあのキャンプ場方向を目指して一人歩きだした。

山中湖は湖面六・五七平方キロ、周囲約一六キロ、五湖のうち最大面積で標高も最高(全国三位)、一番浅く、深いところでも水深一三米。村全体が標高千米前後。牛に似ているので臥牛湖が別名。延暦大噴火で溶岩が桂川を堰き止め形成されたと言われる。その頃の冬は全面結氷、年間平均気温は一〇度を大きく下回り夏でも寒い日は暖炉に薪をくべた。明治初期合併で中野村となっていたが六年前の元旦に元の山中湖村に改称されていた。

朝食前に元の旭日丘に帰り着こうと、途中寄り道が必要なところもあるからやや速足で回り始めた。しかし左手は樹林の先に砂浜(ボート小屋が偶に)と湖面が見え隠れするだけ、右手も奥に保養施設らしきものが垣間見えるも道沿いは樹林が続く道。東端平野湾(一番浅い処)で西に回り込むまでに、字を目にしたのはキャンプ場の看板と鬱蒼として何も見えないが日本最初の私人の古びた表札だけであった。ここで国道四一三号は湖と別

泊まりした。恩賜林を演習林として利用してきたのだから面積は広いが、そこに小さな小屋まがいがあるという感じ。現代的に見えたのはラグビー練習場からジャージー姿の部員達の声がひびいてくることと、湖畔の小さな静から白帆のヨットが夏富士が影を落とす山の湖に涼やかな風をはらんで湖面に舞いだしてゆく様ぐらいか。

ヨット部が寮管理をしていて、毎朝早く宿泊者達は全員叩き起こされ、皆で朝礼体操に付き合わされる。富士を拝んでその後朝食をとって自由行動という日課。そもそも我々は久しぶりに大学キャンパスで会い、休みになったらゆっくり話でもしようと思ってきたので、多少散策はするが人のいるようなところには行かず、終日涼しい木立の中の寮で、取り留めもなくだべっていた。そういえば高校時代ちよつと先の湖畔にキャンプに君も来たよね、というの喋っているうちに鮮明に思い出されてきたことであつた。

小学校の遠足で御坂峠から富士を眺めた・高校で登った・湖畔から見上げながらキャンプした・大学で見直した、まだこの時点ではいわば行きずりの縁に過ぎない。「富士には月見草がよく似合う」というような心情が深まっているわけでもなく、足裏が忘れぬ道になっているわけでもない。そうなるにはあと六年の月日を要した。

【富士山中湖の棲み家】

れ山中湖村と道志村の境界に存在する山伏峠を越え終点の相模原市緑区に至る。そちらを一瞥するも緑以外は通りに面した寺の石柱らしきものがちらと見えただけ。そのまま視線を戻して角に田舎のよろず屋らしい年季入りの店を外からちよつと覗いて湖畔の道を歩き続けた。これならそう速足で歩く必要もないなと思いだすと、右手に湖畔には珍しく畑が暫く続き野菜など作っていた。因みにその後知ったのは、戦後入植した農家等が虹鱒養殖などもして住んでおり畑の脇道をずっと深く分け入る必要があつたこと、道志村への別れ道口の寺には戦中戦後をここに住んだ三浦環の墓があること。世界的オペラ歌手蝶々夫人役で有名なマドンナの妙な歌声は湖面を亘り対岸旭日丘でも聞こえたとの伝説まである。

程なく道は急勾配となり両側樹林帯の続く坂に差し掛かった。湖畔の切れ込みに沿って蛇行しながら息を整えながら登る。途中一か所右手脇に急坂からの急小道出口に「山中湖村東小学校」との新しい標識が目に入った。小学生達が毎日この急坂を駆け上ってゆく姿が思い描かれ胸が熱くなり、自分の足元にも力が入った。やがて坂は峠へ、樹林は変わらないうが今度は左手湖畔側下方に由緒ありそうな料理屋の屋根が覗き見える。ここは湖へ半円形のように岬が突き出して「ママの森」と呼ばれ昔からの名所だと聞いていた。この辺りから富士が進行方向にある筈だが鬱蒼としていて見えない。

まだ蛇行の続く下り道を自然と足早に下り降りる。樹林が切れ平坦になる頃左手湖面の彼方に朝陽を浴び裾野を右手に長く延ばした富士が姿を現す。臥牛湖の別名の通りここから湖畔沿いは背中に当たるので二、三か所の緩やかな曲がりはあるが基本的には進行方向はまっすぐに西端まで続いている。この時間湖上には何も動いていないものではなく、さざ波の湖と前方青空にそびえる富士のパノラマだけが視界にあった。右手山側も地元建設会社の社屋とわずかの食べ物屋が軒を見せるだけで、別荘等の姿は脇道の奥で目には入らない。

やがて車も通る時間になり数台が静かに脇を走り去った。行き届いた舗装はキャンプの時の白い砂埃りの道ではないと改めて時の経過を唐突に感じた。

右手頭上、尾根の始まる絶景の高みにあるホテル「マウント富士」への登り口を越えた辺りから右手にお店が連なるようになる。その先湖東端富士吉田方面から入ってくる国道一三八号線が交わるところを回り込み湖南面の沿道へ。緑に消えるあたりまでは、ずっとお店が薈めいて見える。湖側には駐車場施設や遊覧船の船着き場やボート乗り場などが見える。朝の釣り舟もちらほらあらわれ湖面に糸を垂れ出した。

この平坦な道を歩き抜けると再び樹林の道に入り込む。左手は浜も湖も見えず樹林がこちら南側湖沿いで一番深い。そして右手は村役場が見えると直ぐあの演習林に囲

まれた山中湖寮の森が続き、その先やや坂を下ると右手に駐車場と二階建ての土産物屋の大きなビルが現れる、そこを折れてバス会社の社員寮の上隣り、カラ松林の緑が始まるところがこの朝の散歩の終点であった。

【星霜移り半世紀】

この後帰京して幼子の子育ての間と、そして湖畔で皆に送別の会をして貰い海外赴任に出て帰国、現代風に住んで直した棲み家に迎えられて夏休みの何日かを義父母と過ごした年代と、そして義母と我々で夏休みも長逗留になり五月連休もともに出かけともに過ごした数年前まで、そして今家内の手になり夫婦で折々過ごすこの棲み家。

この間ずっと往還は車でありまだ運転は現役である。お蔭で私の方の家の棲み家のある熱海とも箱根経由で道は繋がった。小田原から国道一号（東海道）と重複し箱根町宮ノ下から乙女峠・籠坂峠を通って旭日丘に達する国道一三八号でも芦ノ湖・富士山・山中湖の絶景を堪能した。地球環境温暖化は着実に進み、冬季完全結氷は二〇〇六年を以て終わり今周りの村の家々にはクーラーが入るようになった。暖炉を夏に焚くようなこともなくなり、逆に冬も山小屋でも暖炉をたけば行けるし過ごせるようになった。

例の土産物屋は今では廃墟でもう半世紀近く土産物からゲームセンターになり、それがバブルとともに潰れその

後廃墟となり、取り壊されもせず国立公園の景観を穢し続けている。その後の山中湖の賑わいの裏の象徴のように見える。砂浜が狭くなり諸施設が乱雑に設置されているのも温暖化だけでなく人災もありそうである。この年になって車で行けるのもあとわずかかと思いたすと、山中湖の道が五感から消えてゆきそうな気がする。いずれにせよあの初めてで最後の湖畔同時一周の道こそが山中湖の道そのものであった。

つづく

短歌

冬に寄せて

鈴木 興

修猷の友

博多、修猷館高校時代の思い出

東風吹かば思い起こせし太宰府の 合格祈願修猷の友と

ご利益あり全員合格

修猷の友と博多の海に石 水の輪作り夢の輪語り

博多湾三角石投げ水の輪に 何故だと言ひし友宇宙工学へ

友は東大宇宙工学へ進んだ

親友の家に鎮座す棺桶を 睨みて我等夢を語りし

親友の家は葬儀屋さん

猛吹雪久住の山の霧氷中 白銀のみにて迷うもの無し

遅刻せし我れ教室へ友曰く 「鈴木お前は枯れススキ」(笑い)

冬の夜の豚骨ラーメン屋受験前 湯気もうもうと我れに力を

博多駅いよいよ別れ東京へ 涙に霞む修猷の友

父が東京本社へ転勤となる

冬から春へ

裏の柿実の落ち土になりし頃 冬の到来木枯らし走りて

パンジーの愛しき花はパンセとか 見つめ頷く考える人
パンジーは仏語パンセ（考える人）が語源とか

梅の花桜に譲る健気^{けなげ}にて 春待つ姿清く美し

風立ちぬ土手の片隅水仙の 背伸びして待つ春遠からじ

京都

橋桁にそつと寄り添う二羽の鴨 祇園の賑わい知らんとばかりに

詩仙堂光を浴びし若葉萌ゆ 我が身に欲しき燃える若さよ

鴨川を白鷺の群れ飛び立ちて 何処^{いずこ}へ行かん澄みし青空

俳句

雑俳十六句

宇井偉郎

熊手持つ子を肩車人の波

十帖の大風風の遠江

小上がりに加賀友禪の女礼

神棚の位置変えてみる神の留守

天井に飾り風ある浮世床

蛸薬師上ル仕舞屋雪時雨

三次より天地無用の濁酒

一滴を磨つて賀状の礼を書く

石路の花地図一つ描き加ふ

鉦叩き空家になりし両隣

小上がりに女礼者の裾模様

美作の白桃届く恙なし

小熊手を供へての雨の一葉忌

売れ残る更地に秋の麒麟草

月旦に亡き人多しおでん酒

古書店に異本を探す憂国忌

近代日本洋画こぼれ話 (第九回)

水谷嘉弘

21 栗原忠二 美校卒業後、渡英した稀有な画家

近代日本洋画をテーマとするエッセイを書き始めた当初から気になっていたのだが、なかなか取り上げられなかった画家がいる。栗原忠二(1886～1936)である。川島理一郎、藤田嗣治と同じ歳だ。

栗原忠二は、近代日本洋画史上最も知られた画家の一人萬鉄五郎と美校の同期入学、同期卒業である。1928～30年、帝展に3回連続して出品し、1929・昭和4年美校同期らと共に第一美術協会創設メンバーになるなど活躍した。しかし、これだけエッセイの題材にした画家との接点がありながら、私が栗原を書く機会を失った所以は、栗原の美校卒業以降の行動パターンにある。彼は1912年3月に卒業するが、同年10月渡航し向かった先

はイギリスだったのである。当時の渡欧者はほとんどがフランスで、相互の往来が盛んで書くエピソードに事欠かなかった。

美校に西洋画科が設置され(1896・明治29年)、翌年から卒業生を出し始めると欧州留学する者が続出する。西洋絵画受容の展開期に入ったと見做せよう。1870年代後半から80年代前半に生まれた世代である。

白滝幾之助(1873生、1898卒業、1904渡米、渡英)、和田英作(1874生、1897卒業、1900渡仏)、斎藤豊作(1880生、1905卒業、1906渡仏)、児島虎次郎(1881生、1904卒業、1908渡仏)、山下新太郎(1881生、1904卒業、1905渡仏)、南薫造(1883生、1907卒業、同年渡英)、太田喜二郎(1883生、1908卒業、同年渡ベルギー)他の面々だ。

1885年生まれの萬鉄五郎に始まる世代、青山熊治(1886生、1907中退、1914渡欧)、藤田嗣治(1886生、1910卒業、1911渡仏)達の兄貴分にあたる。そのほとんどが師、黒田清輝(1866生、1888渡仏)に倣い、油彩画の本場フランスに向かった。

一方、浅井忠(1856生、1900渡仏)の関西美術院や、小山正太郎(1867生、1900渡仏)の不同舎からも、鹿子木孟郎(1874生、1900渡米、仏へ)、満谷国四郎(1874生、1900渡米、仏へ)、続く萬鉄五郎世代の安井曾太郎(1888生、1907渡仏)、梅原龍三郎(1888生、1908渡仏)が留学した。多くがパリのアカデミー・ジュリアンでジャン・ポール・ローランス(1838～1921)に学んだ。

しかし、フランスではなくイギリスに留学した者がいたのである。黒田清輝は美校出身者がイギリスに行くのを嫌ったようだが、その意に従わなかった珍しい人物が、栗原忠二なのだ。栗原の画業を時系列的に見てみよう。



【月島の月】1909



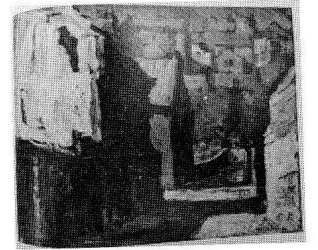
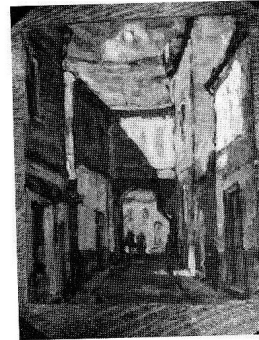
【自画像】1912
(全て図録画像)



【山道の風景】1911

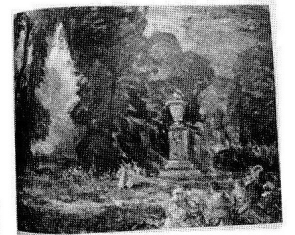
栗原忠二は静岡県(現在の)三島市に生まれ、1905・明治38年19歳の時、法律家を目指して上京し中央大学に入学するが、翌々年美校に転じる。イギリス・ロマン派の画家ウィリアム・ターナー(1775～1851)に傾倒して美校の友人たちから「栗原ターナー」と呼ばれた(曾宮一念「思い出」)。3年次に【月島の月】が白馬会展に入選、朦朧とした大気の中で墨田川河口に沈む夕日と川

面の小舟が画面全体を覆う赤茶色と茶色に漂う崇高ともいえるターナー調の油彩画だった。そこには既に、後に彼が到達するヴェネツィア水景図の構成と筆さばきを見て取る事が出来る。栗原の本来の素質が、抒情を好む自然観照家、ロマン派系だったのだろう。東京朝日新聞で好意的に言及された。卒業年(1912)に渡英する。1914年にはフランク・ブランクイン(1867~1956)に師事し、画風が変化する。茫洋とした筆致に動感が加わり、モチーフ描写に構成や造形の意図が感じられるようになった。同年王立英国美術協会準会員となった。



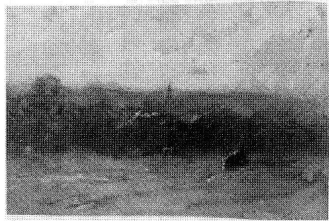
【(仮題) 街並】1918 6号油彩・キャンバス
【納屋】【家並】図録画像 共に1919以前 油彩

第一次世界大戦が終わり、翌1920年5月栗原は初めてパリを訪問した。そこで印象派の色彩と軽快な筆遣いを実感したに違いない。帰国後描いたロンドンはじめイギリス各地の風景画の印象が一変する。短く、早く、筆触分割された油彩画は鮮やかだ。ただ、話は細かくなるが、栗原の風景画に描かれる点景人物は感心しない。個性、体勢、状況が伝わってこない。一歳下の美校同窓生、北島浅一の卓拔さとは比べるとかなり差がある。



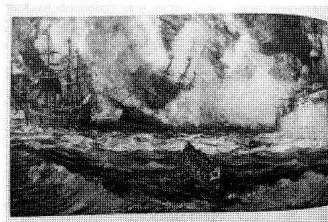
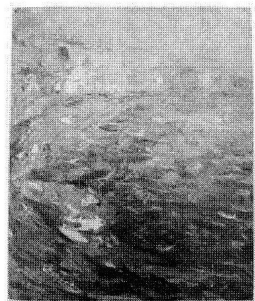
【(仮題) イギリスの田園】1920年代前半6号油彩・板
【人物のいる森の風景】【ロンドンの公園】図録画像共に1920年代前半

さて、栗原忠二は渡英8年後の1920年11月、第一次世界大戦の為長らく果たせなかったターナーの主たる写生地で、ブランクインも描いたヴェネツィアの地を踏んだ。往年來のターナー好みと先立つパリ訪問で触発されたフランス印象主義が相俟って、ヴェネツィアの光に満ちた揺蕩う大気と水景が明るくおおらかに描かれる。一見同じ印象だが、油彩と水彩には異なる筆遣い、色遣いがみられ、特に水彩画の仕上がりは美しい。ヴェネツィアへは1923年まで毎年訪れ、栗原絵画の代表作群が形成されるに至った。1923年にはイギリスから日本橋三越に水彩画を送って個展を開く。(全て図録画像)



【英国風景】【ロンドンの雨】【春のヴェニス】 全て水彩

12年間のイギリス滞在を終え1924年に帰国し白日会創立に参加して水彩画を出品、これも好評だった。1926年2月再渡欧し翌年11月帰国、1928~30年帝展に3回連続入選、白日会展や四十年社展ほかにも出品し個展(作品頒布会)も開く。1929年には美校同級生と第一美術協会を結成、海軍省から委嘱され海戦図を描くなど活発に動いた。が、1936年11月50歳の時、胃がんに侵されて急逝してしまふのである。本邦での本格的な画業展開を果たす前に亡くなってしまったのだ。帰国後描かれた3枚の油彩画を紹介する(うち2枚は没年作、全て図録画像)。



【雲のある半島】【日清戦争、豊島沖海戦】1936 【千葉の海岸】1936

栗原忠二はしかし、エコール・ド・パリの全盛期であり多くの日本人画家が己の画風を模索し取っ掛かりを掴み始めた1930年代半ばには、既に自分の方向性を定めた画家だった点に注目したい。自分のスタイルを持っていた。そのキャリアを、近代日本洋画のメインストリームから外れたところ―傍流―で作り上げていた。傍流といっても、勿論甲乙の価値判断を伴うものではない。多数派に対する少数派といった意味合いである。彼は二つの面で少数派だった。

少数派の一つ目、イギリス指向だった。近代日本洋画の展開期に入る頃に、フランスではなくイギリスに渡り、ターナー、コンスタブル(1776～1837)、クローゼン(1852～1944)らイギリス・ロマン主義やラファエル前派、或いはイギリス自然主義などイギリス絵画に惹かれた一連の画家群がいた。原撫松(1866～1912、1904渡英)、牧野義雄(1869～1956、1893渡米、1897渡英)、白滝幾之助(1873～1960、1904～1911渡米、渡英)、石橋和訓(1876～1928、1903渡英)、高木背水(1877～1943、1904渡米、1910渡英)、武内鶴之助(1881～1948、1909渡英)、南薫造(1883～1950、1907渡英)、らである。ところが彼らの次の世代―萬鉄五郎を始期とする栗原の同窓生、同年齢者の世代―の多くは印象主義に親しみ、黒田清輝推

が先駆けである。吉田博(1876～1950)は三宅と知り合って水彩画を始め1899年中川八郎(1877～1922)と共に渡米する(1901年、欧州経由で帰国)。穏やかな日本の自然を精緻に描いた風景画は好評でデトロイト、ボストンでの展示販売は順調だった。丸山晚霞(1867～1942、1900渡米)、河合新蔵(1867～1936、1900渡米)、大下藤次郎(1870～1911、1902渡米)、鹿子木孟郎(1874～1941、1900渡米)、満谷国四郎(1874～1936、1900渡米)のち渡欧)、石川寅治(1875～1964、1902渡米)、らが続く。彼らは工部美術学校(フォントナーズ)、不同舎(小山正太郎)の系譜に属し、美校出身者(油彩画作品が主流)の多い白馬会への対抗心もあったのかもしれない。水彩画の隆盛は1898年の明治美術会10周年記念展の出品作の過半数が水彩画だったことからわかる。1992年まで続いた美術雑誌「みづゑ」は1905・明治38年に水彩画専門雑誌として創刊されたのだ。

翻って栗原は美校出身で白馬会に出品していたが、水彩画家としての存在感が際立っていた。他の同年代画家(1880年代生まれ)に比して水彩画の作品がかなり多い。既述のアメリカ・水彩画組とも異なり、下の世代でありアメリカを経由すること無くイギリスに入った。(水彩画界の嚆矢で巨頭の三宅克己も白馬会に属していた。また美校出身の矢崎千代二(1872生)は1900年に卒業し

奨のフランス、ラファエル・コラン由来の外光派に寄って行き、先輩筋を席卷したためイギリス派は衰退する。

だが、栗原は黒田の教え子でありながら、しかも遅れてきたイギリス指向者だったのだ。(美校出身の南薫造は卒業は栗原の5年上は、留学したイギリスからフランスに立ち寄った際、印象派に刺激され帰国後それを自身のスタイルとした。栗原と好対照である)

もうひとつの少数派要素。栗原を語る際には水彩画を外すことが出来ない。明治美術会・太平洋画会系のメンバーを中心に本邦初期の洋画指向者は水彩画に魅せられたものが多かった。我が国の山紫水明に meet し、筆に水を含ませて描く西洋の水彩画は墨筆に似て馴染みやすかったこともある。洋画展開の初期を担った1870年代生まれには美校を経ず画塾等で学んだ後、海外に赴いた画家達が多く居た。渡航時期は1900年前後、行先はアメリカだった。日本から持参し、或いは現地を手掛けた絵が水彩画である。開拓で西進したアメリカでは自然の風景が身近にあり日本人画家の描く抒情的な水彩風景画は好意的に受け入れられた。アメリカ各地で水彩画を販売し資金を得てヨーロッパに渡ったのである。

1897(明治30)年に渡米した三宅克己(1874～1954)

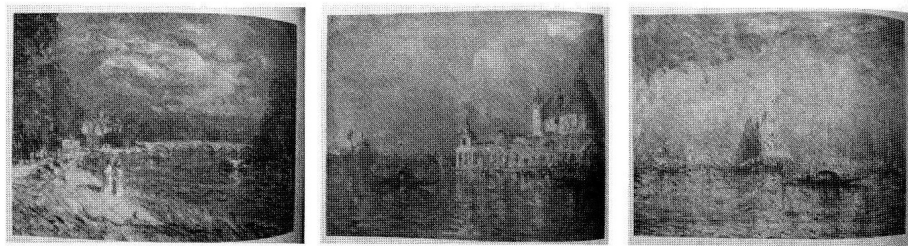
は1903年渡米している。その後欧州に渡った。矢崎はパステル画家として知られる)

水彩画家は何故フランスではなく、イギリスに向かったのか?

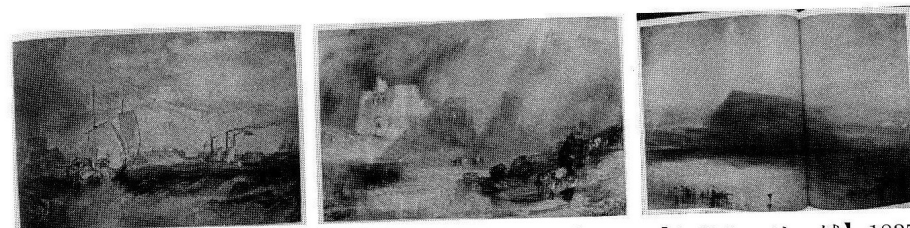
遠因は、江戸末期の1869年、来日して水彩画を日本人に教えたのがイギリス人のチャールズ・ワグマン(1831～1891)と高橋由一(1828～1894)、小林清親(1847～1915)、五姓田義松(1855～1915)、らが彼に学んだこと。1887年以降イースト、バーレイ、パーソンズ等の水彩画家が相次いで来日して各地で写生し展覧会を開く。イギリス流の細やかで詩情豊かな水彩画が当時の画学生を虜にした。これらの背景には、イギリスにおける水彩画の発展がある。イギリス水彩の父と云われるサンダービー(1730～1809)、コーゼンス、ウィリアム・ブレイクに始まり、ターナーからコンスタブル、ロセッティと続く18～19世紀はイギリス水彩画の黄金時代だった。水彩はイギリスの水気の多い風土を描くに適していた。

ここで、ターナーと栗原忠二が描いた水彩画を並べてみる。(全て図録画像)

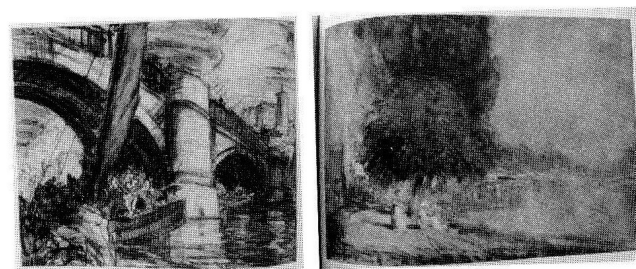
ターナーと栗原忠二が描いた、テームズ川とヴェネツィアの油彩画も並べてみる。



栗原忠二（油彩画3点）【テムズ河畔】【サンタ・マリア デルラ・サルウテ寺院、ヴェニス】1921以降【ヴェニス】油彩1920年代前半



ターナー（水彩画3点）【海から見たドーヴァー城】1822【キドウェリー城】1835【青いリギ山、日の出】1842



栗原忠二（水彩画5点）【リッチモンド・ブリッジ】1910年代後半、【春のテムズ】1920年代



【ヴェニス】【帆船】【ヴェニスの橋】3点とも1920年代



ターナー（油彩画2点）【議事堂の火災】1835【ヴェネツィアの太陽号】1843

栗原の画業を通覧すると、美校卒業制作の自画像や墨田川水景画には、ターナー調もさることながら図録画像を見る限り色調、マチエールに明治美術会系統（脂派）が感じられる。同会派のイギリス指向、水彩画指向と通底する点がある。イギリスでは画壇の大立者とはいえ、構図やモチーフが特異なブラングインに就いたせいからターナー好みはしばらく収まるが、ヴェネツィアを訪れてターナー調が復活する。1901年の栗原展監修者で展覧会図録のメイン執筆者静岡県立美術館の下山肇氏は、栗原のヴェネツィア訪問を「ターナーを再解釈し始めた第1次ヴェネツィア滞在（1920年）」と位置づけ、それ以降に描いた【林道】（油彩画）について「明るいスケッチ風・水彩風の作調・・・印象派に最も近接した作」としている。「ターナーの再解釈」という文句は栗原のヴェネツィア連作を論じる重要なポイントで、若き日の脂派的ターナー調が、印象派体験を経て光と色彩に満ちたターナー調に転じたことを指摘しているのだ。生来の自然観照者だった栗原は、イギリス、フランス、イタリアの自然の中に身を置き、現地でターナーの実作に接して現実と作品の距離感を実感したに違いない。自らの実作にそれを反映したのだと思う。一方で下山氏は、栗原がブラングインに師事したことを「真に幸運な出会いで会ったろうか」と否定的に論じている。栗原の持ち味がブラングインとはマッチしないと看破したのではないか。

私淑したターナーが表現手法を変えながらも創作における一貫した理念のもとに描き続けた生涯と照らし合わせると寄り道したと捉えていたのかもしれない。

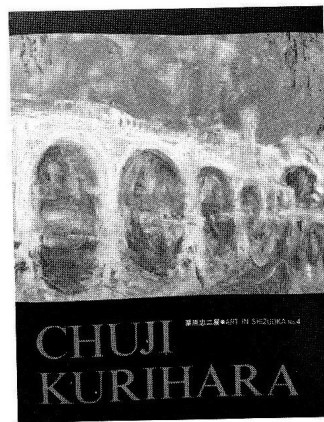
栗原がその才を認められ、キャリアが尊重されながらもターナーの模倣と貶されることがあるのは故無しとは言えまい。栗原が到達したスタイルはターナーをオマージュしてヴェネツィア水景画に収斂したものだだったが、一方でターナーの作品変遷と見比べていくとターナーのある時点の表象の追隨に留まっていたとも見えるのである。

栗原忠二は第2次渡英(1926年2月～1927年11月)からの帰国後は、画壇活動や普及活動に注力し、展覧会には旧作、ないしその焼き直しの商品が多かった。「日本に来たら、さあ描けぬ、まるで勝手が違ふ。熱々考へたら日本の美は外国と全く異なつてゐる、別な美がある・・・そこでやはり水彩だと感じた(「みづゑ」1931・昭和6年1月)」状況でもあった。

彼は同年代の仲間には持ち得ない彼独自のキャリアからつかんだ表現やテイストを展開できなかったのだろうか。唯美指向の強い画家であり、イギリスのロマン派画家達がそうであったように象徴主義、或いは抽象主義に

向かい、彼の情感を反映するスタイルを構築し得たかもしれないのだ。海戦図を描くかたわらそれを予感させる作品も残している。到達する前に世を去ったのは本人ならずとも残念である。

本篇は「静岡の美術Ⅳ 栗原忠二展」図録(1991 静岡県立美術館)、下山肇氏執筆に多くを教わった。下山氏はこの後大学教員として転出され4年後に館長として静岡県美にもどるが、直後に栗原研究を完遂することなく逝去された(2005年)。大変惜しまれる。「もうひとつの明治美術展」図録(2003 静岡県立美術館、他)「ヴェネツィア展―日本人が見た水の迷宮―」図録(2013 宮市三岸節子記念美術館)、も参照させていただいた。



(2025年2月)

22 中村研一 中村研一・琢二生家記念美術館訪問

板倉鼎(1901～1929)の顕彰活動をきっかけとして同時代の洋画家について調べ始めた。先ず画集や展覧会図録等資料類を集めた。段々飽きたらなくなり小品だが作品の現物も手に入れるようになった。眺めているとその日の天候や時間帯で見え方が違う。絵の表情が変わる。そんな事をエッセイに書いてみようか、自分の持ち物だからキツイ事を書いて、とやかく言われることはあるまい。私が美術エッセイを書き始めるに至った経緯である。要は今までネタ(もの)ありきで書いてきたのだ。しかし、中村研一(1895～1967)については数多く登場してもらったのだがネタ(もの)が手に入らず、主人公として文章に仕立て上げることが出来なかった。

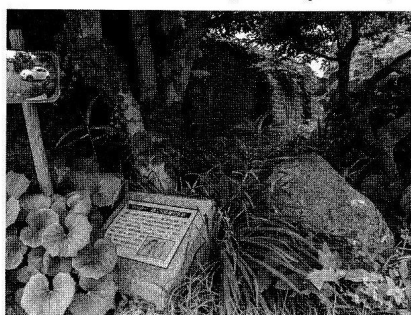
私は中村研一の絵が好きである。1923年から都合5年間の滞欧作はパリで親しく往来したモリス・アスラン(1882～1947)の影響が強いと評されるが、黒と灰色や暗褐色を基調とした原色を使わない深みのある落着いた絵が好きだ。帰国後、帝展に発表された明暗(光と影)のコントラストが鮮やかでよく構成された作品群は、描線の有無にかかわらずモチーフの輪郭が鮮やかでメリハリが深い。戦後になって明るい色遣いが加わってくるが、同時に黒い輪郭線が目立つようになる。中村研一の

画業は、生涯を通じて重厚感に満ちているのに惹かれるのである。しかし、中村研一のネタ(もの)が無い状況は長く続いた。

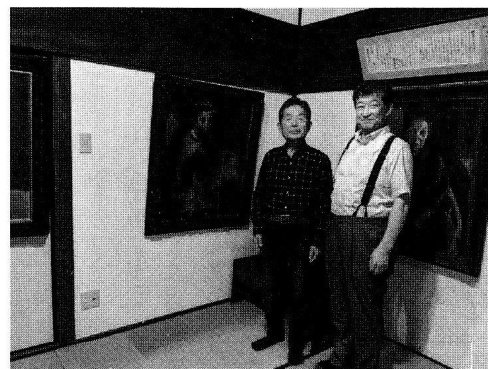
然るに今般、私の海外勤務時代の友人小野祐二氏の伝手で(もの)は無くても、ネタで研一をエッセイに書くことになったのである。

小野氏は、福岡県宗像市出身で県立宗像高校OB。研一が生まれ又育った場所である。2025年6月8日、

彼に連れられて由緒を感じる唐津街道、原町通りに面した「中村研一・琢二生家記念美術館(以下、生家館)」を訪れた。研一、琢二は兄弟画家である。「美術館」とはいうが「生家」の方に重きがあって植え込みに囲まれた門を構える旧家だった。呼び鈴で門扉まで出て



来られた主で美術館館長の中村嘉彦さんに付いて玄關で靴を脱いだ。たたき横の靴箱の上に東京小金井から到来した「中村研一記念美術館」と記された横板が置かれていて「そうだったんだ」と来歴に納得した。招じられて応接間に入った途端、目に飛び込んで来たのが隣の居間に掛けられていた見事な人物画だった。初見だったが一目で滞欧作と分かった。1926年作である。



中村研一作品の前で中村嘉彦館長と

「小さき魚釣り」と題された人物画は茶褐色系でまとめられ、釣竿を持ってこちらをキッと見上げる少女の表情があどけなくも凛々しかった。2024年12月に福岡県立

美術館で開催された「中村研一と中村琢二」展で初公開されたという。知らなかった。この絵の隣には展覧会図録等でよく紹介されている見覚えのある「祖母トミの肖像」1931年作が掛けられていた。両作並ぶと壮観だ。

中村研一の滞欧作、戦前戦中作は、筆捌きがきつぱりとしていて、本邦画家にありがちな細やかさ、悪く言えばチマチマした描き方とは無縁だ。色遣いは明度も彩度も抑えているが陰鬱さが無いので風格が漂う。俯瞰気味にとらえられているアングルも相俟って、「上から目線」とも形容できる描き方と言ってもよからう。近代日本洋画において独特な存在感のある画家なのだが研一の系譜を知るとそれも納得出来る。

中村館長に新発見の滞欧作フランス少女像の由来を尋ねた。近年、遠い縁戚の方が亡くなられた父君の遺品を整理していて新たに見つかったそう。早速生家館に寄託されたとのことである。他にも、藤田嗣治（1889～1968）のデッサンや藤田からの書簡など、貴重な品が見つかり全て生家館に到来したそう。そこで、中村研一の縁戚関係について伺った。館長ご自身が作成されたという、大ぶりで綿密に書き込まれた家系図の前で、中村家の由来を説明して下さった。中村家は江戸時代に山口萩藩を脱藩して宗像に定着したそう。本家筋（長男筋）

は、啓二郎（研一の父）、研一と続く。しかし研一に子はおらず、従兄弟（啓二郎の妹、カツの長男）勝が中村家を継ぐことになる。勝の長男が生家館館長の嘉彦氏である。啓二郎には四男四女があり、カツにも六男三女があつて系図はかなり錯綜していたが、中村嘉彦生家館館長は、中村研一、琢二の従兄弟の子だと理解した。啓二郎、カツ兄妹の母トミが、啓二郎が遠地に赴任した為、孫の研一、琢二を宗像の実家に引き取って育てた。肖像画に描かれたトミである。啓二郎は、東京帝大で採鉱冶金を学び住友本社で鉱山技師長を務めたエリートだった。息子4人の名に、研・琢・鍊・摩瑳の金属加工に因む漢字を当てている。

嘉彦館長は研一から自分に代わって中村本家を守れ、と言われ、学校も就職も九州から離れるな、と厳命されたそう。福岡県立宗像高校（私の友人小野氏の同郷同窓の先輩なのだ）から九州大学に進んだ。就職は上場会社福岡支店からスタート。大企業勤務ゆえ地元から離れざるを得ない時期もあったが、50歳過ぎに福岡にポストを得て帰郷を果たし、今は引き継いだ田畑を耕している。中村家と研一、琢二の画業を守り伝えようとする強い思いをひしひしと感じた。

さて、優れた作品

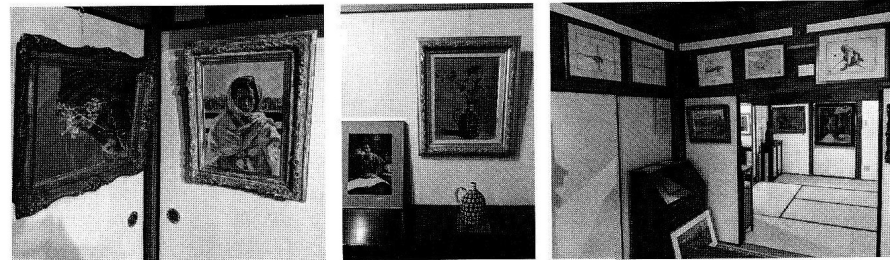
が数あるものもさることながら生家だけに資料類が豊富にあった。それも第1級の資料である。既述した藤田嗣治からの書簡3～4通を見せていただいた。かなり書き込んであり2人の関係が伝わって来た。共に名家の出で親戚に陸海軍高官もいることから美校の先輩後輩の仲以上の心理的な近しさもあったに違いない。今、竹橋の東京国立近代美術館で嗣治、研一の太平洋戦争時の作戦記録画が並んで展示されているのを思い出した。部屋の欄干部分には研一



中村研一宛て、藤田嗣治書状

の戦場デッサンが何枚か掛けられていた。戦後、藤田嗣治が中村研一に「これからは絵を通して日本の復興の力になろう」と語った、と館長が教えて下さった。

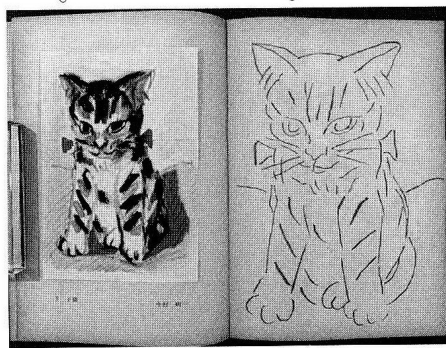
戦中戦後の富子夫人をモデルとした作品は東京小金井の研一夫妻の居宅、アトリエ跡の「小金井市立はけの森美術館」にあるのだろう、見当たらなかった。人物画は秀作「コタバルの娘」1935年作があった。戦前、戦後作を通して瓶花が沢山あった。一方で、駄作？と思う作品もあった。デッサン、形を取る名手との認識だったので意外だった。率直に言って暗めの色だけが並べられていてモチーフや構成が曖昧な絵があったのだが、嘉彦館長も同感と仰る。残された作品の中にはそんな絵も結構あるのだそうだ。



話は転ずるが、他の画家を調べている最中に中村研一に遭遇し、印象に残っている件が二つあるので紹介しておきたい。

一つは森鷗外の次女杏奴のエッセイ（小堀杏奴『追憶から追憶へ』所収）。杏奴が藤島武二（1867～1943）を訪ねて絵の家庭教師を推薦して貰った時、藤島が候補に挙げたのが寺内萬治郎（1890～1964）、中村研一、伊原宇三郎（1894～1976）、小堀四郎（1902～1998）の4人だったそうだ。小堀四郎を選んだ杏奴はやがて彼と結婚した。

もう一つは猫のぬり絵。戦後まもなく子供達のために一線で活躍する画家達が描いたぬり絵の教材である。研一の描く猫は堂々としている。研一は愛猫家で猫が登場する絵もあるが、この教材のように前足を広げて踏ん張る本物の猫はあまりいない。本物は両足をすば



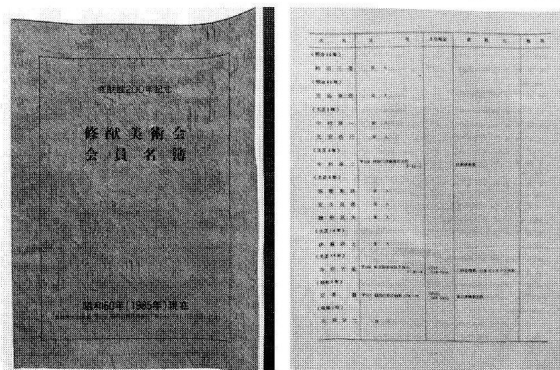
中村研一（暮らしの手帖社「ぬりえ3」昭和26年発行）

めて前から見ると逆三角形である。立派な猫は何故か研一を彷彿とさせて思わず微笑んでしまった。

このように中村研一の絵は威風堂々としている。描き手は横綱相撲を取っているかのような。モチーフや観者に付度なく街いもない。モチーフを描くというよりモチーフの描写を通じて描き手の悠然たる存在を示しているとさえ感じる。安易な感性、情感を拒んでいる。

そんな厳しい面を彷彿させるエピソードもある。研一の出身校、福岡県立修猷館高校出身の方からうかがった話である。

「昭和30年代後半の話。修猷館高校美術部に在籍する研一の直系の後輩にあたる生徒が自分達の美術展に研一の作品を出品して貰いたいと訪ね



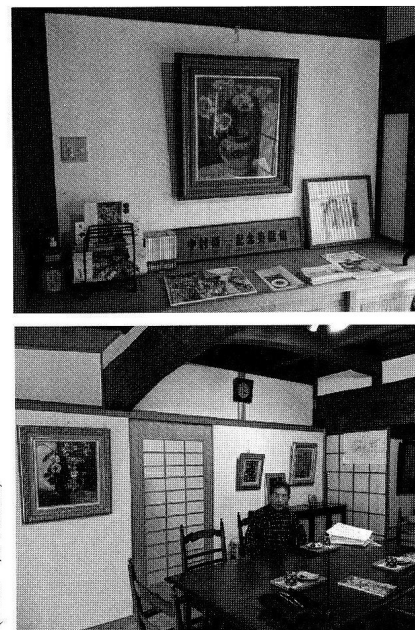
修猷美術会 会員名簿

たところ、研一からはそういう展覧会に出品するとその作品に「目垢がつく」と言って断られた。弟の琢二に頼めば出してくれるはずだ、と言われたので琢二にお願いしたら喜んで出品してくれた。」研一、琢二兄弟の考え方、姿勢の違いがその作品の持つ印象通りで「さもありなん」と合点したものだ。

後日、嘉彦館長に出した礼状にご返事をいただいた。6月の下旬である。要旨を記してみる。

「田植えが終わったが、40年以上続いている奈良漬のシーズンに入り、田植えと並行して材料の久留米白瓜の収穫もピークだった。1回で150kgの瓜を収穫し、種とり、塩漬け、天日干し、粕漬けと一人でやっている。昨日でやっと一段落ついた。」とのこと。都会育ちの私には具体的な作業のイメージは全くわからないがかなりの重労働をこなされているのはわかる。旧家の維持管理と、絵画作品の保存継承と、田畑山林の手入れと、これらは皆、本家筋中村研一から託された責務で、誠意と熱意を以ってさばいている中村嘉彦館長に敬意を表したく思う。手紙には「来月は藤田嗣治作品の件で上京する」そうだ。体調に充分留意され、いつまでもお元気で頑張ってください。

実は、かねてより何とか入手したいと切望している中村研一作品がある。滞欧作である。かつてその作品を扱った方に斡旋を頼んでいる。思いが叶い手元にやって来たあかつきには「こぼれ話 中村研一 その2」として書きたい。本篇がその序章になることを密かに願っている。



(2025年8月)

終戦工作に動かなかった重臣たち(4)

村上 邦治

第二章 1944年12月米内光政

1 小磯・米内連立内閣成立

戦前の海軍出身総理大臣は8代山本権兵衛(在13・2・14・4 23・9・24・1計1年6か月) 12代加藤友三郎(在22・6・23・81年2か月) 19代斎藤美(在32・5・34・72年2か月米国留学) 20代岡田啓介(在34・7・36・31年8か月) 26代米内光政(40・1・40・76か月露・独駐在) 29代鈴木貫太郎(45・4・45・84か月独駐在)の6名である。

陸軍出身の総理大臣と比較して在任期間が長く、総じて評価が高い。平時においては訪問行事や寄港など海軍将校は諸外国と接触があり、英会話は無論の事その国の歴史や政治情勢などを熟知する必要があった。また将校の多くは、米・英・独・露への留学や大使館武官として

滞在し生活経験をするとともに、国民性や宗教・文化などにまで深く掘り下げ調査した。複雑な民族間の紛争や内在する諸問題までも研究を重ねた。海軍特有の国際性が第1次世界大戦以降の国際協調時代に重宝された。

政治基盤である海軍を統率した6名の首相経験者は何れも海軍伝統の和平志向の英米派(条約派)である。昭和天皇や長く元老を務めた西園寺公望と同じ路線である。作家阿川弘之は『米内光政』の中で、最後の海軍大将井上成美(小磯・鈴木内閣米内海軍大臣時海軍次官)が歴代77名の海軍大将を3段階で評価していたことを紹介している。最高位の1等大将は山本権兵衛・加藤友三郎・米内光政のみとし、かろうじて東郷平八郎と山本五十六は2等大将、残る72名は大将としては落第の3等とする。

山本・加藤に並ぶ1等大将米内光政の終戦前から1年

間を検証してみると、井上の評価に疑問が残る同意できない言動がある。歴史家からも評価の高い米内光政という海軍軍人の再評価を試みたい。

44年7月日米開戦以来2年9か月続いた東條英機内閣が総辞職した後、次期総理大臣候補を奏薦する重臣会議が開催された。出席者は近衛文麿、岡田啓介、若槻礼次郎、平沼騏一郎、阿部信行、広田弘毅、米内光政の元首相経験者と枢密院議長原嘉道（在1940—44）及び木戸内大臣の9名である。会議では次の首相に陸軍から第1候補寺内寿一（陸士11期元帥南方派遣軍総司令官）第2候補小磯国昭（12期予備役大将朝鮮総督）第3候補畑俊六（12期元帥支那派遣軍総司令官）を選んだ。

最後の元老となる西園寺公望（1849—1940）が高齢により40年1月の米内光政首相奏上を最後に引退、重臣会議は元老に代わり天皇に後継総理大臣を奏薦する役割を担うための会議とされた。41年10月近衛（第3次）内閣総辞職の時には日米開戦回避という目的のために、木戸幸一内大臣が会議を主導して敢えて主戦論者の東條英機陸相を推し東條内閣が誕生した。

今回推薦する次期首相は戦時下の極めて厳しい戦局の中、「戦争を継続する」のかそれとも「和平交渉を始める」のかという微妙な時期の人選であった。宮中・重臣・一

とを強調し固辞、鈴木副議長については原議長から「鈴木は絶対に受けない」との発言があり海軍の二人は候補から外せざるを得なかった。

結局木戸内府より「何百万の大兵を大陸その他に動かしているのだから、その始末だけでも大変だ。やはり陸軍が良い」と発言、紆余曲折する会議をリードしたことから陸軍に絞られ、3人の候補を選出したのである。

重臣会議の議論を詳細にみると、陸軍出身の首相に何を期待するのかが不明確のままの人選であり、これが小磯連立内閣の目的を曖昧にしてしまうという致命的な問題を抱えたままの発足となる。

東條首相から「寺内と畑は最前線の総指揮官であり、交代させることは難しい」との反対があり、第2候補であった小磯国昭朝鮮総督が残り、急遽京城から呼び戻された。

小磯を推したのは米内と平沼である。一人は首相の時拓務相として入閣させ閣僚として使っており、その手腕を身近にみていたからであった。阿部（9期）から「手腕は確かに寺内、畑以上だ」との発言があり、皆が賛同しようやく決まった。

しかし小磯国昭朝鮮総督は米内内閣拓務相辞任後42年から2年以上本土を離れており、東京の政局や太平洋

部の政治家・高級官僚・陸海軍幹部らは表向きは戦争継続で一致していた。しかし口には出さないが内心ではもはやこの戦争の勝ち目はなく、和平に向かうべきとの思いを持つ者が次第に増えていた。

重臣たちは国家の最大危機に直面しながら、次期内閣の目的・課題を明確にしないまま、次期首相候補を決めるといふ人選を行った。もつとも重臣たちに戦局の情報が特別に提供されることもなく、出身母体や人脈からの情報に頼ることになる。従って戦局の状況については正確に把握できていたとはいえず、出席者の現状認識も統一されたものではなかった。

そのため「非常重大なときだから殿下を煩わす宮様内閣を」（広田）「重臣全部に大命の降下を願ひ、その中から互選してはどうか」（原）「陛下の思召しがよくわかる木戸内府が出たら良い」（岡田）など、候補者を絞り切れない有様であった。

会議が進むにつれ、「今日の政治は一切軍と関連しないものはない」との近衛の発言から、候補者として米内光政（阿部）鈴木貫太郎枢密院副議長（近衛）、陸軍の元陸相宇垣一成（1期）（若槻）や梅津美治郎（15期）が挙がる。

戦場は海軍が主体ということで、次第に議論は米内光政と鈴木貫太郎に絞られた。出席している米内は「軍人が政治家まして首相になることに反対を信条とする」こ

から東アジアにわたる戦況など周知しておらず不安であった。会議の後近衛は「小磯一人に国家興亡の運命を託す」ことに国民が不安に感じることを懸念し、「国民の米内大将对する信望は小磯大將より大なる」とことと「海軍における信望はまったく圧倒的」なことから、「隈板内閣」（1898・6—11 最初の憲政党を基盤とする第一次大隈内閣 首相進歩党系大隈重信 内相自由党系板垣退助）を連想して「小磯・米内連立内閣」を思いつく。この辺りの発想は軍部出身者や官僚にはない、日本の政治や国民性を知る政治家近衛文麿しか思い至らないものであった。

こうして天皇より「兩人協力して組閣せよ」との大命があり、小磯国昭首相副首相米内光政海軍大臣の連立内閣が誕生した。米内はすでに予備役であったため、現役武官制の海軍大臣就任はできないが、厳しい戦局時という特例として現役復帰を許された。

2 人物像

戦局の急速な悪化に直面した小磯内閣の副首相として入閣した米内光政は、天皇を始め宮中や海軍内から信任の篤い人物であった。

光政は1880（明治13）年戸長（市長の前身）であった一家の長男として盛岡市で生まれた。父は政界に進出を試み、また一時生糸の売買に乗り出した発明に

熱中したが何れも失敗、大きな借財を残したため貧困家庭で育った。近くの尋常小学校及び高等小学校を出て、93年盛岡中学に入学、98年同卒業、同年海軍軍人を目指し海軍兵学校に受験入学した。

ちなみに岩手県からは多くの軍人を輩出している。明治維新の時南部藩は奥羽越列藩同盟に加わり、経済的に不遇をかかったことや教育熱心な風土からといわれる。南部藩の貧乏藩士を父に持つ東條英機の父英教は生活苦から逃れるため一念発起し、東京に出て苦学しながら陸軍大学校第1期首席卒業を果たし中將になっている。息子の英機は盛岡生まれではないが、本籍地が父と同一であり盛岡市出身として取り扱われている。5・15事件で倒れた大養内閣の後に挙国一致内閣を組閣した斎藤実(1858—1936海軍大将2・26事件で殺害)は水沢藩(現奥州市)出身である。

中でも県内最高学府であった盛岡中学からはとり立て多くの軍人を統出している。よく例に出されるのは三国同盟是非の激論を闘わせ米内海軍大臣と対立した陸軍大臣板垣征四郎は5級下、米内内閣の存立をかけて反対した同盟条約をあつさり認めた及川古志郎海軍大臣は2級下の後輩である。

明治34年12月海軍兵学校29期125名が卒業、ハンモックナンバーは68番で真ん中である。同期で大將まで昇進したのは高橋三吉(卒業席次5番)及び藤田

連出張や欧州視察に派遣されている。佐官時代の米内は欧州諸国中でもソ連や独国の専門家として養成されていると思われる。

兵学校学生時代や若かりし海軍士官時代の人物評については、阿川弘之『米内光政』が詳しい。東京帝大卒業後海軍予備学生となり大尉で復員した経歴を持つ阿川は、『山本五十六』『井上成美』など多くの海軍関係の作品を残している。『米内光政』は1977年から2年間週刊誌に連載された後出版された。当時はまだ米内を取り巻く先輩同僚、そして艦隊時代の部下や陸上勤務の時に身近に接した秘書官や副官さらに単身赴任のお手伝いや料理屋女将・馴染みの芸者などはまだ生存していた。自ら直接取材し克明に聞き取り詳細な調査をして、米内光政という人物像に迫った大変な労作である。

その中で、

「東北人らしく無口で不愛想」

「まるつきりつかみどころがない」

「大変なめんどくさがり屋やの横着者」

「自分でも出世する気のなさそう」

「暑くても寒くてもなんとも言わない。頑固なのか我慢強いのかそれとも鈍いのか」

など紹介されている。

兵学校から大学校及び尉官時代の若い時は、成績は中

尚徳(同15番終戦時侍従長)と、1年遅れで昇進した米内の3人である。

1904年日露戦争には中尉で駆逐艦に乗船しウラジオストクへ逃げようとするロシア巡洋艦を僚艦3隻と共に追撃自爆させている。後にこの功績により勲章と年金3百円を賜う。7年大尉に昇進、戦艦・巡洋艦の分隊長や砲術長を務めた。

その後海軍砲術練習所学生となり、卒業後大尉となる。2年後練習所の教官に補され、1年8か月の間3期後輩の山本五十六(32期)と同部屋で生活を共にしお互いの思想や思索さらに性格までも良く知る間柄になる。

1912年少佐に昇進、幹部候補生を育成する海軍大学校甲種に合格、14年第12期(16名)として卒業する。同期で大將までなったのは米内と加藤隆義(呉鎮守府長官)長谷川清(台湾総督)の3名である。

第1次世界大戦が始まった14年大学校でも中位で卒業したようで、上位卒業者が赴任する英・仏・米ではなく人気のない露国の日本大使館付武官補佐官で派遣された2年間滞在した。赴任中中佐に昇進している。滞在中首都ペトログラードで労働者のデモをきっかけに2月革命が起こり国王ニコライ2世が退位、1480年から続いたロマノフ王朝がデモやストライキにより崩壊していく模様を身近に経験した。その後も2度軍事視察のためソ

位、行動もてきぱきせずあまり目立たない人物で同僚からは「クズ政」のあだ名がついた。同期の高橋三吉や藤田尚徳らの常に光の当たるポストではなく、田舎回りの下積みの時代を過ごしている。

20年中佐時代にはまたも欧州へ出張、ロシア革命の進行状況や敗戦国ドイツの状況を視察報告している。

その年の12月大佐になり初めて1等海防艦「春日」の艦長になる。ただこの艦艇は実際は練習船であった。23年ようやく装甲巡洋艦「磐手」の艦長を務め、少尉候補生らのオーストラリア遠洋航海を指揮した。そのあと晴れて戦艦「扶桑」(15年竣工34700トン全長212メートル沖海戦で沈没)の艦長になる。

佐官時代の米内について、

「茫洋として何も言わないので、こちらの方がしつかりやらないといかんと思わせる(ロシア駐在時)」

「スタンドブレイが嫌いで無口で茫洋としているから、深く付き合わないとなんだかよくわからない」

「何かがちよつと違っていた」

「報告しても返事は『そうか、うん』だけですが、それでいて親しみやすい。上にも下にもおべっかを使いません。尊敬というのとは少し違うのです。なんというか望ましい一つの海軍士官像として皆が評価していました」

など、上司としては使いにくい部下であったが、同僚

や艦長になってからは米内に対する見方はすこしつつ変化する。部下に信頼を置き仕事を任せ、本人の能力が発揮できるように無言の指導をするといういわば「頼れる上司」とみられるようになってくる。難関を突破した兵学校卒業生や幹部候補生の大学校卒業生からは、「理想の上司」として見られるようになった。

24年に戦艦「陸奥」(3万9千吨全長225呎速力25ノット40センチ主砲8門21年竣工)の艦長に任命された。当時「長門」と共に日本が誇る海軍最大最強の新鋭戦艦であった。上司からは凡庸な人物とみられこれまで無名に近い大佐から、一躍これからの昇進が約束されるポストに初めて就き、海軍内に「米内あり」と知れ渡る。

漸く大器晩成型米内光政が上層部に認められたこの人事は、当時の人事局長山梨勝之進少将が元老松方正義の葬儀の時海軍儀仗隊の指揮をする偉大夫な米内を見て「堂々たる体軀、端正な風貌、太い号令、嫌味のない挙手」をする人物がこれから何となく海軍を背負うことになる」と予感したことから、と阿川は山梨説をとる。

身長180センチ中肉中背、芸者や女将の方から惚れられたという顔立ち、「グズ政」を返上する堂々たる指揮ぶりに山梨人事局長がこれまで良く知らなかった米内を初めて意識したのであろう。しかし無論外見だけで拔

表する将校が就任しており、海軍大臣や軍令部総長など海軍トップの座に着く人材を配置する要職の一つであった。

2年間軍令部の班長(部長)という要職を務め、28年第1遣外艦隊司令官に補された。前身は遣支艦隊と称し中国中南方面の警備を担当した。拠点は上海である。半年前関東軍の謀略による張作霖爆死事件が起き、蒋介石率いる国民革命軍が北伐に向かった時で、上海・南京・漢口の間の長江(揚子江)の警備が主要任務であった。当地には多くの日本人が生活しており、在留邦人の安全確保と保護にあたった。司令長官の米内は「部下を全幅信頼し、細かいことやつまらないことで文句を言わず、部下に任せるべきことは一任した」ので、艦隊の艦長には評判が良い司令長官であった。

参考文献は最後に記します。

(つづく)

擢するはずはなく、上司や同僚の評価を聞いたうえで、異例ともいえる抜擢人事であったことには間違いない。後で海軍大臣になったところ「金魚大臣(見かけだけで使い物にならない)」のあだ名をつけられたが、誰が見ても外見は堂々たる海軍大佐であった。

陸奥艦長になった翌月連合艦隊司令長官兼第1艦隊司令長官に海軍次官であった岡田啓介大將(15期)が着任する。そして連合艦隊旗艦が「長門」から「陸奥」に代わるという幸運が重なる。岡田連合艦隊司令長官、米内連合艦隊旗艦「陸奥」艦長の関係は1年間続き、二人は緊密な人間関係を作り上げる。20年後二人は重大な局面で、日本の針路を動かしていくことになる。

「陸奥」艦長を1年勤め25年末少将に昇任する。同期の高橋や藤田からは1年遅れたが、戦艦「陸奥」艦長に指名された時から約束された進級であった。同時に第2艦隊(司令長官谷口尚真)参謀長に任命され、旗艦「山城」に着任する。

1年勤め愈々初めての海軍中枢部に入る。海軍の作戦を統括する軍令部の第3班長(33年軍令部第3部長改称)に任命される。1班国防方針・編成2班出師準備軍備3班は情報計画・戦史第4班通信・暗号である。米内(29期)の3代前野村吉三郎(26期)2代前永野修身(28期)2代後が嶋田繁太郎(32期)と各期を代

社 告 (内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の(ひろば)として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

*同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座 〇〇二七〇〇一六四五九二
加入者名 ま ん じ

デイス・オールド・ハート・オブ・マイン (傷つきし我が心のこと) 完結編

岩上和道

十一 百日紅さるすべり

ジョー・ポージーでの時間は意外に早く過ぎて行つた。不穏な空気に支配されたときもあったが、次第に話は妙に盛り上がり、場は和んできた。料理が一皿一皿とても美味しかったので、それも皆を楽しくさせた要因かもしれない。いよいよセコンドピアットの鶉うすらだなど、朔朗は待ち構えた。すかさず、クラーク健太が現れ、ちよつとした台車のようなものに、鶉らしきものが登場した。すぐく簡単に言えば、手のひらに載るくらい小ぶりの鶏の丸焼きを二つに切り分けて、美しく盛り付けたようなものだ。中には詰め物がぎつしりと入っているように見える。その周りを、茶色いソースと、ラディッシュとイタリアンパセリが添えられている。

「さらに、先ほど取り出した内臓を、ベーコンなどと炒め、別にエシャロットや、玉ねぎを炒めてこれらを合わせて詰め物を作ります。それを細かく刻んで、袋状になつたボディに詰め込み、糸で各所を縛ります、などと話すとなかなか怖いですね」とクラークはひひひという声を出したように思えた。

朔朗は改めて人間ほど残酷な生き物はいないなあと思う。しかし、こうして出て来た一品の料理を見ると、実に美しい。残酷と美とはやはり近いものだと思わざるをえない。芥川龍之介の作品になにかそんなようなのがあつたかなあと思つた。

「ともかく折角の柴門の傑作らしいから、食べましょう!」と倫子みちこが元氣よく言つた。

「本当ね、美味しそうだわ」と凛々子が追隨する。

確か、鶉なんぞは食べたものではないと三千三氏は言つていたが、あれはある種の韜晦なのか、逆張りというか、わざと思ふことの逆を言っているのか? または、本当に不味かつたのか? さっぱりわからないと朔朗は考えた。まずは食べてみるのだな。皆が鶉を食べだして、皆がとても美味しいと思つたらしく、しばらくは噛み砕

「うむ、なかなかうまそうじゃあないか」と三千三氏が言う。

「あら、これがうずらちゃんですね。可哀そうだけれど、美味しそうね」と凛々子は食欲が勝つてゐるらしく舌なめずりしている。

「これは鶉を丸ごと料理しますが、なかなか下ごしらえが大変でして、柴門シェフが手塩にかけたと申しますが、手が込んでおります。羽をむしり、皮をきれいに整えて、残つた毛なども焼いて取り除きます。そして、裏返して内臓を取り出し、全身の骨をそうつと外していき、肉と皮を残して、また裏返すというあたりが、なかなか手がかかります。もつとも、そこらあたりはお客様に見ていただくものではありませんが、ほ、ほ」とクラーク健太が微妙な笑いをみせる。

く音や、嚙下する音だけが響く。こりやあ美味いよと朔朗は凛々子に言う。凛々子も本当ね、やっぱり柴門君は凄いいじゃない、と笑顔で応える。三千三氏も、倫子も満足そうだ。変な具合だが、これはこれで良かった。大団円だなあと朔朗は少しほつとした。

さて、デザートのとで、三千三氏は皆を見渡して、話し出した。

「杉浦日向子さんという江戸研究家の漫画家であり、作家の方がいましたが、朔朗さんはご存じですか?」

「ええ、知ってますが、あまり作品は読んだことがないです。若くして亡くなれたと記憶しますが?」と朔朗は応じた。

「そうです、彼女は二〇〇五年に四十六歳で亡くなつた。まことに残念だった」と三千三氏は感慨深げにうつむく。

「私は彼女のファンだったので、特に葛飾北斎とその娘を描いた、『百日紅』という漫画が好きでした」と三千三氏は妙にしおらしく言う。

「あら、私、結構江戸趣味で杉浦さんの作品読みました」と突然凛々子がしゃべりだす。

「ほう、凛々子さん、あなたも彼女のファンですな。何がお好きですか?」

「ええ、私ももちろん、百日紅は好きでした。特に『鬼』っていうのがお気に入りでしたわ」と凜々子は珍しくこれも文学少女かと思うばかりに言う。

「おお、『鬼』もいいなあ。あなた話が分かるね。僕と付き合っても良いかもなあ」と三千三氏はにやっと笑った。

「あら、先生、やだあ、倫子が怒りますわよ」と凜々子はまんざらでもないようだ。熟女だかなんだか、褒められると豚も木に登るってやつだなと朔朗は思う。倫子は別に、っていう顔だ。

「私はね、『女弟子』ってのが好きなんですよ」三千三氏は嬉しそうに続ける。

「これはね、すっぱんの話さね。葛飾北斎には女の弟子もいるわけさ。この女は北明、あるいは井上政って名前だよ。色っぽいなの。でさ、話は連作なんで続いているんだけど、北斎が將軍様にお目見えしたエピソードの次にこの話がある。北斎と北明が二人ですっぱんを食べるわけだ」

「三千三先生、お話がおじょうずね」と凜々子が囁す。

「雪がしんと降り江戸の町。魚屋の若い衆が、北明のうちにすっぱんを届けに来る。北明が受取り、早速にさばくわけだ。魚屋の若衆が手伝う。すっぱんの尻尾を持って、つかみ上げる。こうすりゃ噛まれねえと。裏返しにして、首に包丁を突きつけ、そのまま首をすばっと

倫子、お前もまだ子供だな。姐さんともなるとき、喰わなくっても、すっぱんのエロさは充分わかるってのよ」と三千三氏は怪気炎。

「ま、いいけど」

「でさ、二人は云いあう。まるで鬼のようとかなか。盃の表面には赤ん坊の首をつかんだ鬼の顔が映るわけさ」

「二人とも鬼になったって寸法ですね？」と朔朗が割り込む。

「そうねえ、二人ともすっぱんのお化けにでもなったってとこかねえ」と三千三先生も一息つく。「それから、北斎と北明の濡れ場だよ」

「ねえ、あなた、北斎って何歳くらいなの？じいさんでしょ？女なんか抱けるのかしら？」と倫子がこれも唐突に言った。

「それはだな、こういう心理状態だ。つまり、魚屋の若いもんが、北明のことを舐めるように見入っていた。こいつこの女に惚れたなと北斎は読んだ。北斎は変態だから、自分の女が他の男に抱かれるところを見たいわけだ」と三千三は言い放つ。「そうすると、勃起となるんだ。ちよっとゴールデンカムイ入ってるけどな」

「やだ、先生、やっぱり同類のことはよくわかるのねえ」と凜々子がまた煽る。

やる。もったいねえと魚屋は、姐さん鉢、鉢と叫んですっぱんの血をそこに流し落とす」

「あら、先生、杉浦さんの漫画を見てみたいよ」と凜々子はうつとりする。女は怖いと朔朗は思う。

「この生血を、酒にまぜてお飲みなせえ、精がつかます、なんてね魚屋は言うわけさ。そもそも、すっぱんなんてさ、なんかエロだと思わない？」と三千三は凜々子に向かって流し目のような目つきで問いかける。「あら、先生、私もそう思います。男女がすっぱん二人で食べるなんてねえ」

「だよ、ね、だよ。わかっているじゃあないの凜々子ちゃんってば」と先生。

倫子が「で、その先、早く話してよ！」と先をせかす。「ふむ、でさ、北明はこうつぶやく。まだ生きてるねえ、首無しで歩いてるって。ほほほ。魚屋の若いのは、その北明をじつと舐めるように見ているわけさ」

「そして、魚屋は帰り、北斎と北明はふたりですっぱん鍋をつつくわけだ。うまいはずよ、肉を喰うのじゃない、生命を喰うのだ、なんて北斎はいうわけだ」と三千三氏は舌なめずりする。

「ねえ、あなた、杉浦日向子さんは、すっぱんなんか食べたことなかったんだってよ」といきなり倫子が言った。「むう、そこが杉浦日向子のすごいところだってえの。」

「凜々子ちゃん、わかっているねえ。そしてさ、二人は抱き合うのだけど、やったかどうかはよくわからん」

「この話、全部しゃべっちゃうとつまらんから、ここでやめとく。凜々子ちゃんは知ってるよ、ね、結末？」と三千三は急に凜々子に振る。

凜々子は、笑いながら、「なんとなく覚えてるけど、私も言わないでおくわ」なんておしとやか風に言う。倫子は知っているらしいと朔朗は思う。知らないのは僕だけかい、と思ったが、まあいいや。

「で、朔朗さん、あなたには言っておくけど、この話の結末と、その次の一篇はさつき凜々子さんが言ったように『鬼』というのだけど、これは繋がっているんだ、間違いない。あなた『鬼滅の刃』知ってるでしょう？」

「ええ、もちろん」

「あの鬼だつて、みんな元々は人間で、様々な不幸を背負って鬼になったわけだ。それと同じで人間の心には鬼が住んでいるんだよ。その鬼がたまに出てくるんだろ？ねえ」と三千三氏は朔朗に向かってつぶやく。「芥川龍之介の世界も似ていると私は思っている」とも聞こえたような気がする。

「それはそれとして、今日は楽しかった。もう少しだけ

付き合ってもらっていいかなあ？」と三千三氏は朔朗に言う。「はあ、もちろんですが、二人でということですか？」と朔朗は聞く。「ああ、うちに帰って男二人で密談したい」と言っているに笑う。「あら、あなた朔朗さんが気に入ったわけね。どうぞ、私は凛々子と二人で密談するから、おあいこよね」と倫子は言って、凛々子の腕をとってクルマに向かった。朔朗はそのシートヘアの横顔にぞくつとする。

十二 瘋癲老人の告白

四人は三千三氏の家に戻る。予定通り、代行で男が運転手としてやって来た。ジャバワツキー邸へ向かう。着くと、早速、三千三氏は朔朗を自室なのか地下室に連れて行く。倫子は、凛々子を先ほどのリビングに連れて行った。

「いやいやお楽になさってください」と三千三氏は朔朗をソファに掛けるように手招きした。朔朗は言われた椅子に座った。椅子は、どこかで見たような、北欧風のデザインできつと高価なものだろうと思う。ちらっと部屋を見回すと、オーディオがある。朔朗はオーディオファイルというほどには詳しくないが、このスピーカーは黒のトールボーイだが、カーボンフェイバー風の質感だから、

レコード棚があるのを見て、そこに件のザ・ボーグスの「もし私が神の恩寵から堕ちるときは」というアルバムが置いてあるのを見たので、三千三氏は実はザ・ボーグスのファンなんだろうと内心思った。変なおやじだ、全部逆に行くんだなあ。こういうのを天邪鬼というんだらう。

「朔朗さん、あなたもオーディオ好きらしいが、こんなものはクズですぞ」といきなり三千三氏。「私は、友人のオーディオ好きの言うとおりに買い替えたんだが、まったく面白くない」と憤然たる顔だ。

「あ、いや、これだけのシステムでクズってことはないでしょう。きつと、素晴らしい音だと思いますよ、これは」と朔朗はお世辞を言った。

「いや、君ねえ、全くわかっておらんようだ。私は、最近ローファイが好きなんだよね」

「はあ、あの、その、ローファイってことは、Low-Fidelityだから、チープな音ですね」と朔朗。

「そうねえ、チープっていうとなんか淋しいなあ。高音質じゃあないってこと、まあ、昔のカセット・テープとか、ソノシート音みたいなのが好きなんだよ、最近特にね。肋骨レコードなんか最高だろうなあ。ソ連製のあれでビーチボーイズを聴いてみたいもんだ。高音質なのは、要はプチブル連中が喜ぶ音さね。このシステム

ら、MAGICO M3あたりだろうと思った。真っ黒けだなあ。こんなのを鳴らすアンプは何だろうと思うが、アンプはD. Agostino Momentumとロゴが入ってモノラルのパワーアンプが二本並び、リアアンプも、フォノイコライザーも同じD. Agostino Momentum製のものらしい。ホーツ、ではターンテーブルは何かなど見ると、どうやらLINN KLIMAX LP12らしい。ま、お金持ちはこんな感じなんだと思うが、別に羨ましくもない。金に飽かせばなんでも揃うが、自分の好みはまた別だ。安いものでも自分にはじっくりくる場合もあるさ、と自分を慰める。一応お世辞でも言おうかと思っていると、三千三氏が先に話し始める。

三千三氏が、サイドテーブルからウイスキーを出してきた。The Poguesとある。

「あ、これはボーグスが出しているアイリッシュ・ウイスキーですね。初めて本物を見た。この間、シェイン・マガウアンが亡くなりましたね。『ニューヨークのおとぎ話』でしたっけ、大好きです」と思わず朔朗は言った。

「よくは知らんが、友人が先日くれたものです。シングル・モルトで美味しいのかどうか私はわからんが、なんか、酒に溺れる愛蘭土の香りがするような気がして、たまに飲んです」と三千三氏。先ほど、朔朗はちらっと

を聴いてみて、私は幻滅した。なので、せめてもの抵抗で、カートリッジはごく普通のデノンのDM103MCに取り換えたんだ」と三千三氏はのたまう。

「こだわりですね、凄いです」と仕方なく朔朗はご追従を述べる。

「うん、こだわりだよ。これが難しいところでさ、MMCのカートリッジの方が再生はアバウトじゃあないか。だけど、わりとぶつとい音がしてロックなんか聴くとかえって良い音になる。MMCのカートリッジは正確に再生するから、か細い音が出て、ローファイ感が出るのよ」と三千三、悦に入る。朔朗はオーディオなんかに見入った自分を攻めた。俺はアホだと。このおっさんはいつも逆に行くんだ。それを忘れていた……。

「ブレイク・ミルズとか、あるいはスライの暴動とか聴いてみたらどうですか？」などと言ってみたが、三千三氏は別段の反応はなかった。

「まあ、音楽のことはどうでも良いんです」と突然三千三は低姿勢になる。

「あそこまで話しかかったので、あの子のことも聞いて欲しいのです」と三千三は言い出す。

「あの後とは、どのあたりの話でしたっけ？」と朔朗は

考えるが、あまりに話は荒唐無稽でなんのことだったか
思い出せない。

「あれだ、谷崎の話をしかかったでしょう。『瘋癲老人
日記』のことです」と先生。

「あの卯木督助氏の話です。私は彼に憧れていた。あんな
瘋癲老人になれたらこの世の春、至福の人生だろうと
ね」と三千三氏は天井をうつとりと眺めた。その視線の
先には何かこの世のものとは思えない天女なのか、菩薩
なのか、あるいは天使なのか、そんなものが見えるのか
と朔朗は思い、天井を見上げた。そこにはただグレイの
古ぼけた天井が見えただけだった。

「先ほど言ったように、私の父は青川という家に跡継
ぎとして養子に入った。そこは、古くからある茨城の造
り酒屋、青川酒造ですが、父はそれをまずは手堅く経営
していました。ちなみに、あなたが先ほど飲んでいた、
『菊盛なんじやら』というお酒も青川のもんですが、今
は青川という名前でもあり Blue River というブランド
でちょっと洒落たワインのような外観の純米吟醸酒を
造っていますね。発泡タイプのもあります」と三千三氏。
「ああ、ブルー・リバーなら知ってます。ジョニ・ミッ
チエルみたいだな。素敵なラベルのお酒ですよ。そう
かあ、あれも青川のなんだ。フランスでも人気らしいで
すね」と朔朗も相槌を打つ。

は溜息をつく。

「でね、最後はなんていうか畜生道にまで落ちたわけ
さ。ストリートに話せば、今日のシェフの柴門は私の息
子だ」

「ううん、なんかそんな気がしました。父が息子を見る
ような眼だと僕は思いました」と朔朗は冷静に言った。

「そうかね、あなたには怪ごられたように思ったよ」
三千三氏は静かに朔朗を見る。

「あいつは、生まれた時から身体が弱くて、何をやらせ
ても人より劣るような子だった。学問も出来ない。本人
は、歌手になりたいとか、役者がやりたいとかあったよ
うだが。私は、まあ、最初はジャーニーズ事務所にでも入
れるかとも思ったのだけど、もっと厳しい試練を与えて
みようと思い、あれにスポーツ、それも陸上競技をやら
せてみたんだ。短距離をね」

「ほう、それは思い切ったことをしましたね」と朔朗は
少し意外に思ったが、どのみちこの男は何も真実を語ら
ないのだから、まあ与太話として聞いていようと思った。

「うむ、でも、思った通りに失敗した。柴門はああ見
えても、足は速かったんだが、高校時代に百メートルを
十一秒台で走ったのは良かったが、すぐに膝を傷めて医
師からもう陸上は無理だと言われた。本人はかえって嬉
しかったようだけどね。それから、私の血なのか、遊び
まわるようになり、大学には行ったのだが、中退して、

「私は次男で、兄が青川酒造を継ぎました。つまり、私
が建築家を目指しても、なんの問題もなかったわけです
な。私の最初の妻は東大出の私のようなものにはよくあ
るパターンだと思いますが、東京の有名女子大出身の女
性で、結婚は、見合いです。親が決めたようなもので
した。結婚した時、彼女はある企業の役員秘書をしてい
た。結婚生活はごく普通で、すぐに子供が二人出来た。
一姫二太郎です。しかし、私自身は建築家としての評価
が高まり、独立して収入も増えだすと、なんかこういう
平凡な生活に飽き足らず、銀座でクラブ通いを始め、さ
らには海外旅行の機会があれば、ニューヨーク、欧州、
その他の国々に出張するたびに女を漁り、もちろん、東
京でも銀座にとどまらず、六本木やら、なんやらで遊び
まくりましたな。まあ、野に放たれた狼というか、単な
るエロ猿なかわからんですが、まあ、放蕩の限りを尽
くしました。妻は元々、親が選んだ結婚相手だし、私が
何をしようが興味もなかったと思います」

朔朗はうなずいたが、特にコメントはしなかった。
「まあ、女だけでなく、クスリだの、酒だの、クルマだ
の、今考えれば、どうしてあんなことをしたのかわから
んがね。セックス、ドラッグス&ロックンロールみたい
なものだね。ヴェリー・グッド・インディードだ。いやあ、
ロックンロールは、クルマと通じるからねえ」と三千三

あちこちで問題を起こしたりして、仕方なく、兄の青川
酒造に入れてもらった。しかし、遊び癖が治らず、しま
いに銀座のホステスと逐電した」と三千三は頬を膨らま
す。

「まあ、若気の至りでしょ。今は立派なシェフじゃあな
いですか」と朔朗は受け流す。

「うん、まあそうも言えるね。それは良いのだが、その
銀座のホステスだった女がね、今の倫子なんだよねえ」

「え、いや倫子さんは、三千三先生の奥様ですよ。え？」
とさすがに朔朗も眼を丸くする。

「そうだよ、倫子は、一応今は私のパートナーだ。正
式には籍はいれていないがね」と三千三は意に介さない。
「そこが人生の不思議だね」と他人事だ。

「いや、あの、柴門さんはご長男でいらっしゃる。柴門
さんが銀座で出会った女性と仲良くなり、付き合って駆
け落ちした。と、そこまでは合ってますか？」

「うん、その通り」

「で、今一緒にいる倫子さんは、その柴門さんの愛人とい
うか、パートナーの女性であると」

「正しいよ」

「でも、今、今は三千三先生の奥様であると」

「だねえ」

「やや混乱しますが、では倫子さんは、元々柴門さんの

ガールフレンドで、それを三千三先生が受け継いだということですかね？」

「おおよそはそうだが、倫子を私のものにするにはかなり時間を要した。というのも、元々の妻がいたし、柴門も倫子を好いていたしね」と三千三氏は囁くような言い方だ。

「まあ、ここで谷崎の話をしよう。『瘋癲老人日記』は僕の理想の愛読書でねえ。性的不能の老人卯木督助がまず素晴らしい。彼は婆さんと呼ぶ老妻がいる。そして、長男の嫁、颯子。督助は颯子が夫のお気に入りのおかげで、彼女の足に魅せられている。長男浄吉はそのことも知っていて、督助の好きにさせている。あとは、長女と次女がいるが、まあ、なぜか、あまり督助からは可愛がられていない。そして住み込み看護婦（今なら看護士）の佐々木がいる。それに颯子のボーイフレンドの春久かな」

「僕もある程度は覚えてます」と朔朗。

「そうかね、で、君はこの督助のことはどう思いますか？」と先生。

「いや、僕などが何かコメント出来るような人じゃあなと思います。でも、ともかく、長男の嫁に懸想するところから個人的にはありえないですね。さらにその足にフェティッシュな性欲を覚えるあたりが、僕にはまだ無理です。ただ、不思議なのですが、卯木督助氏は、性

別になんとも言わなかった」

「はあ、で、柴門さんは問題なしとしても、倫子さんはどうやって口説き落としましたのですか？」

「ああ、それは簡単だよ、私は督助のようにある時は甘えて見せたり、怒って話もしなかったり、時には血圧が高いと倒れたり、まあ、手練手管でいろいろ気を惹いてみたわけだ。それに、倫子と私は共通の趣味がある。食べることだ。食痴というのか、大食漢でもなく、グルメでもなく、美食家でもない。まあ、食い意地が張っているというのもちよっと上品すぎるかなあ？食べることに異常に執着があるわけさ」と三千三氏は笑顔になる。

「はあ、それで倫子さんと仲良くなったというわけですね」と朔朗はほどほどに応える。

「まあ、そして、柴門のやつが、レストランを開きたいと言いついたんだ。好都合だった。早速にデイルだ。トランプみたいなものだ。人生なんでも所詮はビジネス・デイルさ。で、思う壺で、倫子も柴門もウィンウィンで商談成立。晴れて倫子は私のものとなった。ちなみに本妻はやはり金でおっぱらった」と三千三氏は満足げだ。

「結局私は、本当は人間としての倫理とか道徳としては、越えてはならない線を越えたのかもしれない。しかし、谷崎の『瘋癲老人日記』を読めば、もつとなまなましく老人の心情とか性欲が書かれているし、それは私

的不能者なのになぜこの颯子の足に性的な気持ちを持つのでしょうかね？」と意外に冷静に朔朗は言う。

「それはね、女は知らんが、男はインポテンツになっても性欲はあるのだよ。あなたはどうか知らんが、私は事実上のEDで出来ないのだけど、女性のある種の肢体容姿、あるいは恰好とかかな、そうしたことは性欲らしきものが沸き上がる。突然だけだね」と三千三氏は朔朗を見つめる。

「そういうものですか」とさりげなく朔朗。

「そうなんだ、私はねえ、この谷崎の督助とは違うけど、ある日、柴門が倫子を連れて来たのを見た時に、倫子のショートヘアに性欲が掻き立てられた。ショートヘアだけではないよ。彼女の全体の中でショートヘアがいたくエロティックに見えたわけだ」

「確かに倫子さんは、素敵なショートヘアだと思います」
「そうだ、でもそうじゃあないのかもしれない。私は柴門が連れている女に惚れただけかもしれないと今は思う。人のものはなんでも欲しくなるたちだからねえ」

「しかし、三千三先生、立ち入ったことですが、柴門さんとはそのことで喧嘩というか揉め事にはならなかったのですか？」

「あいつはさ、多分、倫子は好きだったのだけれど、一方で若干飽きていたんだと思うよ。私がことあるごとに倫子を誘って散歩に行ったり、遊びに行ったりしても、

のような生温いものではなくて、もっと切実だ。命をかけてるとも言えるくらいの迫力だ。だから私はまだまだ生温いと思いますよ。それに考えてみればうちは今、すっかり落ち着いた。私と倫子は仲良く夫婦のようにやっているし、柴門のやつは、今は料理に燃えている。その結果、私と倫子の食痴の想いはまずまず充足されている。これこそ、三方一両得というのか、ウィンウィンウィンなんだよね。柴門はもう倫子に未練はないだろうしさ。だから私は卯木督助よりは幸せだと思おうのです。しかし、最後に考えてみると、卯木督助は自分の望みが達成できなかった。彼は死んだあとは、長男の嫁、颯子の足形の彫像に踏みつけられて眠りたかったわけだが、そのような夢は雲散霧消したよね。そちらのほうが、つまり、叶わぬ夢を抱いて死んでいく方がより楽しいとか至福の死なのかもしれないあとも最近思うんです。彼も私も、要は屈折した、マゾヒストだからね」

寒々とした遠くで

山猫が吠える

二人の騎馬武者が近づきつつある

そして、風がうなり始めた

明日は、いよいよヒーリー・デイだから、もう寝よう……

十三、大きな栗の木の下で

翌朝、五月三十日金曜日、朔朗はともかく石越スピードサーキットに行かねばならないので、六時に起きて、凛々子のスバルを借りて三千三氏の家を出発した。三千三氏も倫子さんも出てこなかったが、凛々子起きて僕を見送ってくれた。「今日は倫子と勝手にしてるし、それから帰るか、もう一日いるか、あとで連絡する。あたしは新幹線で帰るから、スバルはもういらない。あなたが自分で乗って帰ってね」と凛々子は言った。

今日の予定は、まずは石越スピードサーキットで、一旦オースチン・ヒーリー・クラブの人たちに挨拶して、そのあと、再度ここへ戻り、オンラインでY社の取締役会に参加、その中で独立委員会にも出席し、さらに取締役会をほどほど出て、またサーキットに戻り、ラヴ・ヒーリー・デイのイベントを見て、終わったら、皆と宿泊先へ行くことになるはずだ。ここから石越スピードサーキットまではおおよそ四十キロ、時間は四十五分くらいかかるようだ。まあ、朝六時に出たから、ゆっくりに行つて、道を間違えても、八時前には間違いなく着けるとふんだ。天候は曇りで、あまりよくはない。もしリズで走ったら、結構うす暗いし気を遣ったかもしれない。ヘッドライトはほとんど利かないからあと朔朗は思った。その点はスバル凄いな。河口湖を出て、左側に富士

箱根伊豆国立公園を見ながら、ということとは富士山も見えるはずなのだが、曇っていてよくわからない。右側には西湖や本栖湖などがあるはずだ。そして、白糸の滝へ向かい、さらに東に行くと石越スピードサーキットがある。スバルは当然だが快適に走る。スプライトだとは行かない。その点は良かった。たとえ雨が来ても全く問題は無い。とか考えているうちに石越スピードサーキットに着いてしまった。やれやれ。まだ時間は七時だから目標値よりもかなり早く着いた。サーキットに入つて行くと、当然、オースチン・ヒーリーは一台も見当たらない。ま、ちよつと心配ではある。右奥のほうに数人の若者がいて、クルマが三台停まっている。あれは皆今どきのクルマだ。でも、ヒーリー・デイで貸し切りじゃあないのかなと思つた。

あるいは、ヒーリー・デイの人が自家用車で来ているということもありうる。古いクルマの会だから、前目にはクルマが動かなくなることはまあある。一応話してみようとスバルを停めて、若者たちに朔朗は近づいていく。「おはようございます！」と挨拶すると彼らも「おはようございます」と会釈した。「皆さん、オースチン・ヒーリー・クラブの方ですよ？」と朔朗は問いかける。「あ、僕たちは違います。今日、ここ借りて走るんです」と若者が言う。眼鏡をかけて、学生か、社会人か、まあ

三十代というところかなと朔朗は思った。ここを借りて走る？ということはありえないだろうと思う。貸し切りのイベントのはずだし、他のイベントが並列であるということはありえない。

「ラヴ・ヒーリー・デイというイベントで貸し切りのはずですがね」と朔朗。

「いや、それは知らないですが、我々はグループでここを今日は借りてます」と若者たちは怪訝な顔。

「あ、そうですか。あれどういうことかな？わかりました、確認します」と言つて朔朗は困った。何かの間違ひかもしれない。ともかく確かめるには井桁会長に電話するしかないと思い、早速に井桁さんの携帯を鳴らす。

「はい」と井桁さんが出る。「あの、井桁さん、朔朗です。今、石越スピードサーキットに来たのですが、ヒーリー・クラブの方ではなくて、他の人たちから今日は借りてますと言われました。ラヴ・ヒーリー・デイは今日ですよ？」と朔朗は畳みかける。

一瞬静寂があり、ためらいがちの声が聞こえた。

「朔朗さん、ラヴ・ヒーリー・デイは明日、土曜日、三十一日ですよ」と。「明日、お会いしましょう。ヒーリー壊れたのは残念ですが、折角なのでぜひ明日スバルで参加してくださいね。メンバーと会つのが大事ですからね」と井桁会長は電話を切った。

まあ、こういうことはたまに起こる。でもあれだけ様々な障害を乗り越えて来たのに、なんとという結果だろう。ヒーリー・スプライトのリズは壊れて動かなくなつた。BTCは何とか手に入れたが今回は必要がなくなつた。凛々子のクルマにはBTCのカードが付いている。Y社のオンライン会議は、そうであれば、今日、普通に三千三氏の家から出られた。馬鹿みたいだなと思う。凛々子に電話して、事態を説明した。

「ほんとにボケてるわね。散々大騒ぎをして、一体何をやってるわけ、馬鹿みたい。あたしまでこんなことに付き合わせないでよ。まあ、昨日倫子に会えたから良いけど。で、どうするわけ？」とおかんむりだ。あたりまえだ。「うん、なので今からそちらへ帰つて、オンライン会議をやるよ。それが終わつてから考える。でも明日はラヴ・ヒーリー・デイに参加してくれと会長から頼まれた」

「あ、そう。わかった。倫子には事情を言っておく」と凛々子は電話を切った。

朔朗は、また来た道を三千三氏の家まで戻り、まずは九時からのオンラインでのY社監査役会、取締役会、独立委員会を終えた。三千三氏は出かけたそうでないかった。倫子さんは、凛々子とお茶をしていたが、「日にちが違つていたんですって、大変ですね」と言ってくれた。

「馬鹿なのよ、それにボケがはいってるんじゃないの」と凛々子は容赦ない。

「今日も良かったらお泊りください」と倫子さんは言う。「ええ、でもご迷惑かけすぎなので、ちよつと考えます」と朔朗は言う。

結局、凛々子と相談して、もう一泊泊めてもらうが、食事は自分たちで行くことにした。正直なところ、また三千三氏の話を聞きながらの食事はつらいという事で二人は一致した。そこで、凛々子が、高校の友人の一人がこのあたりに暮らしているので、彼に連絡してみろわということになった。そして、連絡がつき、大江譲二さんと夕飯を食べることになった。

昼間は、倫子も誘って三人で河口湖の周辺をクルマで周ってみた。昼はカフェに入り、オムレツとか、オープンサンドなどを食べ、朔朗はカフェラテ、凛々子はブラックコーヒー、倫子さんはレイディ・グレイの紅茶を飲んだ。観光と言っても、朔朗も、凛々子も、とても富士急ハイランドへ行く元氣もなく、どこへ行こうかという事になり、結局、朔朗の提案で三島由紀夫文学館、蘇峰ふれあい館へ行った。三島由紀夫は、朔朗にとってそれほど深い縁ではない。高校生の頃だったか、「豊饒の海」などの彼の作品を読んだ。もともと現実に三島が

一九七〇年に陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決したときは、まだ幼すぎて何のことかよくわからなかったが、切腹をしたという鮮烈な印象があった。特に好きな作家ではなかったが、盾の会とかの右翼的活動や、丸山明宏（後の美輪明宏）とのなんとなくよくわからない交友関係なども少し気になった。

まあ、そんな想いもあり、三島由紀夫文学館はなかなか面白かった。女性二人は大した興味もなく、一緒にぶらぶらしたただだったかもしれない。

ともかく夕方になり凛々子の友人の大江譲二氏との夕食に行く時間となった。倫子さんは家に戻り、今晩は三千三氏と夕食を食べるといふ。大江譲二氏に指定された場所は十里木の「栗の木カフェ」というところだった。「栗の木カフェ」the Chestnut Tree Cafeとはどこかで聞いたような名前だなど朔朗は思った。ともかく住所を見て、iPhoneで経路を確認して出発した。一時間ほどの道だが、多少迷ったが、なんとか無事「栗の木カフェ」に着いた。このあたりはそもそも別荘地として開発されたところのようだ。

凛々子と二人でカフェに入り、大江譲二氏の名前を告げる。すぐに二階の四人掛けのテーブルに案内され

る。本人はまだ来ていない。店はすいていた。あまりはやっていなのかな？と朔朗は思う。席に座ると、ウェイターが早速に何か飲み物を入れたとても縦長の小さな透明なグラスを持って来た。においを嗅ぐと、ジンのような

だ。黒い細長い実のようなものが入っている。香辛料だなと朔朗は思う。つてことはクローブか？じゃあ、ここは一九八四年のオセアニアのロンドンかい？と朔朗は思わず口に出した。凛々子は何言ってるのという怪訝な顔。そこへすかさず、「おう凛々子ちゃん久しぶり！」という声が聞こえる。これが大江譲二氏だと朔朗は声の方を見た。

「これは、朔朗さんですよ？俺、大江譲二です。ウェルカム・トゥー・オセアニア、栗の木カフェへようこそ」と声が続く。

大江譲二は比較的小柄でまだ若い。四十台前半くらいだろう。髪の毛は短く刈り上げられ、クルーカットな感じだ。細い金縁の眼鏡に、オレンジ色のランニング用のフット付きパーカー（RLと入っている）とシヤカシヤカなジャージのような白の三本線の紺色のパンツ。そのあたりをジョギングしてきたような格好だ。シューズはZのロゴ。大谷翔平好きかな？早速、席に着き、「これはこの店のウェルカム・ドリンク、クローブ入りのジン

だよ。朔朗さんの言う通り、ここはまんま、ジョージ・オーウェルの一九八四年なんだ。ここの店主がオーウェル好きで、それが嵩じてついにこうなったっていうわけ」と。

凛々子が「譲二、それって私まったく意味がわからない」と苦情を言う。

「凛々子さあ、ジョージ・オーウェルってイギリスの作家に『一九八四年』って作品があるんだ。その諸々のオマージュをこの店に取り入れてるってことだよ」と朔朗が補足する。

「そうそう、そういうことよ。さすがに朔朗さんわかってるね。で、俺の名前がまた、オーエ・ジョージでしょ。ジョージ・オーエ（ル）なんすよね。何という偶然」と大江君が笑いながら言う。

「一九八四年って、昨日の三千三じいさんじゃないけど、ヴァン・ヘイレンでしょ？」と凛々子。「それ言ったら、1Q84で春樹でしょ？」と大江君。

「影響力があるんだね、ジョージ・オーウェルは。面白いよね、『一九八四年』は一九四九年に刊行されて、紆余曲折もあったみたいだけど、いまだに世界中で読まれている。一九八四年はとっくの昔になったけど、一九八四

年には英国で再度ベストセラーになり、その後も、それこそ音楽界、文学界だとかいろんなところで、なんていうか、この作品を意識した引用に使われてる。こんな作品はあまりないよね」と朔朗は言う。

「そうっすね。でも俺は読んだけど、正直あまり面白くなかったっていうか、不思議な小説だと思ったなあ。ある意味支離滅裂。でも、この店が出来て、これがまんまオーウェルだってわかってからよく来るようになった。モラトリアムなのかもしれないけど」と大江君。

「ああ、僕も最初に読んだときはよくわからなかった。全体が思いつきり暗いし、最後の部分は、読むにたえないくらい沈鬱で、重いよね」と朔朗。

ともかく食事を頼もうということになり、朔朗はチキンカーリ、凧々子はハヤシライス、大江君は、省内食堂シチュー（笑）を頼んだ。それに今日のサラダと、生ハム盛り合わせを三人でシェアすることにした。飲み物は、朔朗は運転があるので、水だけ。凧々子は相変わらず泡が良いと言って、スパークリング・ワイン、そして大江君はモンキー47だ。ドイツのクラフトジンで、猿のイラストが素敵だ。それにクロップを持ってきてくれと頼んだ。こいつ、どうしても、ここをオセアニアのロンドン、真理省の食堂にしたいんだろなと朔朗は思う。もつとも、札幌には、「9184」というクラフトジンを造っ

言った。

「でも、実際に、今はさ、多かれ少なかれ同じことじゃあない。世界では永遠に戦争がなくなるならない。戦争が続くことが、世界のある種のあたりまえ。もちろん、世界中の人々の関心事だけど、でもたとえ日本人にとってウクライナもガザも遠い世界のことでしょ。可哀そうに思うけど、日常には関係ない。三つの大陸で永遠に戦争が続いているという幻影を常に人々に与えておくってのはとても素晴らしい管理方法よね。そして、世界中の人々はインターネットを通じて結局は監視されているわけよね、四六時中。それに、フェイクニュースが好きな某大統領は、自分の気に入らないことはすべてフェイクニュースだと言い切るわけでしょ。それってビッグ・ブラザーと同じことよね」と凧々子が一息に言う。

「凧々子ちゃん、その通りだよ。だから、実は俺たちは一九八四年のオセアニアに生きてるとあまり変わらないんだぜ」と大江君。

「そうだな、でも、若干ましなのは、いきなり秘密警察に捕まったりはしないよ。少なくとも今の日本はさ」と朔朗。

「いやいやいや、わかんないよ。今の新しい女性の総理大臣なんかは、ビッグ・ブラザーならぬビッグ・シスターになりかねないね。朔朗さんや俺なんかは危険人物とし

ている会社があるそうだから、この店の店主はなぜそれにしなかったのだろうと朔朗は考える。「1984」は一九四九年に発刊された。ドイツのジンは47。札幌のジンは、9184。だからどうだったの？

三人は食べながら流れてオーウェルの話になった。まずは凧々子のために朔朗がおおよそのオーウェルの「1984」の概要を説明した。ディストピア小説で、全体主義への批判であり、ビッグ・ブラザーはスターリン、エマニュエル・ゴールドスタインはトロツキーがモデルだと、まあ言い古されていることではあるが。世界は第三次世界大戦後に三分割されて、オセアニア、ユーラシア、イースタシアの三つの地域からなりで、三国は常に紛争地で戦争を続けている。そして、主人公ウィンストン・スミスはオセアニアに棲むが、その体制と党の管理に疑問をいだき、批判的になって行く。その中で出会った、女性、ジュリアと恋仲になり、二人は隠れ家を見つけて逢瀬を重ねる。しかし、それは常に見張られている世界であり、隠れ家の持ち主、チャリントンの密告で逮捕されて・・・云々。

「なんかさ、それって結局はなんなの？要はそういう世界が怖いってことかしら？あるいはそういう世界が間もなく来るっていう警告？」と凧々子は独り言のように

ていきなり逮捕、監禁、拷問の果てに島流ししてことがあるかもよ」と大江君は言い放つ。

「そうだね、僕も大江君の意見に概ね賛成だ。確かに今の世の中は、どんどん悪くなっている。別な意味での全体主義、つまりスターリンだったり、ヒットラーの時代へ逆戻りしている。ドナルド・トランプ、プーチン、習近平、金正恩、ベンヤミン・ネタニヤフ、若干気の毒かもしれないが、ゼレンスキーにもそうした一面がないでもないかもしれない。どこの国も、自国民族が一番大事で、ナショナリズムで外国人を排斥し、行きつく先は、差別と偏見へまっしぐら。日本だって、外国人への敵意が増幅しつつある」と朔朗は珍しく大江君に同調する。

「でも、今の日本がある種のディストピアだとするなら、俺らはどうすればいいのかな？」と大江君はいきなりクロップ入りのジンをあおる。

「『1984』みたいに、ジュリアを探して、セックスに耽る、かなあ？」と朔朗。

「あら、朔朗ってセックスに耽ることなんかできるわけ？無理じゃないの？」と凧々子は冷笑した。

「あたしはそれでもいいわ。でも朔朗みたいな自分の心に入り込んで、四六時中なんかうじうじと考えてるような人は無理よね。自暴自棄でセックスに耽るなんて。そ

うでしょ？」

と凛々子は言う。

「凛々子ちゃん、その辺で勘弁してあげなよ。オジサンは疲れてて、セックスどころじゃあないってさ」と大江君。

ところで、予想に反して、ここの食事は美味しかった。カレーはなかなか本格的な香辛料だし、ハヤシライスはとろけるような牛肉と、たまねぎと、デミグラソースが秀逸だし、省内食堂シチューもとても良い香りが立ち昇る。コック・オ・ヴァンのような感じだ。それを食べはじめたところで、「ねえ、ところでさあ、昨日の夜は、三千三じいさんとなんの話したわけ？」と凛々子が聞いた。大江君は興味深そうに朔朗を見る。

「その前に、ちょっとオーウェルの『1984』を総括しておこう。というか、あの小説の疑問点がいくつかあるよね。一つは、最下層の人民、プロールのことだ。元々は『プロレ』という日本語で、つまりプロレタリアート＝最下層の労働者、という意味でつけられた名前だけど、現在では英語読みにしてプロールと訳されている。この最下層労働者集団は、数にして一番多いわけだけど、彼らにはほぼ普通に自由があるよね。重労働を担わされているし、劣悪な環境と食事で短命だけど、彼らには普通に自由がある。酒、セックス、ギャンブル、ス

ポーツ、なんだろうと好きなことにのめり込める。テレスクリーンで監視されることもない。教育は受けられないのだから、もともと優れた頭脳を持っているやつもいると思うんだ。だから、主人公ウインストンも言うように、この中から新たな人々が台頭して、現体制を打ち破るということが起きそうに僕は思うんだけど」と朔朗は疑問を呈する。

「もう一つ、昔から言われる疑問点、つまり、最後に付録として付いている『ニユースピークの諸原理』という部分、小説の中では、党は英語を簡略化、単純化しているために「ニユースピーク」という言語を開発している。その概要が説明されるのが「ニユースピークの諸原理」なのだけど、この文章はすべて過去形で書いてある。それを根拠に、これが過去形で書かれていると言うことは、すでに過去の遺物としての存在、つまりある時に現体制は打ち破られているのではないかと一部の評論家は考えたわけだ。僕も昔、これを読んだときに、過去にニユースピークという言語を開発しようとしたことがあった、という解説のように思った」

「これらに関して、大江さんはどう思うの？」朔朗は改めて聞いた。

「ああ、朔朗さん、それは俺も疑問に思う。逆の言い方するとさ、何故、中間に位置する、「党外郭」＝ウインストンたち下級官僚が所属する階層だけが、なんてえの、差別され、監視され、抑圧され、党ビッグ・ブラザーへの忠誠を疑われて、何かあればしょっぱかれて、拷問を受けて、再教育されるのかってところだよな」

「ねえ、あたしお腹減ったんだけど。まずはゆっくり栗の木カフェの食事を堪能しようよ」と凛々子は文句を言う。

「わかった、凛々子ちゃん、じゃあ、この話はこのへんでやめよう。俺たちはプロールなのかなあ？何も考えずに楽しんでばかりいるとプロールのお仲間になるって寸法さ。きつ」と一応大江君が結論づけた。

「そうだ、昨晚の三千三オヤジの話なあ。それはなかなか面白かったよ」と朔朗が凛々子の問いに答えた。

「知ってた？柴門シェフは三千三さんの子供だって？」朔朗は凛々子を見る。

「ええ、うそよ。倫子の話だと、柴門さんは、青川を継いだお兄さんの子供を養子に言ったってたわ。自分の子供じゃあないでしょ？」と凛々子は言う。

「それ誰から聞いたの？倫子さんか？」と朔朗は聞き返す。

「そうよ、昨日の晩に倫子が言っていたわ」「ふうん、倫子さんが知らないだけなのか、そう聞かされてるってことか？」と朔朗は考える。

「じゃあさ、倫子さんが元々は柴門シェフのガールフレンドで、それを三千三さんが奪ったっていうのは聞いた？」と朔朗は次の質問。

「ええー、うそでしょ。そんなこと倫子は言っていないわ。柴門は水戸で、鯨鯨を使ったイギリス料理の店をやっている、そこに三千三氏が通っているうちに、男同士の関係になって、まあ、世間で言うLGBTQの世界へ走ったらしいわよ」と凛々子は、あなた三千三さんから聞かなかったのという感じで朔朗を見る。

朔朗は一瞬黙った。

「ほー、それも倫子さんの話かい？」

「そうよ、倫子が言うにはあの人は両刀使いだって」

「はあ、またあの人独特の二重思考ダブルシンクなんだろうな。俺には全く違うこと言ってたよ。谷崎潤一郎に憧れて、息子のガールフレンドを奪ったと。そして、結果的にはそれが、倫子さんにも、柴門君にも、自分にも良い形におさまって、めでたしめでたしだ、とね」と朔朗はもうどうでも良いやという気持ちで言葉を終えた。

真理省のスローガンが頭に浮かぶ。

戦争は平和なり
自由は隷従なり
無知は力なり

(ジョージ・オーウェル「1984」高橋和久訳、早川書房)

「まあ、そうね、どのみち三千三先生は、あることないこと言うのはあたしも理解できるから、そうかもしれないわ。でも、倫子までがそんな出鱈目をいうかしら？」と凛々子。

「ふふん、二人で最初から僕たちをからかっているんじゃないのかなあ？面白い夫婦だ。いや、夫婦なのか、同棲なのか、実は二人は何の関係もない赤の他人だったたりして」と朔朗は大江氏を見やった。

「よくはわかんないけど、不可思議なカップルに誂かされたって話ですか？このあたりは狐狸の類が結構出るからさ、朔朗さんと凛々子が化かされてとしてもおかしくねえなあ」と大江君は笑う。「サイモンってのは、あのジョー・ジョー・ポージーっていう変なイタリ안의シェフだろ？」と大江君は凛々子を見る。「あいつは、すっぽんのお化けかもしれないよ。ちよつと前に俺の友達があるの店に行ったら、すっぽんみたいな化け物が二匹座ってすっぽん鍋喰ってたらしいぜ。でっかいのと、ちっちゃいの二匹でさ。そいつは走って逃げて帰ったと言ってた

いる二階の客室に行つて、すぐに寝た。

翌日、今日こそ、ラヴ・ヒーリー・デイだと思いつつ、朝五時半には起きて、六時半には三千三氏の家をスバルで改めて出発した。凛々子は勝手にしているから、あとは別行動ねと言つてバイバイした。天候はやはり曇りだが雨は降っていない。予報では今日はあまり天気が良いはずだ。昨日に続いて同じ道を石越スピードサーキットに向けて走る。予想通り、七時半にはサーキットに着いた。中に入つて行き、ヒーリーではないので遠慮して、入り口すぐの駐車場にスバルを停めた。まあ、ラヴ・ヒーリーというのだからスバルではちよつと寂しいけど仕方ない。サーキットに入つて、奥の方に歩いて行くとすでにクルマが一台停まっている。軽のワンボックスだが、見たことがある。眼鏡をかけた温厚そうな紳士は、会計をやっている小熊さんだ。早速に挨拶をする。「小熊さん、おはようございます。朔朗です。お久しぶりです」と。「ああ、朔朗さん、おはようございます。久しぶり」と小熊さん。彼は、元々はバイクのライダーで、ある時事故で大怪我をして以来、アクセル、ブレーキ、ウインカーなどがすべて手元で操作できるクルマを運転している。確か往年の「コ」ドライバー、クレイ・レガッツォーニも足を事故で大怪我して、手で運転できるフェラーリに乗っていたなあ。事故の後、バリ・ダカールとか耐

よ。暗がりですう見えたってことだろうけど」「なんか妙に符合するけど、そうね、このあたりだと、そういう怪談があつてもおかしくないかも？」と凛々子は言つて、スパークリング・ワインをもう一杯頼んだ。すっぽんの化け物って、三千三氏が言っていたなあと朔朗は思い出す。全部がなにかで繋がっているのかもしれない。ここが、オセアニアのロンドンのはずれという悪夢でなくて良かったけど……。

十四 華麗なるレース (A Day at the Races)

その夜は、大江讓二氏とは栗の木カフェで別れた。彼は、うちにちよつと寄つてつてよと言つてくれたけど、朔朗も凛々子も疲れはてて、(なぜかはよくはわからなかったが)、今夜はゆつくり寝ようと思つた。大江君は、妻は東京にいて、俺はずつとここに一人でいるんです。家は鍵をかけたこともないし、などと言つていた。この辺りは、泥棒も強盗もないし、人も来ないからさ。それにうちは取るものもねえからさ、なんて。そういう風流な生活も良いかもしれないなあと朔朗は思つたが、生来の怖がりだから俺には無理だなあとつぶやく。

三千三氏の家に帰り着いたが、倫子さんが鍵を開けてくれて、少し話をしたが、そのまま我々の部屋になつて

久レースにレガッツォーニは手のみで運転できるクルマで出場していた。朔朗は、事故のあとに、手だけで運転するクルマに乗つて、何百キロも走っている小熊を畏敬の念で見る。

「小熊さん、その節は、『KANIME』に僕の本の紹介を載せてただいてありがとうございます」と朔朗は小熊さんに礼を言つた。ちよつと昨年、朔朗が出した小説をヒーリー・クラブの会報誌「KANIME」で小熊さんが紹介してくれた。カラーでなかなか素晴らしい紹介で、朔朗としてはとてもありがたかつた。

「あれね、なかなか、宴会で評判でみんな欲しがつてました。我々事務局で五冊もらつて、あとの五冊を賞品にしたんで盛り上がりましたよ」と小熊は言う。お世辞でもそう言つてもらえなうれしい。「どうですか？売れます、ご本は？」と聞かれて、「いやあ、売れるような本ではないですから……」とお茶を濁す。確かに売れないよな、あれじゃあと諦める。

「いや、今回はスプライトが壊れちゃつて、残念ながらスバルで来ました。どうしても直らなくて残念ですが、井桁さんが普通車でも良いからぜひ顔だけでも出してくださいと言われるもので」と朔朗は現状を説明した。「それと実は日にちを間違えていて、昨日一回ここに来てし

まったんですよ。そしたら、別のグループがいて、おかしいなと思って会長に電話したら、土曜日ですから明日ですと言われ、がっかり来ました。トホホですな」とさらに続けた。「そりゃあ苦労様ですね」と小熊さんは半ば呆れたと思うけど。

「ところで、小熊さんはいつもこれで移動ですか？」と朔朗は軽自動車を見ながら聞いた。「ああ、これね、足をやっちゃってから、基本は手ですべて運転できるやつなんです。実は今、手で運転できるスプライト・レプリカを買ったんですけど、今日は間に合わなかったんですよ」と小熊氏はやや残念そうに言った。

「ええ、スプライト・レプリカがあるんですか？」と朔朗。「そもそも、スプライト・レプリカのクルマはいくつかあるんですよ。英国本国のは中身は新たに作り直したシャーシを使い、ボディはFRP製。フロントボンネットはチルトカウルになっていて、オリジナルとは逆に開くんですよ。エンジンはトヨタ製で、確かヒーリー家の誰かが公式にライセンスしていた。それが結構オリジナルに近いかな。英国マン島に会社があったんだけど、もう今はないかもしれない」と小熊さんはここで一息ついてお茶をペットボトルから飲む。

「私が買ったスプライト・レプリカについて少しご説明

という現代のクルマがベースなんで出来るわけだ。

「外観はほぼスプライト・レプリカに見えます。ビルダーさんも細かいところに気を遣ってくれて、追加費用もなしで、こちらの要望を全部再現してくれました。オリジナルに近い仕様で色は水色です。自分でもなかなか良い出来栄えだと気に入ったんですが、メカニズムのほうはいくつか問題があつてねえ。で、ついに今日には間に合わなかったわけですよ」とかなり残念そうな面持ちだ。

クルマ好きなら女房を質に入れてもクルマに賭けるっていう感じだけど、小熊さんの場合は少し違うんだろうと思う。だって、そもそもクルマなんか乗れなくなってもおかしくない怪我を負ったわけだし、それをまたクルマに乗るだけでなく、趣味の世界も楽しむというのはよほどの心意気というか、昔風に言えば、根性がないと出来なと思う。凄い人がいるのだと思う。僕なんかは全くこういうクルマのクラブに入る資格はないなと思う。

……なんてことを考えていたら、ようやく何台かヒーリーが入って来た。100/4、100/6、3000、スプライトのMK1、MK2、MK3、MK4と様々なヒーリーが現れる。壮観だ。色もアイズブルーと白のツートン、黒と赤のツートン、シルバー。スプライトはカラフルだ。オールド・

しましうか」と小熊さん。

「お願いします」

「それはね、一九九五年登録のスズキのカブチーノ、オートマですが、それをベースにボディをFRPで作ってもらい、換装し、普通乗用車登録しました。ラヴ・ヒーリー・デイに間に合うようにと今年初めに納車してもらったのですが、色々初期の不具合がありまして、しばらく製造元のビルダーさんに預かって直してもらっていました」「わくわくしつつ、めっちゃ待ち遠しかったですね」と朔朗。

「先月、小田原から箱根、富士五湖とミルキーちゃん、つてのが愛称ですが、その峠デビューとなりましたが、ベイスとなったカブチーノの素性の良さがそのまま活かされた、素晴らしいライトウェイトスポーツカーになつてますよ。現在、トノカバーとソフトトップ、これは障がい者用で標準品とは別物なんです、それを専門業者さんに作ってもらっている所です」

「へー、それはなんかとっても良いですね。そんなことが実際に出来るんですね」と朔朗は驚いた。まあ、確かにクルマなんて一種の実物大のプラモデルみたいなものだから、いろいろいじれば出来そうにも思えるが、ただのクルマではなく、手ですべてを操作できるクルマとなるとなかなか難しいのではとも思う。そこはカブチーノ

イングリッシュ・ホワイト、ライト・グリーン、ブリティッシュ・グリーン、アイズブルー、赤、イタリアン・レッド、黄、メタリック・ブルーなどなど、オリジナルではない色もある。持ち主の趣味もあれば、オリジナルを尊重しているものもある。緑に囲まれたサーキットが華やぐ、そしてエンジン音。レーシングカーとまではいわないが、野太いエンジン音があたりを満ちた。

朔朗はふと想った。ジェイムズ・ジョイスの短編に「カーレースが終わって」という作品がある。凡作でジョイスが気に入らなかったといわれる。これは実際に一九〇三年七月三日にダブリンで開催されたゴードン・ベネット・カップ・レースというイベントがあり、それを舞台にしている。ジョイスは、堅物のように思われるが、家族で大型の乗用車、それもオープンカーの運転席に乗っている写真もあるくらいで、朔朗は、ジョイスがクルマ好きだったのではないかと睨んでいる。ただ、当時は、自動車レースは金持ちの道楽みたいなもので、ジョイスは熱心な自動車好きだったかどうかはわからない。しかし、決して豊かではなかったダブリン市民も自動車レースで湧いたようなので、エキサイティングなクルマが集まってレースをするというのは何かこう心躍るものがあるんじゃないかなと自問する。もっとも、ジョイスが短編にちりばめるのは自動車レースの引き起こす

ナシヨナリズム、アイルランドの劣等感、対イングランドへのフランスとの共感とか、微妙なものであるのだが、まあ、それはこの際どうでも良い。やはり、リズで来れなかったのは残念だ。このラヴ・ヒーリーの会は、ごく普通でもないが、と言って大金持ちが集まる鼻持ちならない会というわけではない。

ともかく、朔朗は井桁会長に挨拶し、それから参加費を払い（ちなみに一万円）、毎年作られるTシャツを二枚（凛々子の分も）買った。今年はモノクロでなかなか洒落たデザインだ。それから今日は宿泊も頼んだと思い、それを事務局に確認したら、あ、朔朗さんは宿泊のリストに入っていないですよと言われた。あらら、また手違いかと思ったが、どうも今回は、リズは壊れたし、ラヴ・ヒーリー・デイの日にちを間違えたし、さらに宿も取れてなかったということは、神様がさっさと帰れと言ってるんだと思ったので、もう良いやと思い、少し皆の走りを見たら帰ろうと決心した。

簡易椅子を持って、少し奥まったところに席を確保して座る。気候はちょうど良い。事務局を中心に皆で TENT を立て、諸々、お菓子類や、飲みもの、弁当などが並べられる。昨年亡くなった前会長の遺影もおかれる。弁当が渡され（参加費に含まれる）、集合がかかる。井桁

会長は、今日も事故などないように楽しくやりましょうと挨拶し、事務局長が、今日は天候があまり良くないので早めに終わりたいと思いますと言って、すぐにクルマの写真撮影を行い、そのあとにサーキットの走行をやると説明する。朔朗は早速に凛々子に電話して、宿泊の予定が取れていなくて、今日帰ることにすると連絡した。「あらまあ、それは酷いわね」と凛々子は呆れるが、朔朗が「いや僕のせいだ。ちゃんとメールが行ってなかったか、忘れていたか、まあ、今回はリズが早く帰れと言ってるのだと思うから、少しいて早々に帰ることにする。帰りが決まってるなら、そっちへ迎えに行くよ？」と言ったら、「あ、そう、じゃあお願い、待ってるわ」とあっさり一緒に帰ることになった。

朔朗は昼近くまで、何人かのメンバーたちと話し、井桁会長とも話した。井桁さんのクルマは、赤のオースチン・ヒーリー・スプライト MK1 で、ボディと同色のハー ドトップが付いている。色は、販売された時のオリジナルはもっと深紅色のような感じだけど、これはいわゆる真つ赤だ。イタリアン・レッドとも違う。このほうが赤らしくて良いなと思う。

「これは結構いいじつてあるんですか？」と聞くと、「まあ、ディスクブレーキにしたりはしてないけど、エンジンは 1250CC なんです」と井桁さん。「あ、1250CC じゃあト

と言われた。「あの人は元々、バイクのレーサーだからなあ」と。

そんなこんなで、弁当を食べて、皆さんに挨拶して、朔朗は石越スピード・サーキットを後にした。

十五、ジ・エンド

こうして、朔朗のラヴ・ヒーリー・デイは終わった。散々と言えど散々だったけど、思い出すとなかなか面白かった。家に凛々子と帰り着いて、ほっとした。六月三日にリズに会いにさいたま市のリズが置いてある家に行った。湘南新宿ライナーを降り、浦和駅に降り立つ。家に着いて、ガレージを開けると、リズが静かに佇んでいる。

「リズ、おはよう。今帰ったよ」

もちろん、沈黙。いつリズは目覚めるのだろうか？と思ったが、ともかく動かないのだから仕方ない。ちゃんと動くようにしなくては目覚めるはずもない。念のためフロントボンネット開けて、バッテリーのキルスイッチを戻し、イグニッションキーを回し、スタートボタンを引っ張ったが、セルモーターはウンともスンともいわない。やはりだめだ。鷹川さんと呼ぶしかない。

ルグがあつて走りやすいですよ。私のは 1080CC です」と朔朗。「一緒に乗って見ますか？」と井桁さんが言うので、「ええ、乗せてください」と応える。井桁さんはなかなかの走り屋だったなあと朔朗は思う。クルマは左ハンドルで北米輸出仕様だ。ヒーリーの乗車はなかなかきつい。狭いし、低いし。なんとか右側にもぐりこむ。シートベルトはない。普通の座席のみだ。井桁さんは周囲に気を配りながらも結構なスピードで走ります。ちょうどサーキットは空いている。この狭い短いサーキットだと、ギアは二速までしか入らない。

井桁さんが加速する、すぐにコーナーが来る、左に、右にと目まぐるしくクルマは走る。ヘアピンもある。助手席は目の前のパネルに小さな持ち手がある以外は何も身体を支えるものはない。コーナーごとに、右に左に身体が振られる。しがみつくのがやっとだ。テールが滑るほどではないが、なかなかのレースな気持ちになる。華麗なるレース。怖くないかと言えど少し怖いが考えている暇もなく一周目が終わり、もう一周行きますと言われた。最後の短いストレートは楽しい。なかなか堪能した。1250CC のエンジンはやはり力強い。やれやれとクルマを降る。アドレナリンが出るよなあと思う。井桁さんに御礼を言って、自分の席に戻る。メンバーの人が、「井桁さんのクルマに乗せてもらったんだ、勇気あるね！」

その夜は、浦和駅の近くで浦和の知り合いが集まる会がある日だった。浦和駅東口のバルコに行き、地下の「やおこう」でカツサンドと卵サンドを買って、家に帰り、昼を食べた。「やおこう」は埼玉中心のスーパーマーケットで、新鮮な総菜が人気で、朔朗もすっかり嵌ってしまった。それから、家の書棚を見て、そこに残る本を引っ張り出して何冊か眺めた。その中に沼正三作の「ある夢想家の手帖から」(都市出版社)という三冊纏まった本があった。自分で買ったのか、どうか覚えていない。沼正三氏は、確か、「奇譚クラブ」に連載された「家畜人ヤブー」の作者だ。覆面作家で、正体は三島由紀夫、遠藤周作、武田泰淳なども名前があがったと思う。一巻目を開いて読むとなかなか面白い。図版がいろいろ入っていて、見ても楽しいというか、物珍しい。マゾヒストの願望が書かれている。朔朗はいわゆるマゾヒストではないし、サディストでもない。ただ、谷崎のマゾヒズム趣味、願望などを読むと、多少なりとも興味が湧く部分もある。家に持ち帰ることにした。ちなみにそれっきり、どこかに仕舞ってしまい、見たことがないのだが。

そして、夜は浦和の旧友たちと、シェフ・デ・ブッチョというスペイン料理の店で盛り上がった。いずれにしても、朔朗はまずはリズの復活を実現せねばならないと思

い、鷹川さんにレッカー車の手配をお願いした。さて、リズは復活するのか、それはいつ頃。また、リズと一緒に走れるのか？ いやいや、手動運転のスプライト・レブリカを買って、峠を攻めようって人がいるんだから、そんな難しいことではないよな、と思う。リズ、もう少し待ってな、と改めて語り掛ける。反応はないけど、必ず君を目覚めさせるからね！と朔朗は呼びかけた。この時、リズの距離計は変わらず8888マイル余りを指していた。

歩いていると、何故か懐かしい歌が支離滅裂にあたりを飛び交い、朔朗はそれを鼻歌のように歌う

オーイエイ、オーライ

きみは出てくる？

夢に、今夜

愛してる、愛してる、愛してる・・・

そして最後には

受けた愛は

返す愛とイコールになる

了

Meguro, Toyo, December 2025

父と私とビルマとイギリス(第二回)

杉 浦 崇

第一編(二)「日本海軍四〇〇時間の証言」(NHKスペシャル取材班)を読んで

―父への取材―

二〇〇九年二月二十三日、父の海軍での先輩でもあり、その後職場での先輩、そして俳句の師匠でもある方から父に一通の手紙が届いた。「NHKの報道局社会番組担当ディレクターの方より、第二次大戦中のインドネシアでの柴田彌一郎第二南遣隊司令長官の戦犯裁判の時の消息について、問われているが自分ではわからないので教えてあげて欲しい」とのことであった。四月に入り担当ディレクターとの面談が持たれたが、話は父の所属していたスラバヤの艦隊司令部における法務官の仕事に関するものが中心であった。

当時父は九十一歳、老人ホームで余生を送っており翌二〇一〇年に死去した。父を含め我々家族は、この取材目的あるいは今後制作される番組の趣旨がどのようなものであるかについて大いに関心を持った。影響力の大きな報道媒体による取材であり、人の生死に関わる問題提起がなされるということでもあり、その点が憂慮されるところであった。父に特にやましいことがある訳ではなかったが、父も戦犯容疑者として逮捕されていた。父は一九四二年、二十四歳で大学を卒業し、短期現役士官として海軍の法務官となり、翌年二十五歳で旧オランダ領であったインドネシアに赴任した。赴任の前に蘭印総督及びその一統の者が捕虜収容所の中で抗日陰謀計画をたてたとされ処刑された大事件があった。それに関わった中立国スイス名誉領事夫妻が未決拘留となっており、その裁判を檢察の立場で父が担当した。そんなことも理由

の一つであろうか、他の多くの法務官同様戦犯容疑をかけられた。一九四五年十月、二十七歳となった父は終戦により他の軍属と共にインドネシアに抑留され、帰国後逮捕され果鴨ブリゾンからインドネシアに戻され刑務所生活を送ることとなった。この戦犯容疑での刑務所時代に、戦時中の第二南遣隊での法務官としての軍務以来司令長官であった柴田中将と再び出会うこととなった。父は結局不起訴処分となり、一九四七年四月、二十八歳で二度目の日本帰還を果たした。後に法務官として認定されたのは抑留までの二年九か月である。

余談だが、三年間法務官を務めていると無条件で弁護士になった。元大蔵次官で国鉄総裁となった高木文雄氏（同氏は第一南遣隊の法務官）も同様に法務官としての任期が二年九か月で三か月足りなかったが、推薦状を貰い国鉄総裁を退任後に弁護士となった。これを聞いた父は、同じ手法で定年後に弁護士を始めている。

さて、二〇〇九年八月、NHKは三回に亘って「日本海軍四〇〇時間の証言」を放映し、その後同名の書籍にした。ことの発端は二〇〇三年八月、歴史博物館・昭和館の戸倉一成図書情報部長（当時）にNHK報道局エグゼクティブ・プロデューサー（当時）の藤木達弘氏が別件で面談をしたことにあった。話がはずみ、その場で戸倉氏が海軍と戦場の生々しい話を提供したことを機会に二か月に一度位の割合で戸倉氏を囲んでの勉強会がス

タートした。戸倉氏の話からは、旧海軍という「組織」が抱えた問題や犯罪について、「責任者のリーダーシップの欠如」「身内を庇う体質」、「組織の無責任体質」などが浮かび上がって来た。そうして三年が経過したある日、戸倉氏から「海軍反省会」とその録音テープの存在が明かされた。

「海軍反省会」は一九八〇年から一九九一年まで、分かっているだけで一三一回（計約四〇〇時間のテープが残された）にわたって、ほぼ毎月、海軍士官OB組織である「水交会」で開かれていた秘密の会議である。メンバーの多くが、太平洋戦争開戦当時、軍令部や海軍省に所属していたエリート（海軍兵学校卒業生が中心）であった。このテープは「自分たちが生きている間は、決してその存在を表に出してはいけない。」との条件で戸倉氏が預かって来た。出席者は当時に七十代から八十代の老人たちであった。そして、このテープには海軍の歴史上多くの「空白」があるとして、その空白を反省を込めて語り合ったものであった。戸倉氏はこのテープを二十年以上保管していた。

以上は首題書籍に記載されている藤木氏によるプロローグの抜粋である。海軍はなぜ戦争に突入して行ったのかということが大きなテーマであり、特攻隊についてのテーマに続き、戦後の戦犯についての海軍（戦後第二復員省と称された）の対応について語られている。連合

国軍による裁判を極力有利に展開するため、多くの文書が焼却された。又、海軍内で徹底した裁判への対策が協議された。

その結果、陸軍が犯した南京事件や収容施設における捕虜虐待などにより、東条英機元首相など陸軍関係者六名と文官一名（広田弘毅元首相）が絞首刑の宣告を受けたが、その一方、日米開戦時の嶋田繁太郎大将をはじめ、海軍関係の被告二名は両名ともに終身刑を受けたが後に釈放されている。つまり、海軍は一人も処刑されずに済んだというストーリー展開である。

—スラバヤ事件—

今回は、そうしたことの記載されている書籍の第五章「戦争裁判 第二の戦争」（執筆者内山拓氏）で取り上げられている「スラバヤ事件」（一九四五年）について触れたい。なぜなら、それは当時父が海軍法務官として所属していた第二南遣隊で起きた事件であったからだ。

「スラバヤ事件」とは、第二南遣隊指揮下の第二十一特別根拠地隊に関わる俘虜四名の処刑に関するものである。艦隊司令部側とその下部組織である根拠地隊側の処刑命令に関する戦犯裁判（マヌス島裁判）における自供が正面対立し、互いにその責任を回避した点をNHKが取り上げた。

裁判の結果は、当然一部の責任はあると予想された艦隊司令部側の責任まで、根拠地隊の勝手な行動と認定され、柴田長官以下、ハセ参謀長、イチカワ先任参謀、タツノ通信参謀の四名はすべて無罪となり、一方、根拠地隊側は田中司令官は十五年の刑、篠原先任参謀のみ死刑となり、全責任が根拠地隊側にかぶせられたのではないかとというのがNHKの結論であった。

スラバヤ事件は、一九四五年四月（又は三月）、当時の日本軍占領地、インドネシアのスラバヤで発生した。根拠地隊の篠原大佐が問われたのは、捕虜になったオーストラリア兵及びスパイ容疑の現地住民を不当に処刑するように命じたことでこれは国際法違反であるとされた。篠原大佐はスラバヤの守備に当たる第二十一特別根拠地隊の先任参謀であった。この部隊は、同地に司令部を構える第二南遣艦隊司令部（司令官柴田中将）の指揮下にあった。裁判では捕虜の処刑が篠原大佐の独断で行われたのか、艦隊司令部からの命令を受けて篠原大佐の部隊が実施したのかが争われた。

裁判では艦隊司令部の命令については証拠不十分で立証されなかった。一方、実際に現場で命令を下したことは認めた篠原大佐は、自らの部隊に独断で処刑を命じたと裁判で認定された。判決は、艦隊司令部の関係者は柴田司令長官以下全員が無罪、篠原大佐一人が極刑に処され、実行役となった下士官や兵たちは比較的短期間の懲

役刑ないし無罪となった。篠原大佐は最後まで、艦隊司令部からの命令があったと主張して譲らなかった。

この裁判は開廷が一九五〇年十一月二十九日、結審が翌年二月十四日と敗戦から五年も経っている。

内山氏が今回の報道の為の取材で元篠原大佐の部下であった方から聴取した内容として、「オーストラリア人と現地人の処刑には法務官が立合っていた。自分は裁判の席でもそれを証言した。その法務官は戦後逃亡し、捕まっていない。」と。NHKの調べでは当時四人の法務官がおり、三名は裁判記録に頻繁に名前が登場するが1名出てこない人物がいた。弁護士名簿を調べたら行方不明となった法務官と同名同姓の人物が掲載されており、連絡を取ったが入院中であり、かつまた当時のことは何も覚えていないと言われたとのことである。こうしたことからNHKは、この事件は証拠隠滅を艦隊側、ひいては第二復員局が図り、海軍トップを守り下を犠牲にしたと推測する。

父は「スラバヤ事件」当時、スラバヤに赴任していた四人の法務官の一人であったがこの事件の当時はシンガポールに長期出張中であり、関与はない。父はこの豪州の事件ではなく、オランダ軍法廷で戦犯容疑をかけられた。スイス名誉領事による逮捕中のオランダ総督への資金提供事件、あるいは日本軍の火薬庫を爆破した元オランダ兵を軍罰処分にしたがって処分したことなどが

多いということであり、ことの真相は藪の中だ。

内山氏から父に「篠原大佐は罪をかぶせられたと考えるのが妥当でしょうか」という質問がインタビュー中にぶつけられていたようだ。九十一歳になった父の回答は（第五章の記載によれば）「あの事件のことはなにも知らない」と申し上げたでしょう。いまさら何が本当だったかなんて誰にもわかりません。知ったところで何にもならないのです。」と答えたという。そして、内山氏は「真実を知っても何にもならない、ほんとうにそうなのだろうか。釈然としないまま、私はその場を辞した」と第五章の「元法務中尉（S氏）の証言」としてこれを記載している。この点NHKの番組の趣旨は、「軍令部批判をテーマとする」点にあったと言える。そのことを明確にせず、父へのインタビューがなされ、都合の良いところを切り貼りするインタビューの手法も問題である息子である私は感じた。又、招集されて軍隊に引張られ、戦犯容疑で逮捕され、自らは不起訴となるものの周りで処刑される戦友とまじかに接し、命からがら帰国した後、その遺族を訪問して歩いた当時28歳であった父に、軍令部や艦隊トップの在り方を、言わば現場上がりの一法務官に今日聞くのが正しい質問なのかと思ったことを記して置きたい。私は父の「真実を知っても何にもならない」発言には、むしろ竹山道夫の作品ビルマの堅琴の「水鳥上等兵、一緒に日本に帰ろう」という兵隊たちの思いに

容疑の罪状かと想定されたが、内容不明のまま不起訴処分となっている。

そして、このスラバヤの事件について内山氏に問われると、あくまで一般論として、「捕虜処刑が独断で断行されることは考えにくい。国際法上も許されないことであり、各部隊とも責任ある人は承知しているからそんなことはしない。だからこそなんでもかんでも、艦隊司令部に逐一相談して来た。だから我々の繁忙は尋常ではなかった。仮に非公式にやった事件があったとしても法務官がこの立会には行かない。やってはいけないことなのだから」と語っている。これは、事件の内容を伏せられて番組の放送三か月ほど前に、法務官とはというテーマでインタビューを受けた時の受け答えである。NHKは最後まで番組の狙いを明確にせず、巧妙に誘導的な質問を行っていた。NHKの意図はともかく、マヌス島での軍事法廷ではスラバヤでの軍法会議の法務長であった立崎氏が出席していることも父は語っている。その法廷の場で法務長のなんらかの証言はあったと思われる。

このNHKの文脈では、篠原大佐が艦隊側に嵌められたと読めてしまいがちだが、実態はどうなのか。もう少し、複雑ではなかったのか。この点の検証がなされていないのが気になった。豪州サイドの膨大な法廷記録が公開されているとのことではあるが、いい加減な部分も

父の思いを重ねている。「知ったところで何にもならない」は「九十一歳にもなって、亡くなった人たちのことを思い出し、その理由まで追求することをしられることに意義を感じない」といった程度の応対であって、事実を否定も肯定もしていないと考える。内山氏の「ほんとうにそうなのだろうか」は、ご自身のご自身に対する問であって、父に対する問に仕立てているのは少々筆がすべったものであったのであらうと推測する。

とは言え、当時の様子を様々に想起させてくれたこのプロジェクトとその成果には全体として大変感銘したことを付記したい。

以上

第二編（一）ビルマの思い出（私の幼少年時代）

第一章 父の新たな出発そして転勤

昭和二十二年（一九四七年）十月、連合国軍による戦犯容疑もはれ、インドネシアから帰国した二十九歳の父は通商産業省（現経済産業省）事務官として再出発する。大学時代に高等文官試験行政科に合格していたことが結果として生かされた。そして、昭和二十五年、三十二歳で母芳江（二十一歳）と結婚、年末には私が生まれた。

平穏な六年が経過した昭和三十一年（一九五六年）六月のことである。私達一家四人（昭和二十九年に妹久美子誕生）とお手伝いを引き受けてくれた母の親戚筋の貞子さんの五人がビルマ（現ミャンマー）のランゲーン（旧首都）で三年間暮らすことになった。東京の世田谷区大橋にある公務員住宅からの引越しである。

ビルマ大使館には各省庁から人が派遣されており、父は二等書記官として（後一等書記官に昇進）、この任地に赴くこととなった。

今、試みに逆算すると、赴任当時父は三十八歳、母二十七歳、私は六歳、妹の久美子が二歳、母の田舎からお手伝いさんとして来てくれた貞子さんが十七歳であった。

第二章 ビルマのこと

ビルマは一八八六年英領インドに編入された。第二次大戦中、同国解放を名目に介入した日本軍が傀儡政権を樹立させ、一九四二年から日本の実質的な占領が続いた。これに対抗するため、ミャンマーの民族主義者らが連合国軍と組み一九四五年四月までに日本軍を駆逐し、その後一九四八年一月に英国から正式に独立した。同国では一九六〇年代から軍部が台頭し、一時社会主義路線をとる軍事政権が成立。八十年代以降はアウンサンスーチー率いる民主化運動が起きたが、弾圧が続いた。その後

金額が流れたという話を後に聞いた。インドネシアに戦時中軍属として赴任していたことも思い出されたことであらう。

他方、母にとっても「片言の英語しか出来ない田舎娘が突如外交官婦人となった」（と、本人から後に聞かされた）訳だから、結構なストレスがかかったのではないだろうか。例えば、わが家の庭でテントをいくつも張り、各国大使館員を招いてガーデンパーティーを開催しており、この時の写真も残っている。実態としては、大使館から料理長が派遣されたり、その他の手伝いがあったのではないかと想像はするが、英語もビルマ語もほとんど出来ずに、こうした行事をホスト役としてこなさなければならず、良く切り抜けて来たものであると思う。

余談だが、ビルマのわが家には何回か李香蘭女史（山口淑子さん）が訪問している。ご本人の自伝によると、一九五八年に外交官の大鷹氏と結婚している。

李香蘭女史がニューヨークで公演を行う際に大鷹氏が外務省の人間としてアテンドをした際に恋仲となり、これを良しとしなかった当時の外務省は大鷹氏をビルマに飛ばしてしまった（実際に一九五六年十二月三等書記官として赴任）との噂がもっぱらだったと李香蘭女史の自伝にも書かれている。さらに李香蘭自伝によると、結婚に至るまで「私はこれまでの自分から円満に引退する作業にとりかかり、その作業を終えるのに二年間かかった。

二〇一六年にアウンサンスーチーが政界に復帰するも二〇二一年からまた軍のクーデターにより政権が代わっている。

第三章 父母のこと

父の生い立ちは第一編で述べた。ここでは関係しそうなところを簡単に振り返ってみたい。父は戦時中、国の政策により三年で大学を繰り上げ卒業。卒業と同時に召集され、海軍に入隊し法務官として勤めることとなった。終戦を日本が占領していた蘭領インドネシアで海軍第二南遣隊柴田司令官（中将）麾下の法務官（最後は大尉）として迎え、インドネシア解放軍に、後に連合国軍によって敗戦国の人間として他の軍属と共に収容所送りとなった。幸い帰国出来たものの、C級戦犯として、再びインドネシアに送られたが、不起訴処分となった。この間の苦労を父は後に手記として一部残している。

戦前からの経緯もあり、当時の日本人にとって、ビルマはたんなる外国以上の国であっただろうし、父にとってもそうした空気を背負っての赴任であったことと思われる。

ちなみに、父の話ではこの赴任時に、ビルマとの戦後賠償交渉の橋渡し業務の他、インドネシアのスカルノ大統領と岸信介首相との間の戦後賠償（一九五八年一月）の仲介業務の一端も担ったと。又、その際賠償額以上の



【写真：ビルマでの大鷹氏と李香蘭女史の結婚式】

その間、彼は、少しずつ確実に周辺の同意を得る努力を重ねていた」と。その間外務省プロパーの人たちは表向き動けないので、通産省から出向して来た父の家ならということで我が家でデートが成立したとの話を聞いていたが、その後ランゲーンで行われた結婚式には原大使夫妻（当時）も出席し、世間からも認知された。この結婚式には父も出席し、当時の写真も残っている。李香蘭女史の自伝には我が家のことは出てこないが、母は帰国後何年も李香蘭女史と年賀状の遣り取りをしていたようだ。

また、大鷹夫妻のマンションを自分も母と一緒に訪問したことがあるとの妹の証言もある。

第四章 新しい住居

さて、ラングーン到着後ステーションホテルで何日か過ごした後、当時の日本では考えられないような大きな邸宅に移り住んだ。

その邸宅にはパーティーを想定した広いリビングダイニング、浴室付の寝室が三つ、それと大きな台所とその横のトイレにしか使わない浴室がさらにあった。家の二

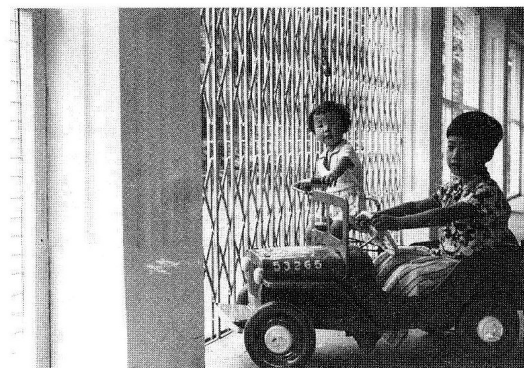


【写真：前庭から見た我が家】

面を囲うように外廊下が走っており、この廊下は家の外部とは網目のフェンスで仕切られていた。

各部屋の間の移動には一旦この廊下に出なければならぬ造りとなっており、子供がその廊下で自転車乗り回すことも出来たが、網目のフェンスは外から覗けるので、裸で部屋の間を往復できない（と後に思った）不便な造りでもあった。

庭も広く、家の正面から外に向かって見ると、正面、右横、そして裏手と三か所に分かれており、バナナの木、



【写真：外廊下で遊ぶことが出来た】

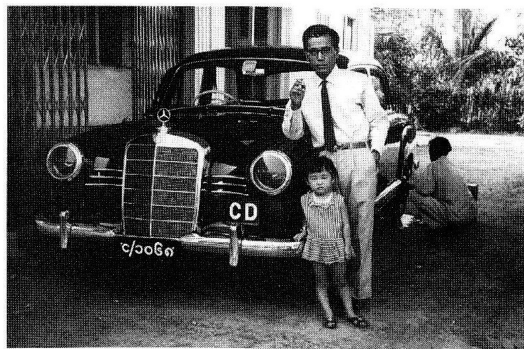
マンゴの木、パイナップルなどがそれぞれ何本もあった他、色鮮やかなカンナやコスモスの花がたくさん咲いていたという記憶がある。前庭では各国の外交官を招きガーデンパーティーが開催されることが予定されており、実際そうだった。

家の前の庭と道路との間には、道と平行して川幅二メートル、土手の高さも二メートルほどの広がりがある小川が流れており、水位は通常は十センチ程度であったがモンスーンの季節には濁流となつてあふれだすことがあった。車が入りやすのために、二本のコンクリの橋がかけていた。車はこの橋を渡り前庭の横を通り玄関前の庇の下で止まる。車庫は使用人の長屋の横にある。

家には専属のコック（調理人）、お手伝い（ナニー）とその娘チュボー（妹と同じ歳であった）、運転手、庭番後にはガードマンもいて、彼らは皆裏の長屋に住んでいた。車は当初黒のフォード、ボンネットが左右両側に開き、ウインカーも左右から飛び出して来る今やクラシックカーとなつてしまったものだ。後に真っ赤なベンツが届いたが、これは帰国する外交官が処分にこまつて父が買い取ったものであったとのことであった。

第五章 幼稚園

引越してから間もない頃、私は現地の幼稚園に通っていた。ビルマ人の経営するこの幼稚園での生活はあまり記



【写真：買い取ったベンツ】

憶にない。覚えているのは、六畳二間ほどの部屋がトイレとなっており、そこに大小使用のおまるが十数個置いてあったこと、担任の先生が細面の若い美人であったこと、また、彼女が父の前で私の頬を軽くつねったこと位であろう。頬をつねるのは、かわいい子供だという意味で、日本なら頭をなでることに相当するのかもしれない。私にとっては、痛いだけいい迷惑であった。

第六章 小学校（インターナショナルスクール）

その後、空席が出来たため移ったインターナショナル

スクールは、さすがに、近代的な学校であった。子供達は皆、運転手付きの車に乗り、ビルマ式のバッグ（その後二十年もたつてから日本で突如そうしたバッグが流行し、ヒッピーなどが肩から掛けていた）に弁当と水筒を入れ、学校に通った。

学校にはいつも運転手が送り迎えをしてくれた。フォード車の皮のシートの独特の匂いは、私にとって今でも車そのものの匂いとなっている。

匂いについては他にも思い出されるものがある。わが家に落ち着く前のステーションホテルのハムエッグの匂いはホテルの匂いとして、また、わが家に塗り替え用に置いてあったペンキのシンナーの匂いも我が家の匂いとして私の中に残っている。

学校友達で良く遊んだのは、アメリカ公使の息子トニーであった。彼の誕生パーティーにクラスの仲間と自宅に招待されたが、父親がほんものの仔馬をプレゼントしてくれ、子供達が公使邸の広大な庭を順番に載せて貰ったことも懐かしい。

トニーの家には何度も遊びに行った。彼が持っていたプラスチック製の騎兵隊やインディアン、そして組み立て式の砦、これで二人は一日中退屈することなく遊ぶことが出来た。彼がアメリカに帰国する際に、騎兵隊と砦のセットを買わないかと持ちかけられ、私は母に頼んでお金を出して貰い、それらは長い間私の宝物となつてい

た。

トニーはまた、髪を横わけにするのに、櫛を水につけて髪を寝かせるという業を鏡の前で実演、私はなぜか、これが妙に印象に残り、現在でも自分の髪の毛が立つと、髪に水を付けて横わけにすることを実践している。

学校の中での思い出は意外と少ない。比較的小となしい、目立たない子供であったのであろう。数少ない思い出を拾い出してみる。一つは髪の毛を横分けにするに当たり、頭にヘアピンを付けて学校に行ったところ、階段の踊り場で上級生に馬鹿にされ、慌ててヘアピンを外したこと。二つ目は、何かの理由で行けなかった友達達の誕生日のお祝いのプレゼントを、翌日学校に持って行った時のことだ。ゼンマイで動く飛行機を校庭の砂場で渡そうとしたが、一緒に遊んでいたところ砂でゼンマイが動かなくなってしまった。私は知らない振りをしてしまったが、翌日お返しにプラモデルを買った。なんとなくばつの悪い思い出であった。三つ目は、授業中の風景で、自分が船の絵を良く描いていたこと、三ヶ月型の船に煙突を描き、煙突に目と口を描く。周囲に波とかめめを模様様に描き込むという単純なものだが、この絵は今でも孫に描いて見せている。四つ目は母親達が集って、なんらかの行事があった時に提供された大きなアップルパイのおいしかったことだろうか。

そんなことで学校の授業の内容はほとんど何も覚えて

いない。言葉が出来なかったからだろうか。その後、日本に帰ってから、しばらく宿題が出ていることも気付かないマイベースな子供に育った素地はこの頃のものなのかと思ったりもする。とは言え、学校の外では、アメリカ人、イギリス人、ビルマ人、そしてインド人など、どこの国の子供とも楽しく遊んでいたように思う。私はどちらかというと、せせこましい日本人の子供達よりもおおらかな外国の子供達の方が好きだったような気がする。日本人同士はお互いに何とはなしに、心の中が見えってしまうため、うっとうしく感じたのかもしれない。



【写真：誕生日のガーデンパーティー】

第七章 魚釣り

ホテルから邸宅への引越しかからまもなく、新聞紙を袋にした黒い釣り針四、五本を父から渡された。これが、その後のビルマでの三年間の生活に日々潤いを与えるもつとも大きな宝物となった。

父はなぜ、わざわざ釣り針を買って来たのだらうか。ある日、横浜に住む当時七十八歳になった父に電話で確かめた。家の前を流れる小川と、車で遊びに行ける距離にあるインヤミヤン湖を見て、自分の少年時代の、故郷日坂での魚釣りを思い出したのだという。日坂には田んぼで活用するためでもあろう、小さな川がいくつも流れており、そこで「はや」（コイ科の小さな美しい魚）や「フナ」、時には「ウナギ」も釣れた。

ビルマの我が家の前の川釣りは六歳の私の興味を強く引き付けた。釣道具の調達は簡単で、庭番が裏の竹藪か



【写真：門の前を流れる川で子供たちの魚釣り】

ら切取って来てくれる竹竿に、母から貰った糸を結び、その先に釣り針を通せば完成だ。餌は、庭のカンナの花の根本に置かれた肥料用の枯草を少し掘ればミミズがいくらでもいる。これを空き缶に入れておけば完了だ。

釣りは、だいたい道路と我が家をつなぐ二つの橋の上で行う。学校から帰ればこれが日課となる。水深は十センチ足らずであり、小魚は上から良く見えるので、そつと糸を垂らすと結構釣れる。これをバケツに放り込めれば良い。時に大きめの魚（ナマズもいた）がいるが、彼ら

は用心深く川の両側に生えている草の隙間から顔をのぞかせる。これ待ち構えてそつと糸を下ろして魚が用心を解くまで待つ。顔がゆっくり草の間から出て来るとしめたものである。少年にとってはとても楽しい冒険であった。

私の釣り仲間、道を隔てたところにあるトーマン（あるいはニチメンか）の單身寮のインド人コックの子供達三人の兄弟であった。一人は私より一、二歳年上、あとの二人は、その兄を追いかけて遊んでいる年下の子供達だ。私とこの子供たちの間は片言のビルマ語で会話が成立した。性格の良い明るい三兄弟であったと記憶している。

魚の名前は、めつたに釣れないナマズ以外はわからないが、たいがい長さ五センチから十センチ位のもので、日本にもいくらでもいそうな川魚である。めだかもたくさんいた。めだかは釣り針で釣るには小さすぎたが、時に釣り針にその腹を引っ掛けて釣り上げた。ごくまれに、熱帯魚のような三角形をしたカラフルな魚もいた。このタイプの魚は釣り上げてバケツに入れるとすぐに死んでしまった。

釣りは、だいたい道路と我が家をつなぐ二つの橋の上で行う。学校から帰ればこれが日課となる。水深は十センチ足らずであり、小魚は上から良く見えるので、そつと糸を垂らすと結構釣れる。これをバケツに放り込めれば良い。時に大きめの魚（ナマズもいた）がいるが、彼らとに何か神秘的なものを感じたのだろうか。

私は、この井戸にも魅力を感じ、羽をむしった蝶々の胴体を餌にして、ここで大物を釣り上げようと狙ったことがあった。しかし、誰から言われた訳でもないが、ここでは釣ってはいけないという気分が自分の中にもあり、一人の時に釣り糸を垂れたものの途中で止めてしまった。変なことを覚えているものだ。

子供達は、庭番から家の前の小川にひと工夫を施す知恵も授かった。川の両岸の土をわずかにけずり川幅を少し狭める。そしてそこに竹で編んだざるを上流に向けて置き、ざると流れる水の間を土と草でふさぐという業である。ざるの上流十メートルほどのところから、子供達4人が木の切れ端を叩いて魚を追う。水がわずかににぎり、にこった水はざるの上を流れ、小魚はざるに流れ込む。ざるを持ち上げ、飛び跳ねる小魚を見て子供たちの胸は躍ったものだ。

家には洋式の風呂場が四つあることは書いたが、台所の横のトイレとしてのみ使われていた風呂場の浴槽をしばらく私の釣って来た魚の水槽としてしまった。魚はやつかいなことに、夜中に飛び跳ねる。朝になると何匹かは必ず床に横たわっており、母の反対にもあい、水槽として使用するアイディアはいっしょか消えてしまった。

この風呂場は台所の隣にあったことから、生きたまま貰って来たガチョウを終日監禁するのにも使用した。翌

日トーマンのコックがこれをさばいてカレーを作ってくれた。非常においしかったと記憶している。ちなみに、鶏は、二、三羽纏めて生きたまま足を縛ったものをマーケットで購入する。まだ、マーケットには冷蔵庫がない時代だ。そのため、台所ではコックは生きた鶏の首を刎ね、羽をむしり料理をしていた。胴体をつかみ、切られた首から出てくる血を容器に移し、コックがそれをコック一家の料理に使っていたのが印象的であった。血を出し切った鶏は暫く台所のコンクリの上を走り回ることが出来た。冷蔵庫は家には既にあったものの、マーケットにはまだ無い時代ならではの話である。暑い国のご多分にもれず、台所にはゴキブリがずいぶん出た。暑い国のご多分でも時々深夜にコックや私の父母が集まり、パッと明かりを付けてごそごそと出て来るごきぶりを新聞紙で退治していたと後に聞いた。

モンスーンの季節になると、家の前の小川が氾濫するが、増水の過程で茶色くなった川を相手に、家の橋の上から釣り糸を垂れる。この時は川の中の様子は全くわからないが、こういう時でも魚が釣れることがある。茶色く濁った水の中から銀色のうろこが跳ねだして来るのを見ているのは愉快でもあり、神秘的でもあった。

この季節、増水した川の水が時として、わが家の庭を水浸しにし、やがて庭から数十センチ高い家の中まで入りこむことがあった。こうした洪水の後には、庭の低い

部分に水たまりが出現する。洪水で流されて来た魚達とオタマジヤクシが同居することになる。家の外廊下は網戸と鉄格子の組み合わせで外と仕切られているが、その鉄格子の隙間から、庭の水たまりに向かって釣り糸を垂れると、そこでも魚が釣れた。そんな愉快な、釣り三昧のビルマでの生活であった。

第八章 どうぼう事件

我が家は一度どうぼうに入れたことがあった。私や妹は全く気付かなかったのは幸いであった。強盗は、家の錠前を大きなペンチのようなもので壊し、寝室にまで侵入し時計やペンなどを奪っていったようだ。父母は途中で気が付いたが動かず寝たふりをしていたという。どうぼうが去った頃裏の長屋に住む庭番や運転手に部屋窓から声をかけて安全を確認したようだった。翌日からナニの夫がガードマンとなって夜間の見回りを行うこととなった。

第九章 その他のわが家の風景

私は庭番に教わって、庭のマングの木になっている実がまだ固く緑色の時、これをもぎ取って食べた。実の中は白くすっぱい。これに塩を掛けるとおいしかった。父はマングの木にかぶれるため、木に近づくことはなかったが、私はなぜか平気であった。

アイスクャンディ屋や風船売りも良く前の道を通り過ぎて行く。薪に乗せた牛車も通っていた。これは台所の必需品であった。お風呂はどうやって沸かしていたのかと思う。

火祭りや水祭りも思い出深い。火祭りは壮大なライトアップだ。その日には町中の電灯に色のついたセロファンを巻き付け、特にインヤミヤン湖の夜景は美しかった。点灯に先立つ昼間、爆竹を買い、たばになっている爆竹を一本ずつに分ける。その一本ずつを笹の葉の上に乗せ、導火線に火を付けて家の前の川に流すと、流れの中でドカンと（と子供には聞こえた）爆発する。紙を燃って作っている導火線に想定外のスピードで火が走り、目の前で発火することがたまにある。絶えず、その可能性を計算に入れて川に流すのもスリルに満ちていた。

水祭りも楽しかった。この日は誰に水をかけても良いという無礼講の日だ。消防自動車の放水で何人か死んだという物騒な話もお手伝いの貞子さんから聞いた。子供たちは、自転車の空気入れを持ち出し、洗面器に入れた水を注入し、家の前の道路を通る人たちに水を掛けた。道路には簡易バリケードも設けられ車を止めて、水をバケツ一杯放り込む若者たちもいた。

そんなある時、知らないビルマ人の年長の子供達三、四人が突然やって来て、我々の洗面器の水で彼らの水鉄砲を満たしていた。私は腹が立って、彼らに石ころを投

モンキーバナナ（バナナの実が小ぶりなもの）の木は十本ほどあった。季節になると、庭番が大きな房を切り取って幾つも台所に持ってきて来た。バナナの実には種が入っているものがあり、現在日本で食べている大きく立派なものとは異なるがおいしかった。お祭りになると、現地の人たちは焼きバナナを皆で食べるのも覚えている。バナナの葉っぱの上に乘せた焼きバナナをあちらこちらで御馳走になった。



【写真：庭のモンキーバナナ】

家の前の幅三メートル程度の一本道の両側には大きな邸宅が点在している。その道を様々な行商人が通った。竿を肩に担ぎ、その前後に大きな鍋を吊るして、ごった煮のような食べ物を売っている人が通ると、わが家の使用人も良く呼び止めていた。私は子供なのでいつでもどこにでも上がり込むことが出来たが、彼らの家の土間でこれを食べさせて貰ったが、あまり口に合わなかった。



【写真：水祭りで車を止めて水掛け】

げつけて走って家に駆けこもうとしたが、運悪く、それが私の仲間のインド人の子供に当たってしまった。母が彼を車に乗せ病院に駆け込み、事なきを得たが、危険かつ申し訳ないことをした。

前の誕生プレゼントの砂場での事や、この石を投げた事件のことなど、自分自身もせこましい子供であったと思ひ、その後そういう事のないように戒めている。

風上げも良くやった。近所のビルマ人の年長の子供たちは、すりつぶしたガラスの粉に糊をまぜ、これにたこ糸を通す。そうすると、喧嘩の出来る糸が出来る。他の

子供たちのたこ糸と接触させ、飛んでいる風同士の喧嘩となる。負けた風は切れた糸とともにゆらゆらと落ちて行く。これは謂わば公認された勝負であって、他人同士であつても怒られることではなかった。

一度、大きな和風をトーメンの単身赴任者の人が作ってくれた。ところが大きすぎて、せつかく高く上がったところで、糸が切れてしまい飛んで行ってしまった。探したが見つからず、あきらめていた頃、あるビルマ人のお母さんと思われる人が、子供が隠していたと届けてくれたということもあつた。感謝である。

我が家には猫も随分いた。餌も与えていたので飼っていたといつても良いのだが、広い庭で勝手に遊び、餌の時間になると集まって来た。十匹くらいはいたと思うが、歳を取ると行方不明になると猫の習性は本当のようであり、親猫がいなくなったことも覚えていた。子猫が隣の犬にかまれて死んだこともあり、私はその犬に向けて何度か石を投げつけた記憶があるが、当たったかどうかは定かでない。

猫はその後日本に帰ってからも飼う機会があり、縁があつたが、犬には縁がなかった。犬は欲しかったが、どこから貰おうと段取りをしていると、前日にその子犬が死んでしまつたり、別のケースでは先約があつたりした。子犬が産まれたばかりのビルマ人の家に子犬を見に行つて母犬に咬まれたこともあつた。父が狂犬病ではな

いかと心配して夜のパーティー前に、慌てて私を病院に連れていったのを思い出す。なぜか、盛装をしていた父の病院での姿が目に残る。

家の屋根は軒先に、所々小鳥達に都合の良い隙間が空いており、そこに雀が巣を作っていた。その一羽が家の中に飛び込んで来たことがある。すぐさまナニと部屋のを窓を閉切り、箒で雀を追い回し捕まえた後、足にひもを巻き付けて、再び家の中で放して遊んでいたところ、ビルマ人の運転手が、これを見つけて、ナニに怒つた。仏教徒にあるまじき行為だという趣旨のことであつたと思う。ナニは私に話をし、私たちは雀を解放した。

庭番は時々玉を飛ばすパチンコを作ってくれた。我が家にいくらかもある木の枝からY字になっている部分を切り取り、これに買つて来た太めのゴムを当て、この太めのゴムとY字の二つの先をそれぞれ細いゴムでグルグル巻きにして固定すれば完成だ。玉は、裏庭の粘土質の土を私が丸めて乾燥させた。これで雀や、木になっている果物、そして川の魚などを狙つて楽しんだ。あまり成果はなかつたように思うが、雀に命中しなかつたのは幸いであつた。

第十章 大使館のこと

ビルマ時代は私の生涯で、もつともおもちゃを持っていた時代でもあつた。どういうシステムになっていたの

かと今でも思うが、多分大使館の生活管理の一環なのであろう。段ボール二箱にぎつしり詰まつたおもちゃが日本から送られて来る。父が申し込みをしていたのであろう。そういうものと、現地のマーケットで購入出来るプラモデル等のおもちゃ等で不足するものは何もなかった。たばこの箱で作つためんこや、ビー玉もたくさん持っていた。

大使館では思い出に残る映画がある。怪獣映画「ゴジラ」(一九五四年末に第一作が公開されている)と「ビルマの豎琴」(市川崑監督により一九五六年映画化)の二本立てを見たこと、また美智子様のご成婚(一九五九年四月十日)のニュース映画を見たことである。大使館では日本人会の人々にこうしたものを適時公開していたのであろう。

第十一章 帰国時

帰国時、父は貨客船を選択し、ラングーンからシンガポールまでの行程を船旅とした。アンゴラ号というその貨客船の一等船室は既に満杯であつたらしく、我々は二等船室に入ることになったが、食事その他の待遇は一等船室のものであつた。父が何かの交渉をしたのであろう。一面泥色の海、その岸壁から船が静かに港を離れて行く。その時から六十年近くを経てわかつたと感じることがある。父は海軍の法務官としてジャワ島に勤務していた。

日本からジャワまでの往復、敗戦による戦犯騒動での再度のジャワ行き等はすべて船舶によるものである。小説「ビルマの豎琴」の中から部隊が日本に引き上げる船の様子を引用しよう。「夜になつてから、気がついてみると、船はしらないうちにもう海の沖に出ていました。それから3日経ちました。その日、甲板に出たときには、船は大きな海峡をとつていました。左がマレー半島、右がスマトラでした。その南国のうつくしさに、われわれはうっとりしました」又、「やがて夜になると、このインド洋の海面に無数の夜光虫が光りだしました。掌ほどもある大きな燐のいろの塊りが、浪のあいだからあらわれて、すーと走って、夜目にも見える潮の泡の下に消えます。そういう夜光虫の群れが船べりに張りつくようになります。」などの描写である。父は一人これらの情景をのみしめてこの貨客船の道中に何かを心に刻み込もうとしていたのであろう。後の父の俳句にしきりに夜光虫が現れるのは偶然だったのだろうか。もう聞くことはできない。

ちなみに父の晩年の俳句には、「投錨の鎖の落とす夜光虫」「夜光虫しだいに遠く港の灯」「夜光虫後る甲板に煙草吸う」などがある。

さて、シンガポールからは飛行機で香港経由で帰国した。香港ではビクトリアピークに向かう車の中で私は車酔いをしてこまつたことが蘇る。景色どころではなかつ

た。こうして日本に戻った。

第十二章 最後に

後に、「王子と乞食」の童話を想起し、海外での自分の生活を「王子」、日本での生活を「乞食」（もちろんひどい生活ではないが）と二人対比してみたことがある。そんな「王子」の生活を再びイギリスでも経験することになる。日本がまだ物質的に貧しかった時代のことである。

以上

(二) 小説「ビルマの豎琴」を読んで

一九九七年七月（四十六歳）

二〇二五年一月九日修正&追記

「ビルマの豎琴」は、昭和二十二年から二十三年にかけて、童話雑誌「赤とんぼ」に連載された子供向けの読み物です。音楽学校を出たばかりの隊長と水島上等兵らが、音楽を通して第二次大戦のビルマでの戦争を乗り切り、また、後には水島上等兵が戦死者の霊を弔う為に、一人

シナ人とは共通の歌がないのです。共通の歌は、我々が子供の頃から歌っていて、自分の国の歌だと思っているが、実は外国の歌であるものでなくてはなりません。そうすると、相手はイギリス兵でなくてはならない。とすると、場所はビルマのほかにない。実はこういう事情から舞台がビルマになりました。」（以下省略）

ビルマについては、幼少年期に父の赴任先であった首都ラングーン（現在ヤンゴン）で生活を送っており、現地の火祭りや水祭り、喧嘩風の飛ばしあい、毎日の魚釣り等様々な思い出があります。また、当時怪獣映画「ゴジラ」と共に2本立てで日本大使館の大広間で鑑賞した市川崑監督の白黒映画「ビルマの豎琴」が記憶の奥に、消えることなく残っており、これが四十年の年月を越えて、ある種吸引力を持って、私をこの小説の購入に引きずり込んだのでしょう。

それにしても、この竹山道雄氏本人の解説に驚き、いったんは興ざめたものの、その構想力に改めて感心しました。戦争で亡くなった多くの人々への謂わば鎮魂歌を書き記す為の設定として、みんなの知っている文部省唱歌と、これらの歌の典故となったイギリス（含アイルランド及びスコットランド）民謡の体現者としてのイギリス兵、また、それだからビルマでなくてはならなかったという場所の設定、この見事な取り合わせは、作者にとつ

僧侶としてビルマに残るというストーリーです。二度にわたり映画化もされており、多くの日本人が何らかの形で知っている小説の一つです。

單身赴任の生活の中で、本屋でこの本に目が留まり、幼少年期に三年ほど過ごしたところのあるビルマ（現ミャンマー）を思い出しながら読んで見ました。私が購入した新潮文庫の巻末には作者竹山道雄氏本人の解説が掲載されており、これが私の興味を一層かき立てました。その一部を抜粋します。

解説の抜粋

「最初には、場所はシナの奥地のある「県城」というつもりでした。それは、戦争中に新聞で、ある写真を見て、印象が深かったからです。その写真は、城の中の楼閣で、焼け崩れた厚い壁にさまざまな落書きが残っているところでしたが、あたりには木も芽をふき、草も茂って、いかにも凄愴たるありさまでした。ここに日本兵が立てこもって敵に包囲されて苦しい数週間を過ごしたが、ついに切り抜けたということでした。

ここにこもっている日本兵が合唱をしていると、開んでいる敵兵もそれにつられて合唱をはじめ、ついに戦いはなくてすんだ。こうした筋立てを考えました。

しかし、この「合唱による和解」という筋立ては、場所がシナではどうもうまくゆきませんでした。日本人と

ては創作の為の材料であった訳ですが、私にとっては幼少年時代のビルマでの生活、その後の少年時代のイギリスでの生活、そして、これらの時期をとおして我が家の中で父を中心に同じように良く歌われたこれらの歌とが重なり合って、なつかしい一時代を思い出させるものとなりました。

ちなみに父は大学卒業と同時に招集を受け、朝鮮、インドネシアなどで海軍法務官として第二次世界大戦に参加しており、戦後C級戦犯として巣鴨プリズンからシンガポールの刑務所に、さらにインドネシアの刑務所にとたらい回しに送られ、裁判では不起訴処分となったという体験をしました。多くの若い日本将兵が敗戦の故に現地で死刑にあったこと、そして父が帰国後に、その方達の遺族に当時の状況を伝えるに行ったことを一度だけ聴かされたことがあります。

さて、こうした感慨とは別に、もう一つ頭をよぎるものがありました。私にとって、海外での七、八年に及ぶ幼少年期の生活は楽しいものではありましたが、同時にあちらこちらに心の断片を置き去りにして来てしまったという寂しさが付きまとうものでした。

幸いなことに、中学高学年以降は、日本で過ごしており、友人にも恵まれているのですが、それ以前の記憶を分かち合える友人は結局「思い出」の中にしかないのです。幼少年期を海外で共に過ごした時の人たちを探し

出すことは今となつては困難であり、よしんば探し出せたとしても、その邂逅は連続する時の流れの中で、断層のように不連続な形でしか繋がらない地層に埋もれてしまった化石の発掘のようにしか思えないのではないかな。そんな想いがあります。

この欠落した時間と空間を埋める為の、自分自身の幼少年期に対する思い出の碑が欲しい。この小説は、その点についても何か私にヒントを与えてくれたのだと思います。即ち、自らの幼少年期を具体化する素材を自らの手でつなぎ合わせ、紡いで行けば良いのではないかな、そんな試みをゆつくりとあたためて行きたいものです。

以上

後日談

上記は大阪での単身赴任生活の中で随筆講座に通っていた時の文章を一部修正したものです。その後の話ですが、二〇二四年になり、七十三歳になった私は亡き父の俳句の整理にいそしみました。その過程で父の軍隊時代のことをずいぶんと知ることになりました。一部は父の手記によるもの、一部は「柴田司令長官の手記」、「柴田彌一郎海軍中将覚書」（川合三代男）、「元二南遣隊法務大尉杉浦氏との会見記」などによるものです。これらをとおして、過酷な戦中、戦後の一時期の父の実像がかなり明瞭に浮かび上がってきました。また、この二〇二四年に何かの偶然で、家内の親戚から「ビルマの竖琴」の

初版本を頂戴しました。父の戦中戦後の生活をより深く知った上でこの「ビルマの竖琴」を再度読み直してみました。そうすると、どうでしょう。以前は読み飛ばしていたところをいくつも再発見することが出来ました。そのことに少し触れてみます。

「ビルマの竖琴」は実は終戦の三日後の事件がその発端だったということが書かれています。ビルマのジャングルの中で終戦を知らずにシヤム国に向かって逃げていた日本の部隊がイギリス軍に囲まれます。「塙生の宿」や「庭の千草」「夕空晴れて（故郷の空）」などイギリス民謡を日本軍が歌い、それを聴いた英国軍が同じ歌を英語で歌い返します。なぜこんなことが可能だったのかといえ、戦争は法的には終了していたからなのです。他の部隊はまだ終戦を知らず、あるいは潔しとせず戦い続けています。そしてさらに犠牲者を増やして行くのです。

幸いにも、この部隊は敗戦を認めたのでしよう。「我々は武器を捨てました」とあり、収容所に送られます。「それからは、心の中は空になっているけれども体だけはむやみにいそがしい。武器や物品の整理、その引き渡し、運搬、いろいろな報告や取り調べ、食料の調達、そうしたことに追いかけて、ものを考える暇はありませんでした」と続く。ここに、父が所属した第二南遣隊とインドネシアでインドネシア軍、のちにはオランダ軍やオーストラリア軍との間でなされた終戦処理と全く同

じことが窺える訳です。「われわれの隊はイギリス軍の指揮のままに、山を下って平野に出、それから舟でシタン河を下り、それから汽車、それからトラックという風に運ばれて、ついにムドンの町につきました。そうして、ここの捕虜収容所に入って暮らすことになりました。……また、こうした収容所がいくつも点々となら

んでいて、それぞれ捕虜の一隊が入れられてしまいました。が、これらの別の隊同士で連絡をとることも、かたく禁ぜられていました。……このような規律はやかましいけれども、それにふれさえしなければ、取り扱いは寛大でした。」との記載はインドネシアでも似たり寄ったりだったようで、父のインドネシアでの収容生活の中では有名な藤山一郎歌手が収容所の中で時々歌うと看守がコーヒーやたばこをくれたとの逸話もあります。ちなみに父は英語とにわたりの飼いを教えていたと。

そして、帰国の時の船内から見るマレー半島やスマトラの描写はまさに、父がビルマでの外交官生活ののちに帰国する際に、インドネシアでの収容生活からの帰国、そして再び戦犯容疑でインドネシアに送られての監獄生活、そしてその後の解放を思い出してであろう、ビルマからインドネシアを経由してシンガポールまでの船旅を選択したことを想起させます。

ですから、この本は実に平易な言葉で綴られています。が、実際の戦争を体験した多くの人々が身に置き換

えて読み、そして映画化されたこのストーリーにも見入ったものと思えました。この年齢になってこのような感慨に浸ることがあろうとは夢にも思っていなかったと記載して終わりにします。

以上

近藤勇プロジェクト（八）最終話

匠 克 仁

8 アリバイトリック解説

「それでは、アリバイクイズにトリックを応募してくれた作品を発表します」

東京都北区区民センターのホール壇上にいた吉村勇が会場の人に向かって話しかけた。

「この会場には事前にインターネットで応募していただいた方で、来場できる方にも来ていただいています。また、全国の会場からも中継でスクリーンに登場していただく予定です」

壇上の三つのスクリーンはさらにそれぞれ分割されて、複数の会場が同時に映し出された。

「順番ですが、最初の人が完璧なトリックの解明をしてしまうと、他の人が発表しづらくなります。そこで正解

に近い人の発表は最後にさせていただきます」

初めの内は、京都市や会津若松市などから複数の回答が発表されたのであるが、いずれも条件を満たしていないものであった。

三つの内の中央のスクリーンが一つの映像に変わった。近藤勇の胸像が映されていた。

「次は三鷹市龍源寺の会場から中継です」

吉村が男性の名前を告げると、中年の男性が現れた。「私が最後の回答者でないということは間違っているということですね」

三鷹市の会場から笑い声がもれるが、スクリーン越しにも北区のホールにも伝わった。

「私が考えたトリックと別解になるかもしれません」

吉村はモニターを通して答えた。

「現場での作業時間は無視して、移動時間だけで考えればいいですね」

「その通りです。現実的な設定ではありませんが、簡略化したクイズとお考え下さい」

吉村は一息おいて続ける。

「それでは、どのようなアリバイ工作进行了かと考えていますか」

「私は画像のトリックだと思いました」

男性は答えた。

「画像のどこにトリックがありますか」

吉村が感心したように質問した。

「近藤勇の胸像です。京都市壬生寺と三鷹市龍源寺の二つの胸像はそっくりです。胸像の画像は壬生寺のものでなく、龍源寺のものだと思います」

会場のスクリーンには壬生寺と龍源寺と法蔵寺の三つの近藤勇の胸像が映し出された。台座は写さず胸像のみである。

胸像三体は古いか新しいの違いがあるが、三体とも同じ形をしていた。龍源寺と法蔵寺の胸像はいずれも壬生寺の胸像のレプリカだからである。

会場でも感心したような声が挙がった。

「吉村さんは事件の前日かその前に壬生寺にいたと思います。しかし、その後、京都から三鷹まで移動していたのです。そして、午前六時には龍源寺にいました。午前

六時に胸像と一緒に写っている画像は壬生寺でなく、龍源寺だったのです」

男性の解説に合わせて、吉村が胸像の前で写った画像と龍源寺の胸像と壬生寺の胸像を交互にスクリーンに映した。

「実際に壬生寺から私が移動する動画がありますが」

「それは事前に撮影したものです。龍源寺にいるにも関わらず、その後に壬生寺から移動する動画を着けて合成して錯覚させたのです」

中年の男性はここで一息ついた。

「龍源寺からだとは一時間で七時に北区の寿徳寺の墓まで車で行けます。人形の首を外して、赤い布を置きます」

北区の会場では右側のスクリーンが日本地図に切り替わったので、吉村がポインタで該当の場所を指した。

「人形を持って、龍源寺に戻ります。龍源寺で胴体の部分を置きます。首を持って岡崎市の法蔵寺に向かいます。四時間後の正午には法蔵寺に到着して、首を置きます。それから、六時間後の午後六時には会津若松市の天寧寺に到着できます」

男性は一気に説明をした。

「素晴らしい解答です。しかし、それでは、首を外した時刻は午前七時になります」

吉村が反論した。

「布には時間を印刷しているだけなので、関係ないと思

います」

「大前提として首が外された時間が、午前九時という設定なんです」

吉村が説明する。

「これが人形でなく人である場合は、検死による死亡推定時刻ということになります。ですから、この時刻は動かせません」

スクリーンに三つの胸像が並べて映されたが、先ほどと違い、台座の部分も映していた。

「私自身も最初は近藤勇の胸像が同じことをトリックに使えないかと考えていました。そのために近藤勇の胸像の台座を写さなかったのです」

胸像自体は同じでも台座は違っていた。

「ということは、私はまんまと引っかかったということですね」

男性は愉快そうに笑った。

「いいえ。画像トリックを思いついた人は良い着想ということで、もともと懸賞品を用意しています」

三鷹市の会場から参加中の女性から意見があるという情報が吉村に入った。

吉村はその女性にコメントを求めた。

「私も龍源寺がスタートと考えました。龍源寺から北区の寿徳寺に行って、首を外さず、人形をそのまま龍源寺に持ち帰ればいいんです」

女性は説明した。

「北区の布はどうするのですか」

吉村はスクリーン越しに質問した。

「後でまた持つて行けば大丈夫です。龍源寺では一時間待機して、午前九時に首を外して胴体を残します。布と首を持って岡崎市の法蔵寺に向かいます。午後一時に法蔵寺で首を置き、三時間後の午後四時に北区の寿徳寺に戻って布を置くのです。北区からだとい津若松の天寧寺までは……」

そう言った後で彼女は黙り込んだ。

「そこまでは考えたのですが……」

「天寧寺に着くのは、午後八時になりますね。午前九時というのは絶対に動かせない条件です。しかし、着眼点が良いかったです。赤い布は運ぶことができます。もしも殺人事件でしたら、血液を運んで犯行現場を偽装したのと同じ効果を考えました。」

実行現場が北区でなく、他の場所としたこと、それと後で北区に布を返したこと、このことを私の考えたトリックにも使っています。同じ考え方を使って、真相に近づいてください」

「寿徳寺会場の方が発言を求めています」

スタッフの声がして、正面のスクリーンに寿徳寺の近藤勇の墓の映像が映し出された。二十代と思われる男性が現れた。

「今の説明ですけど、三鷹市と北区の往復はしなくてよいと思います」

男性が質問した。

「それは、なぜですか」

吉村が疑問を返す。

「人形を事前に北区から三鷹市に移して置けば、往復の二時間は短縮できます。二時間短縮できれば、ゴールも午後八時から午後六時になります」

「九時より前の時間をいくら短縮しても、龍源寺で三時間待機するだけです」

「言われてみると、その通りですが。ここ寿徳寺はイベント準備で人形の周りを囲んで見えないようにしてました。これは事前に人形を移動させていると思いました」

「そうですね。実は人形を事前に移すということは、私のトリックで使っています。今の意見も良いヒントになります」

「事前に三鷹市に人形を運んでおいて、京都から直接、三鷹市に行けばいいんじゃないでしょうか。画像トリックを使わないで済みますし」

男性は意見を付け加えた。

「でも、それでは京都市壬生寺から三鷹市龍源寺には三時間三十分かかるという設定ですから、実行の時間が午前九時半になってしまいます」

吉村が答えた後で、一呼吸おいて続ける。

「今のアイデアが重要なヒントになっています。一つ目は人形の首を外す実行の現場が違うこと、二つめは赤い布は後で北区に戻されたこと、三つ目は人形が事前に移動されていたこと。実行現場と事前の人形の移動先が三鷹市の龍源寺でなく……」

吉村がヒントを言うと、ホール内から分かったという声が挙がった。

「龍源寺でなく、ここ法蔵寺ですね。京都に近いし……今すぐ上手く説明はできませんが」

愛知県岡崎市の会場に切り替えられ、女性が発言した。「その通りです。ほぼ正解までたどり着いていますので、良い解答例を紹介します。東京都内に住んでいる高校生です。今回は来場できないということでした。電子メールで受け付けたものをスクリーンに映します」

スクリーンに横書きで表示された。

人形の首を外した現場

× 北区 ○ 岡崎市

吉村さんの偽りの行動

京都6時→北区9時(首を外す)→三鷹10時→岡崎14時→会津若松20時

吉村さんの実際の行動

京都6時↓岡崎8時(9時迄待つて首を外す)↓三鷹13時↓北区14時↓会津若松18時

事前に宝蔵寺近くに人形を運んでいたという前提です。

「シンプルですが、きちんと正しい答えになっています。ただ、この文面だけでは少し分かりにくいですね」別の人の回答した画面に替わった。

「他にも正解が複数ありました。その中でこの会場に来て下さった方がいますので、その方に詳しく解説してもらいましょう」

三十代くらいのスーツとネクタイ姿の男性が立ち上がり、壇上に登った。いかにもプレゼンテーションに慣れているという雰囲気である。

「解説用のアニメ画像をこちらで作成しましたので、それを使って解説をしてもらいます」

吉村が言うと、男性が話し始める。

「吉村さんは京都市壬生寺に行く前に北区寿徳寺から岡崎市宝蔵寺の近くへ人形を運んでいました」

スクリーンには「4月24日」の日付が表示され、日本地図の北区に表示された近藤勇の人形の絵が岡崎市に直線移動した。

日付が「4月25日」に変わった。00…00とあった時刻表示が高速で進み、06…00で止まった。

地図の京都の場所に吉村を表すアニメ画像が現れた。といっても吉村は特徴がないので、ゼッケンのように吉村と書いていた。

「壬生寺から宝蔵寺へは二時間で行けます」

時刻表示が06…00から08…00に進むと同時に吉村の画像が京都から岡崎に移動した。

「しかし、ミスリードするために一時間待つて、実行しました」

時刻が09…00を表示すると、人形の首と胴体が離れ、赤い四角形が現れた。

「そして、人形の首を宝蔵寺に置きました」

地図の岡崎に首を置いたまま、吉村の画像と人形の胴体と赤い四角形が三鷹市に異動した。

時刻表示は09…00から13…00に進んでいく。

「吉村さんは赤い布と胴体を持って、車で三鷹市龍源寺に行つて、龍源寺に胴体を置きました」

13…00に地図の三鷹市に人形の胴体を置くと、吉村の画像と赤い四角形だけが北区に移動した。14…00到着。

「その後、北区寿徳寺に赤い布を置いて、会津若松市天寧寺へ向かいました」

地図の北区に赤い四角形を残して、吉村の画像だけが会津若松市に移動。

吉村の画像が会津若松に着くと同時に、時刻が18…

00を表示した。

「良いですね。それでは最初に見せた偽の行程と同じ様なものを修正して、スクリーンに載せますので、それでも比較して確認してください」

吉村が言うと、三面の内の右側のスクリーンに修正前の行程が映し出された。

修正前の行程

壬生寺(京都市)↪寿徳寺(東京都北区)

電車と車 三時間

午前六時発 午前九時着

寿徳寺(東京都北区)↪龍源寺(三鷹市)

車 一時間

午前九時発 午前十時着

龍源寺(三鷹市)↪法蔵寺(岡崎市)

車 四時間

午前十時発 午後二時着

法蔵寺(岡崎市)↪天寧寺(会津若松市)

電車と車 六時間

午後二時発 午後八時着

正面のスクリーンにも修正前の行程があった。最初に行程の右側のスペースに赤字で次の文章が追加

された。

『犯行日以前

寿徳寺(東京都北区)の人形を持ちだす。

法蔵寺(岡崎市)の近辺に人形を隠しておく。』

十秒ほどして一行目の『寿徳寺(東京都北区)』の文字が消え、赤字で『法蔵寺(岡崎市)』が現れた。

次に『電車と車』の次の『三時間』が消え、赤字で『二時間』に変わった。

『午前六時発』はそのままであったが、『午前九時着』が消え、赤字の『午前八時着』となる。

その横にスペースが広がり、次の文章が赤字で追加された。

『二時間待機 午前九時

人形の首を外し、首塚の前に置く。

胴体と布を運ぶ。』

次の『寿徳寺(東京都北区)』も同様(赤字を含め)で『法蔵寺(岡崎市)』に変わった。

『龍源寺(三鷹市)』は変更後も同じ三番目のためそのままである。

『車 一時間』が『車 四時間』に変わった。

『午前九時発』はそのままであったが、『午前十時着』が同様に『午後一時着』となった。

その左にスペースができ、赤字の短文が続く。『胴体を墓の前に置く。』

『龍源寺（三鷹市）』はそのまま、『法蔵寺（岡崎市）』が『寿徳寺（東京都北区）』になり、左に……

『車 一時間

午後一時発 午後二時着
布を墓の前に置く。』

次の『法蔵寺（岡崎市）』が『寿徳寺（東京都北区）』になるが、『天寧寺（会津若松市）』はそのまま。

『電車 四時間

午後二時発 午後六時着』

最後まで修正が終わると、左側のスクリーンに全て黒字で修正後の行程が映された。

正面のスクリーンでは最初に戻り、繰り返し修正する過程が流されている。

左側のスクリーンの内容は次の通り。

修正後の行程

犯行日以前

寿徳寺（東京都北区）の人形を持ちだす。

法蔵寺（岡崎市）の近辺に人形を隠しておく。

壬生寺（京都市）→法蔵寺（岡崎市）

電車と車 二時間

午前六時発 午前八時着
一時間待機 午前九時
人形の首を外し、首塚の前に置く。
胴体と布を運ぶ。

法蔵寺（岡崎市）→龍源寺（三鷹市）
車 四時間

午前九時発 午後一時着
胴体を墓の前に置く。

龍源寺（三鷹市）→寿徳寺（東京都北区）
車 一時間

午後一時発 午後二時着
布を墓の前に置く。

寿徳寺（東京都北区）→天寧寺（会津若松市）

電車 四時間
午後二時発 午後六時着

その後、北区の会場では簡単な質疑応答が行われ、アリバイクイズの解説が終わった。

吉村は近藤勇プロジェクトが成功したと確信して、安堵の息をついた。

全国各地の会場も撤収して、近藤勇まつりは終了した。



人事部長 首切り姫3

トウランドット

解雇自殺？（八）最終話

匠 克 仁

（登場人物）

弓本良香 アサヒ信用保証人事部長

七田光男 アサヒ信用保証総務部平社員

七田夕子 アサヒ信用保証営業部 光男の妻

前田康夫 アサヒ信用保証人事部所属

（時系列）

参考 第一話より

一九九四年四月一日 弓本良香、東西信販入社

二〇〇〇年四月一日 良香、京亜クレジット転職

二〇一八年二月一日 アサヒ信用保証のM&A

二〇一八年三月一日 良香、アサヒ信用保証転籍

二〇一八年三月三十一日 第一回目の大リストラ

二〇二〇年十月三十一日 アサヒ信用保証株主総会

第三話（本編）

二〇一八年七月からの数週間

8 自殺？事故死？それとも……

「七田光男の墜落死は飛び降り自殺でもなく、私を殺そうとして過失で死んだのもありません。光男の死は……」

弓本良香はそこで一度息を吸った。電話の相手の景地刑事はいかにも面倒だという感じで黙り込んでいる。

「光男の死は殺人事件によるものです。そして、犯人は奥さんの七田夕子です」

良香は断言した。

「証拠はあるのですか」

殺人事件や犯人という言葉で、景地もようやく言葉を発した。

「私や光男の服についていたビーズは、七田夕子のネイルのパーツです。それは警察の方でも確認したのですね」

「捜査情報は教えられません」

景地はかたくな態度である。

「確認できたとしても、それだけでは証拠になりません。夫の衣服に妻のネイルの破片が着いていたところで、証拠とは言えません」

「七田夫妻は別居していました。警察でも夕子がいっそのネイルを着けたか調べていると思います。調べれば、事件当日に付着したものと分かるのではないのでしょうか」

「それだけでは……」

景地の言葉を良香は遮るようにして……
「事件には二人の目撃者が居て、光男の転落映像が二台のスマホで撮影されていました。その内の一つはまさに転落する屋上の様子と転落後の屋上が写っています」

景地が黙ったままなので、良香は続ける。

「眼で見ただけではよく分かりませんが、私は人影だと思いました。警察の科学捜査研究所で映像を分析すれば、人物を特定できるのではないのでしょうか」

動画の映像は良香が見ただけでは人間とすら判断できなかった。実際に転落する瞬間の屋上の映像も転落後に屋上に写った映像も影というかノイズのようなものであった。

しかし、動物的な直観力を持つ良香にとっては影のような映像が人間であると感じた。警察で詳細に分析すれば、人間であると感じた。警察で詳細に分析すれば、人間であると感じた。警察で詳細に分析すれば、人間であると感じた。

ば、人間であり、夕子と識別可能ではないかと思ったのである。

まともな推理小説であれば、動物的な直観力で犯人を見つけるのは反則であるかもしれないが……

「目撃者のスマホの映像は再確認できるか検討します。この電話では約束できませんが」

景地は良香の強い態度に押し切られたように答えた。良香は目撃者の撮影映像は警察で保有しているだろうと思っていた。ただ、当初は投身自殺と判断されていたので、詳しく解析はしていなかったと考えていた。

「それに投身自殺と考えていたなら、ビルの上に通じる階段の防犯ビデオも確認していないのではないのでしょうか」

警察は事件前の光男と夕子のLINEでのやり取りを把握している。しかし、その後二人が接触した事実を確認していないと思ったのである。

「ビル内の防犯ビデオは確認済だと言うが……必要であると判断すれば、念のため再確認する」

良香の推理には裏付けが無い。警察が証拠固めをしないと崩れてしまう。

「警察の捜査能力や科学捜査研究所の分析能力を信じていますので、くれぐれもよろしくお願いします」

最後はなにか嫌味な表現をして、良香は電話を切った。それから、三日後……

七田夕子逮捕のニュースが飛び込んできた。

良香は通勤途中のキオスクで新聞を購入した。自宅では日本経済新聞を読んでいたが、他社の社会面にある記事を読みたかったのである。

『同僚の夫を屋上から突き落とした疑い 妻を殺人容疑で逮捕』

そのような見出しであった。

『東京都千代田区のアサヒ信用保証本社ビルで同社社員七田光男さん（27）が転落死した事件で、警視庁捜査一課は8月2日、同社に勤務する妻の七田夕子容疑者（27）を殺人の疑いで逮捕した。』

警視庁によると、七田容疑者は7月5日午後6時ごろ、同ビル屋上で光男さんを突き落として死亡させた疑いがもたれている。光男さんは地上に転落し、搬送先の病院で死亡が確認された。付近にいた同社社員の女性1人が巻き添えになり軽傷を負った。

現場には複数の人が居合わせ、うち2人のスマートフォンに当時の様子が撮影されていた。警視庁はスマートフォン映像や防犯カメラの解析を進め、事件の経緯を調べている。

捜査当初は自殺の可能性も視野に捜査が進められたが、遺留品の状況や証言などから事件性が高いと判断した。関係者によると、光男さんは直前に会社から解雇を通告されていたという。

「そう。あなたが見つけた私の服に付いていたビーズのこと」

前田は依然として事態が把握できない様子であった。

「実は犯人をつきとめたのは私なの。順序立てて話をするわ」

良香は説明を始めた。

「七田光男の死は当初、飛び降り自殺として処理されたけど、私は疑問を感じたの」

「やはり、報道のように最初から夕子さんを疑ったのですか」

「いいえ、そうじゃないの。光男は自殺でなく、私を殺そうとして誤って転落したと思ったの」

良香の物騒な言葉に、前田は眉をしかめて、疑問を口に出す。

「なぜ、そんなことを思ったのですか」

「ボールの位置よ」

良香の言葉に前田は首をかしげた。

「ボールが光男が転落した場所にあった。しかし、そこにあることは不自然よ」

前田は何か思いついた様子であった。

「もし、ボールを屋上に通じる扉の南京錠を壊すためにだけ使ったのであれば、扉の内側に置いたでしょう。しかし、別の目的があったのよ」

「それは……」

2人は同じ会社に勤め、今年1月に結婚したが、最近では別居状態だったとされる。七田夕子容疑者は調べに対し「突き落としている」と容疑を否認している。

現場は繁華街に近いオフィス街で、事件直後、多くの通行人が騒然となったという。』

良香は日本経済新聞と読み比べてみたが、警察のプレス発表をそのまま使用したようで、報道は似たようなものであった。

良香の炎上商法CMで光男の転落死がネット上で話題になっていった。その死が自殺でなく殺人事件であったことでセンセーショナルなニュースとして報道されていた。

良香が出勤すると、部下の前田康夫が既に居て、声を掛けてきた。

「今朝のテレビニュースで七田光男さんの死亡について報道されていましたが……、どうということなんですか、私にはよく分かりませんが」

「そうね。業務開始前だし……それに」

二人とも業務開始定時の一時間前の八時に出勤していた。良香は一瞬どこまで話してよいか考えた。

「事件の解決の証拠はあなたが見つけたので、説明した方がいいわね」

「私が証拠を見つけた……」

前田は不思議そうな顔をした。

「私の頭上に落として私を殺害しようとしたのよ」

良香は平然と答えた。

「でも、実際はそうでなく、光男さんは夕子さんに……」

前田は殺されと続けようとしたが、言い淀んだ。

「実際に光男は私を目掛けてボールを落とそうとしたのよ。しかし、その前に夕子に突き落とされた。突き落とすというよりも足を持ち上げたのだろうけど」

「それを証明するのは難しそうですが……」

「証拠はあなたが見つけたビーズよ。あのビーズは夕子のネイルに使われていたの。夕子は光男を持ち上げるようにして突き落とした。その時にビーズが光男の服、おそらくズボンのすそ辺りに付いた。そのビーズが私にも移って、あなたが見つけてくれたのよ」

「夕子さんは光男さんの奥様ですから、光男さんの衣服に夕子さんのビーズが付いていてもおかしくないのではありませんでしょうか」

前田は景地刑事と同じ様な疑問を告げた。

「警察は教えてくれないけど、もしかしたら光男のズボンのすそにはビーズだけでなくネイルそのものが食い込んでいたかもしれないわ。夕子はネイルが取れたのに気付いてネイルを全て外したのよ。周囲には未亡人になったから派手なネイルはできないと言ったようだけど」

夕子が事件後もずっとネイルをしていなかったことを良香は思い出した。

「それに夫婦といっても別居していたから、接触機会は少なかったと思うわ。事件発生前は光男は総務部にいたし、夕子は夕方まで外出して営業していたから、接点はなかったと思う」

良香は自分で話しながら推測だけだと思っていた。

「警察が屋上や光男のズボンを調べて、他にもビーズやネイルの破片が見つかったかもしれないわね 新聞に『遺留品の状況』って書いてあったから」

前田はそれでも証拠として弱いと考えているようであった。

「屋上のビーズやネイルだけでは事件当日に夕子さんが屋上に居たという証拠にならないのでは。私が夕子さんの立場だったら、夫が自殺した場所を見に行つて、その時に落としたと言います。衣服に着いた場合も……」

「おそらくビーズやネイルとは別に決定的な証拠が見つかったと思うの」

良香は話を変えて続ける。

「光男の転落動画はインターネットで出回っているのは知っているわね」

「はい。旅行中の夫婦がそれぞれスマホで動画撮影したということだ」

(やはり、決め手はスマホの映像だわ)

良香がそう考えていると、御木会長が珍しく早く出勤してきた。

御木は名前が武利と書き、ミキタケトシと読むのであるが、良香は内心でゴキブリ会長と呼んでいる。たまに思わずゴキ……と呼びかけそうなのがある。

御木は今回の七田光男の転落死を連想させるCMを考え、良香に出演させた。

「おい。七田光男は夕子に殺されたんだってな」

御木は良香と前田に向かって、呼びかけた。こんなに面白いことはないという様に醜く顔をゆがめて微笑んだ。

「また、これで弓本のCMも再び大炎上するぞ」

御木が珍しく早いのは、夕子逮捕の話をしたかったのだと良香は思った。

御木はまともに仕事もせず、一日中、週刊誌のスクランダル記事を読んでいる。

CMは良香が岩が頭上から落下してくるのを避ける内容である。しかも、一つはわざと七田光男を思わせる人間の形で作っていた。

その岩は避けるのであるが、後の岩が避けきれないという状況でロボットが現れ、岩を食い止めるのである。

そのロボットにはゼッケンのようにアサヒ信用保証と書いている。ただでさえ品の無いCMであったが、自社

「私の出演しているCMがネットで流れると、転落動画がおすすめで出てくるの。何気なく見ていたけど、その内の一つがまさに墜落しようとする瞬間と墜落後に屋上を映す映像が残っていたわ」

「それに夕子さんが映っていたと……」

「いいえ。肉眼ではよく分からないわ。警察は教えてくれないから、確認できないけど……逮捕されたってことは夕子と特定できるものが確認できたと思うの」

良香も肉眼では何も分からなかった。しかし、目撃者のスマホの動画を警察の科学捜査研究所で分析して、夕子の存在が確認されたのであろう。

「新聞にも『スマートフォンの映像や防犯カメラの解析』とあるから、それに夕子の映像が確認されたのでしよう」

夕子は光男とLINEでやり取りの後、直接会おうと総務部へ行ったのであろう。その時、既に光男が階段を使って屋上に向かっていたので、その後を追ったのかもしれない。

警察も当初は他殺の疑いが無かったので、防犯カメラを調べていなかったと考えられる。しかし、再調査で夕子が屋上へ向かう映像が防犯カメラから見つかったはずである。

もちろん防犯カメラに夕子が映っていたからといって、屋上に居た証拠になっても、突き落とされた証拠にならない。

の社員の飛び降り自殺を会社の宣伝に利用しているとして、大炎上した。

それが自殺でなく殺人事件であることが分かった。しかも、犯人が妻で自社の社員というのだから、再び大炎上するに違いなかった。

しかし、そのことがまさに炎上商法となり、これからアサヒ信用保証の知名度は悪い方面も含めてであるが、上がっていくだろうと思われた。

(また、CMの件でも叩かれるわね)

良香は今後のことを思い、ため息をついた。

今回の事件について良香は自分なりに振り返った。

当初は光男が良香自身を巻き添えにしようとした投身自殺と考えられた。

それが光男が良香を殺そうとして誤って、事故死したものと推理した。

事實は夕子が光男を殺害したということが判明したのである。(未だ捜査中ではあるが)

自殺から事故死、そして殺人と二転したのであった。

巻き添えや殺されたというだけでも普通の人であればPTSD(心的外傷後ストレス障害)になるところである。しかし、良香は違ったのである。

『面白そうね』というのが良香が困難に直面したときによく使う独り言であるが……

(この事件を振り返ってみると、意外と面白かったわね)

私の本州マラソン歴史紀行（中部編⑥―岐阜県―）

安 藤 剛

【岐阜県 信長の夢と野望を訪ねて】

二〇〇七年にマラソンを始め、東北・関東各都県のマラソン大会を走破、本州全都府県走破を新たな目標に掲げ、中部の静岡、愛知、山梨、長野、新潟を走り、残る岐阜、富山、石川、福井の大会を探していると、二〇〇〇年に女子スポーツ界で初の国民栄誉賞を受賞した高橋尚子さんが、郷里の岐阜にコース監修した「第一回ぎふ清流マラソン大会」の開催を知り、今年二〇一一年一月の千葉マリンマラソンで尚子さんと手をとって万歳ゴールした感動の再現を期待して早速エントリした。

【信長の岐阜城と天下布武】

岐阜と云えば歴史通には岐阜城と織田信長ではないだろうか。一九七三年のNHK大河ドラマ「国盗り物語」

うつけ者と言われた信長が天下布武を宣して天下を狙う拠点としたと言われる岐阜城をぜひこの機会に訪れて、信長の夢と野望を尋ねてみたいと楽しみである。

信長は建礼門院右京大夫との恋で有名な平資盛（重盛の次男）の子親真を祖とする桓武平氏を称していたが、越前の法楽寺で発見された親真の供養塔に刻された没年との不整合から、越前国丹生郡織田荘の剣神社の神官忌部親澄の子親真が織田氏の祖とする説が有力である。

一三三三年の建武の新政で足利氏一門の斯波高経が越前国守護に補任され、斯波氏が越前守護職を世襲、越前の国人織田氏も斯波氏の被官となる。一四〇〇年に斯波義重が尾張国守護を兼ねると織田常昌が尾張守護職代に登用され、織田氏はこの頃に越前から尾張に移住した。

織田信長の父信秀は、尾張国守護代の織田信友に仕える三奉行の一人に過ぎなかったが、智勇に優れ武威を伸ばし尾張四郡を制圧する勢いがあった。信長は幼少時に那古野城主となり、一六歳で父信秀が敵対していた美濃国守護代斎藤道三と和睦して道三の娘濃姫と政略結婚、一八歳で父信秀の急死により家督を継いだ。

尾張守護代織田信友が尾張守護職の斯波義統を暗殺すると、信長は義統の子義銀を擁して守護代の信友を倒し、二一歳で織田本家の清洲城主となり尾張南半分を制する。次いで信長は家督を争った弟信行を謀殺、織田一門の宗

で斎藤道三演じる平幹二朗と織田信長演じる高橋英樹、道三の正室に山本陽子、側室に三田佳子、娘濃姫に松坂慶子という豪華キャストが稲葉山城（岐阜城）を舞台に繰り広げる戦国歴史ドラマが未だに脳裏に残っている。

岐阜の地名について、太田牛一の著書「信長公記」の「稲葉山御取り候事」の項に「八月十五日、色々降参候て飛騨川につづきに候間、舟にて川内長島へ、龍興退散。さて、美濃国一篇に仰せ付けられ、尾張国小真木山より、濃州稲葉山へ御越しなり。井口と申すを、今度改めて、岐阜と名付けさせられ、明くる年の事」とあり、信長が美濃の斎藤龍興を攻略、稲葉山城をおとした一五六七年（永祿一〇年）の翌年に岐阜と命名した。

信長は、中国の故事に因み、中国古代の殷朝を倒した周の文王が鳳凰の舞い降りた山で興ったといわれる岐山の「岐」と、学問の祖孔子の生誕地の曲阜の「阜」を合わせ持つ「岐阜」に地名を改めたといわれる。

家信賢を倒し、二六歳でついに尾張統一を果たした。

翌年に桶狭間で駿河の今川義元を破り、三河の徳川家康と同盟を結ぶ。義父斎藤道三を殺した子義龍を攻略するため小牧山城を築いて清洲城から移り、三四歳の永祿一〇年（一五六七年）に斎藤義龍の急死で分裂した美濃斎藤氏を滅ぼして尾張美濃二国を領する大名となり、清洲から稲葉山に本拠を移して翌年に岐阜城と改名した。

稲葉山城に移った三か月後に信長は「天下布武」の朱印を使い始めた。十五年後の本能寺の変で信長の日本統一の夢が潰えた歴史を知る我々は、信長の天下布武が日本の武力統一を意味していたと考えてしまうが、尾張の信長が美濃の斎藤氏を滅ぼしたばかり、全国に大大名が数多くある日本を統一しよう考えていたとはとても思えない。天下布武とはいかなる意味だったのだろう、布武する天下とは信長にとって何を指していたのだろうか。

信長は翌年に足利義昭を奉じて上洛、第十五代将軍に据えて幕府を再興しており、天下布武は足利義輝が三好三人衆に殺害されて瓦解した室町幕府の再興を意味していたとする説があるが、だとすれば天下布武を朱印に使えるのは將軍義昭で幕府再興を助勢した信長ではない。

「天下」に関わる興味深い史料があった。信長と親しかった宣教師ルイス・フロイスの著書「日本史」に「天下」の言葉が幾たびか出てくる。

フロイスの著書「日本史4」第二章に「一五六八年、この頃、日本の君主国すなわち天下を三人の異教徒の殿（三好三人衆）たちが統治していた」「天下を統治していたこの三人の殿たちの尽力によって」とある一五六八年は、信長が稲葉山城に移り天下布武の朱印を使い始めた永禄一〇年の翌年である。

フロイスの言う三好三人衆が統治していた「天下」とは、京都五畿内（近江・山城・摂津・河内・和泉）であり、日本全土の天下でないことは明らかである。

もう一つは、フロイスの著「日本史前篇」の翻訳者高市慶雄の「ルイス・フロイス傳」の一五六五年正月に「フロイスはアルメイダと一緒に、つんか Tangua に赴く（上洛する）次第となり」とあり、一五六六年四月に「此の間でんかと呼ばれる、みやこの附近は、殆んど市街戦の絶え間なく（中略）信長は前將軍義輝の弟義昭を奉じ大軍を率ゐて西上しみやこの叛乱を鎮定して、一五六八年一〇月義昭をして將軍職に即かしめた」とあり、当時は京の都を天下と呼ぶのが共通認識だったのだろう。

信長が足利義昭から上洛への協力要請を受けたのは、永禄八年一月である。二年後の「天下布武」は、前將軍足利義輝を弑して京の都を市街戦で荒廃させた叛乱軍を武力で鎮圧して新將軍足利義昭を擁して京の都の平和を回復させるという意味だったのではないだろうか。

当然ながら古参家臣団の抵抗もあったに違いない。かかる抵抗勢力を抑えて本拠地となる城を移転し続けたところが、それまでの戦国武将と違う信長の信長たる所以である。それを可能にしたのが、農民からの年貢米のみに頼らない、関所通行税を廃止し棄市棄座を導入して商業中心の城下町を形成して得た膨大な財力だった。天下布武を宣して時代に先駆けする信長の姿を岐阜の地に見付けられそうで楽しみである。

【下克上の舞台となった岐阜城】

稲葉山（後に信長が金華山と改名）の頂に聳える稲葉山城（後に信長が岐阜城と改名）は、一二〇一年に二階堂行政が京都の押さえに砦を築いたのが始まりとされ、二階堂氏が五代続いたあと、廃城となった。

一五世紀中頃に美濃守護土岐氏の守護代斉藤利永が城を修築して居城とするが、やがて戦国時代の下克上の縮図ともいえるべき、家臣が主君を、子が父を弑逆する相克の舞台となる。まず斉藤氏四代利茂が家臣長井長広（斉藤利安）に稲葉山を追われ、その利安は家臣長井新左衛門尉に殺害され、新左衛門尉の嫡男長井新九郎（斉藤道三）が後を継ぎ、主君の美濃守護土岐頼芸を追放する。

道三は娘を信長に嫁がせて織田氏と和睦、その道三が嫡男義龍に殺害され、義龍は信長と対決しながら病死すると、その嫡男龍興は家臣の西美濃三人衆に造反され、

尾張国の一豪族に過ぎなかった信長が、天下布武を宣するまでに勢力を拡大できたのは何故だろうか。

当時の兵力の大半は、平時は農業に従事して戦になると刀槍を持って馳せ参じる半農半兵の兵士で、田植えや稲刈りの農繁期には戦争などやつてられない、土地から離れられない宿命にあった。守護大名である武田信玄や上杉謙信も、領地を拡大しながら戦いが終わると、不便な本拠地の甲斐国や越後国に戻らざるをえなかった。

しかし信長はその壁をぶち壊した。尾張を制して念願の清洲城主になるが、美濃攻略のために清洲から小牧山城に移り、美濃を倒すと今度は稲葉山城（後の岐阜城）に本拠地を移し、浅井・朝倉・武田氏を倒すと、京を抑える交通要衝である安土城に移っていく。

信長は、居城を次々に移すことで、領地の農作業から解き放され戦いに専念できる軍隊を組成していった。

兵制を兼業から専業に強制的に切り替え、長期に亘り戦闘が継続できる兵農分離した傭兵の戦闘部隊を作り上げ、豊富な財力で大規模な鉄砲隊を組成して旧来の守護大名の半農半兵の軍団を次々に駆逐していった。

信長は、兵制だけでなく、家臣団に父祖伝来の屋敷を焼き払ってでも新城下に強制的に移住させ、家臣を農村から切り離して城下町に取り込むことにより、ピラミッド型の君臣関係を絶対的なものに作り変えて行った。

信長が稲葉山城を攻略、岐阜城と改名、小牧山城から移り天下布武を宣し、新將軍義昭を擁して上洛した。

信長が安土城に移り嫡男信忠が岐阜城主となるが、本能寺の変で信忠が二条御所に籠城して自害、岐阜城は、信長の三男信孝が継ぐが、柴田勝家に内応して秀吉に敗れ自害、賤ヶ岳で秀吉に参陣した池田恒興の長男元助、次男輝政、豊臣秀次の弟秀勝を経て、文禄元年に信忠の嫡男秀信が城主となる。秀信は関ヶ原の戦いの前哨戦で福島正則らの東軍に敗れ、翌年岐阜城は廃城となった。

岐阜城は、斉藤道三から最後の城主となった信長の孫秀信までの七〇余年間に七回もの落城という悲劇があり、歴代城主一〇人中九人までが非業の死を遂げており、稲葉山には何か悪霊でも棲みついていたのであろうか。それほどに岐阜城は戦国乱世の中心であった。

【美濃焼と鼠志野】

岐阜のお土産といえば美濃焼であろう。岐阜県東部の多治見・土岐一帯で焼かれたやきもので、桃山時代には黄瀬戸・瀬戸焼・志野・織部という茶陶の優作が作られた。特に志野焼は、白い土に長石釉を掛けて焼かれた柔らかなくしとりした肌合いが特徴で、国産茶碗で国宝に指定されているのは本阿弥光悦の白楽茶碗「銘不二山」と志野茶碗「銘卯花塙」の二つだけ、志野焼はさほどに日本を代表するやきものである。

我が家に若尾利貞作の鼠志野が二点ある。五年ほど前に会社の先輩（まんじ同人忠内正之氏）に誘われて銀座のオークションでその美しさに惚れて身の程知らずにも手を出してしまったが、鼠志野は志野焼の一種で、志野焼き特有の白い肌を惜しげもなく否定し、黒褐色に発色する鉄釉を掛けた上に白色の志野釉（長石釉）をかけて鼠色に仕上げられたやきものである。

我が家の鼠志野は、波打つように歪んだ形状の径二五センチある丸鉢と小振りだが肉厚のぐい呑みで、たつぷり掛けられた鉄釉が鼠色に焼きあがり、内側の鉄釉を掻き落して葡萄の葉文様を肌色に浮かび上がらせた重量感あふれる丸鉢は、惣菜などを盛り付ける器に、鼠色の釉際や口縁を彩る鉄分の赤茶色が艶かしいぐい呑みは、濃厚でコクのあるお酒が手に入った時に愛用している。

作者の若尾利貞氏は、岐阜県重要無形文化財保持者に認定された陶工だが「俺の生まれた所には志野という凄い無形財産がある、しかしこれを写すだけなら誰でも出来る。だからそうではなく『自分の志野を作ろう』と周りが鼠志野を誰もやらないから、俺がやるぞ」ということで、鼠志野を作り始めたんです」と語っていた。

若尾利貞の窯元がある多治見市にもぜひ伺いたいが、日程的には無理そうで、岐阜市内で陶芸品店を見掛けたらぜひ立ち寄ってみたいと楽しみである。

先週に宮城に帰省した折、東北新幹線の車内紙トランヴェール五月号で、会津鶴ヶ城が赤瓦に化粧直しを終えたという記事があった。昨年一〇月の会津鶴ヶ城マラソンで訪れた時には屋根瓦の吹き替え工事中だったが、あの赤瓦が美濃焼きの技法を応用したというのである。

一五九三年に蒲生氏郷が鶴ヶ城を創建した時には、当時主流だった黒っぽい「いぶし瓦」で葺かれたが、積雪が多く気温が低い東北地方では、瓦にしみ込んだ水分が凍結してひび割れが多発したため、五〇年後の城主保科正之の時代に、美濃焼の鉄分を多く含む釉薬を施してしみ割れを防ぐ瓦に総吹き替えされたという。二代将軍徳川秀忠の御落胤で七歳から二六歳まで雪国の信濃高遠藩で育った正之の発案だったのかもしれない。

【岐阜市内観光サイクリング】

二〇一一年五月一日、午前七時に埼玉の自宅を出立、東海道新幹線の車窓から残雪の富士山と広い浜名湖を眺め、名古屋で乗り換えて木曽川を渡るとまもなく、鬱蒼とした連山の頂に米粒の岐阜城が見えてきた。

駅南口のレンタサイクル店で二日コースの自転車进行、まずは駅北口の「黄金の織田信長公像」にご挨拶である。八メートルの台座に高さ三メートルの信長は、金箔張りの甲冑姿、左手に西洋兜、右手に火縄銃、マントを翻して「であるか」と語りかけてくるようである。

「であるか」は、司馬遼太郎が脚色した信長の口癖かと思っていたが、太田牛一著「信長公記」の「山城道三と信長御参会のこと」に「（先に来た信長が）縁の柱にもたれて御座候。暫く候て、屏風を推しのけて道三出でられ候。又、是れも知らぬかほにて御座候を、堀田道空さしより、是れぞ道三殿にて御座候と申す時、であるかと仰せられ候て、敷居より内へ御入り候て、道三に御礼ありて」とあり、慇懃無礼な信長を今に伝えている。

信長が金華山と改名した稲葉山の頂に聳える天守閣を目標に、山麓の岐阜公園に向かった。町人街と武士街を東西に分ける大手門跡附近を散策したがその痕跡はなく、齊藤道三の菩提寺常在寺と松尾芭蕉が逗留した妙照寺に立ち寄り合掌、近くの正法寺岐阜大仏殿を参拝した。

奈良・鎌倉の大仏と並ぶ日本三大仏とされる岐阜大仏は、大銀杏を真柱に木材の骨格に竹材を編み粘土を塗りあげ、経典の和紙を貼って漆を塗り総金箔張りされた像高十三メートルの巨体で、優しく慈愛に満ちた眼差しで唯一人の参拝者を見下ろしていた。

金華山麓に広がる岐阜公園に自転車置いて信長公居宅跡に向かった。発掘調査中だが、折れ曲がる階段状の通路や野面積みの石垣に当時の威容が偲ばれ、案内板に宣教師フロイスが千畳敷を持つ四階建ての地上の楽園のような宮殿に驚嘆した様子を著書に書いたとあった。

岐阜駅前の「黄金の織田信長公像」



フロイス著「日本史4」第三十八章に、信長が得意満面にフロイスらを宮殿内を案内する様子が書かれている。「宮殿は非常に高い山の麓にあり、驚くべき大きさの截断されない石の壁がそれを取り囲んでいます（中略）私たちは、広間の第一の廊下から、すべて絵画と塗金した屏風で飾られた約二十の部屋に入るのであり、それらの幾つかは、内部には他の金属をなら混用しない純金で縁取られて、前廊の壁は、金地にシナや日本の物語を描いたもので一面満たされていました」そして二階には婦人の部屋が、三階に茶室が付いた廊下があり、四階の前廊からは全市を展望することができたという。

隣接する金華山ロープウエーに乗り、山頂の天守閣に向かう谷に沿った信長公居宅跡を眼下に、山頂まで三分程のゴンドラからの長良川の眺望は圧巻だった。

長良川は、高知県の四万十川と静岡県清水町の柿田川と並び「日本三大清流」と呼ばれ、上流では鮎魚が盛んで、五月中旬の長良川の鵜飼は全国的に有名な風物詩である。今夜もし時間が取ればぜひ覗いてみたい。

ゴンドラを降りて更に岩山のような山道を登ること一〇分、この狭い山岳道では大軍での戦闘はとても無理である。熾烈な白兵戦になる攻防戦を想像しながら、要害堅固な山城であっても、籠城戦となれば飲み水や食糧の確保は至難だったろう。七回もの落城を繰り返した戦国武将たちの怨念が岩肌にしみ込んでいそうである。

急峻な山道も明日のマラソンの準備体操だと思つて苦にならない。自然にピッチが上がる。やがて標高三二九mの山頂に聳え立つ岐阜城が目前に現れた。五月晴れの蒼天を背にした三層の天守閣が端正で美しい。

現在の天守閣は、関ヶ原の後に岐阜城に封じられた奥平信昌が加納城址に移築したという伝承がある。加納城御三階図を基に昭和三十一年に復興されたという。

岩石に立つ天守閣の各層に、刀剣と甲冑の展示や歴代城主の解説パネルがあつたが、その中で信長の正室の濃姫に関する記載内容に驚かされた。

あの傍若無人な信長が己の出自に拘っていたのだとしたり驚きである。若き日のうつけぶりは、越前国織田荘の劍神社神官の忌部氏を祖とする織田氏血脈への劣等感の裏返しだったのかもしれない。

帰宅後に改めて濃姫の素性を調べてまた驚いた。濃姫の母小見の方が明智光秀の父光綱の妹で、二人は従兄妹だった。信長が光秀に辛く当たっていたのは、光秀の血統と才覚に嫉妬したからではないだろうか。

清和源氏の流れを汲む光秀が、桓武平氏の流れを主張する信長に反旗を翻して足利源氏の再興を図ろうとしたのかもしれない。本能寺の変の裏に隠された真実を見た思いで身が震えてきた。

岐阜城天守閣の展示品の中で、楽市楽座の掟（制札）に箇条書きされた内容も驚きだった。関銭の免除や自由通行権、市場外での債権債務関係の消滅と課税・労役の免除、警察権力の不介入などが明記されていた。

封建時代の世に自由主義経済を導入せんとした信長の意図は、経済の自由化による経済効果だったのだろう。信長の天下布武を支えたのは、楽市楽座令による経済の拡大と莫大な財力だったことを改めて思い知らされた。

信長の旗印に貨幣の「永楽通宝」を図案化したものがあつた。これぞ農業から商業へ貨幣経済を重視していた信長を象徴する事例である。家康の「厭離穢土欣求浄土」

濃姫は斉藤道三の息女だが、母方に美濃国守護である土岐氏（清和源氏頼光流）の傍系明智氏の血を引いており、濃姫の婿である信長こそ正統な美濃の後継者であると強調できると考えたらしい、というのである。

金華山山頂の岐阜城三層天守閣



武田信玄の「疾如風徐如林 侵掠如火不動如山」とは異次元、やはり信長は戦国時代の革命児だった。

天守閣の最上階に上ると、その眺望はまさに壮観である。東京タワーの突端から関東平野を一望する高さで、眼下に大河長良川が雄大に流れ、濃尾平野が三六〇度に広がり、南に名古屋方面、西に伊吹・鈴鹿山系が、北と東は霞んでいたが、アルプス連山が見えるという。

念願の稲葉山城を手に入れた信長は、この天守閣に立ち、この大パノラマを前にして、何を感じ何を思ったことだろう。西に広がる濃尾平野の先に京の都を見ていたのではない。そしてそのとき、信長は天下布武を決意したのではないだろうか。私も信長の気分になっていた。

岐阜城を後に、美しい碧色の文字通り清流長良川を渡り、マラソン大会会場のメモリアルセンターに急いだ。近代的な陸上競技場や野球場が併設された芝生広場で高橋尚子さんのトークショーが既に始まっていた。

白のシャツにピンクのスカートが可愛らしく数千人の前で明るく楽しそうに話していた。高橋尚子の名を冠した初の企画であり、全国から約一万人が集まった大会運営に安堵と喜びに満ちているように見受けられた。

埼玉から来ましたよ、四ヶ月前の千葉マリンマラソンで落後した友人を間に挟んで三人一緒に万歳ゴールをしたのを覚えていますか、叫びたい思いに駆られていた。

明日のためのワンポイントアドバイス「坂を上りきったと叫びたい心境で、ほんとと安心せず、それから三〇メートルは上っているつもりで走りなさい」「上りで頑張れ、下りで頑張れ、また上りで頑張れ」には、さすが根性のQちゃん、これではいつになったら休めるんだろうねと会場から思わず笑いが広がった。会場に参集している誰もが地元岐阜出身のアイドルアスリートQちゃんに温かい眼差しを送っていた。

ステージの背面に建つ巨大な陶壁は、幅二二m、高さ九m、総重量約四〇トン、日本三大桜の岐阜県天然記念物の淡墨（うすずみ）桜を、日本画家伊藤嘉晃氏が描いて美濃焼で焼き上げた、本物の桜の老木のような質感溢れるレリーフで、地元の芸術家と県下の新人アーティストが制作に協力して、花びら七万五千枚を関係市町村の小中学生達が一枚一枚取り付けたという。

大会受付を済ませて自転車を曳きながら長良川の堤に上がり明日走るロードの下見をしていると「レンタサイクルですか。どちらからですか」と声を掛けられた。「埼玉からです」と答えると「私は奈良からです、地震は大丈夫でしたか」と尋ねられて驚いた。奈良の人には埼玉も被災地東北と同じなのかもしれない。「住まいは埼玉なんです、実は田舎が宮城県で義弟が津波の犠牲になったんです」と彼の心遣いに感謝した。

同じ走る仲間の心と心の繋がりにジーンときてしまった。「明日は頑張りますよね」とお互いに名乗り合うことなく別れたが、大会名「ぎふ清流マラソン」にある長良川の清流のように爽やかな一瞬だった。

長良橋の河川敷では地元の人や観光客が鵜飼ショー観覧の陣取りを始めていた。対岸の黄昏の蒼い空に包まれた金華山の頂に岐阜城天守閣がライトアップされて、その真上に満ちた月が煌々と輝き、豊かな水を湛えた長良川の川面にその美しい姿を映していた。

やがて金華山の山肌が紫色に影ってきた。まさに山紫水明の世界である。鵜飼の始まりまでまだ時間がある。しばし膝を抱えて月の光が煌めく川の流れを見入った。周りが騒がしくなってきた。鵜飼の見学場所を探して川べりを歩いていると「ここが見所だよ」と地元のオジサンに声を掛けられ隣の席を譲ってくれ、そしてこの後に始まる鵜飼ショーの解説までしてくれた。

五月一日から始まった長良川の鵜飼は、古典漁法を今に伝える岐阜の夏の風物詩で、鵜舟に乗った鵜匠が鵜を操りながら鮎を捕る光景を、並走する観覧船の中から観光客が楽しむのだという。鵜匠の固有名詞が飛び出すオジサンは鵜匠仲間なのかもしれない。

七時半に火花が打ち上げられ、やがて上流から六隻の鵜舟が舳先に篝火を焚いて暗闇の川面を滑るように近づ

本大会テーマは「心と心をつなぐのは今 Remember 東日本」である。東日本大震災からまだ二か月、全く復旧も復興も進んでいない。岐阜に来て奈良の人に心配してもらえんとは、日本はなんと素晴らしい国なんだろう。

大陶壁「淡墨桜」（Qちゃんトークショー）



いてきた。篝火だけが輝いて船上の様子は遠目に定かでないが、鵜匠の舟板をバンバンと叩く音が響いていた。

「鵜飼をさせられる鵜は、上流からこの辺まで泳いで来るとすっかりバテてくるので、鵜匠がハッパを掛けているんだよ。鵜飼の鵜は朝から何にも食べさせられていないからね」というオジサンの説明に「鵜は可哀想ですね。この役目が終わったら、腹一杯鮎を食べさせてもらえるんでしょかね」と応え、オジサンが手に持っていたガイドマップに掲載されている松尾芭蕉の句を指差しながら解説してくれた。

「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」

観光用の鵜飼イベントを面白がって見ていたが、鵜の哀れ、生きるために魚を獲らなければならない、人間の宿命を感じたのか、この句を詠んで以降、芭蕉は魚類を一切食べなくなったのだという。

鵜飼のフィナーレにオジサン推奨の「総がらみ」が始まった。先ほどの六隻が目の前「見所」に戻ってきて、流れに沿って一列に並び、川底が深い手前側の鵜舟から順次、川を下りながら対岸の浅瀬に鮎を追い込んで、一斉に鮎を獲ってしまう鵜飼のクライマックスである。

肝心の鵜飼のシーンはよく見えなかったが、明日のマラソンのことをすっかり忘れて、しばし真つ暗闇になった川面に舞う篝の火の粉に見入ってしまった。

【高橋尚子杯ぎふ清流マラソン二〇一一】

本大会はハーフマラソンだけの大会だが、参加者が一万人とさすがにQちゃん人気である。

制限時間を三時間とゆるく設定して出来るだけ多くの人に走る喜びを味わわせてあげたい、そしてご自身の出身地岐阜の素晴らしさを知ってもらいたいという、尚子さんの熱い思いが込められた企画であり、その他にもQちゃんらしい温かい心遣いが盛り込まれていた。

一つは、分厚いプログラムに参加者全員の一言コメントが掲載されていたことである。エントリー時にコメントを求められていたが、こんな風に収録されているとプログラムを見るのも楽しくなる。「Qちゃんとまた万歳ゴールしたい」と自分のコメントに赤面しながら「初ハーフ頑張ります」「楽しく走るよ」「自己ベストを目指します」「Qちゃんありがとう」など、参加した皆さんの今日に掛ける熱い思いが伝わってきた。

もう一つは、岐阜市内の小中学生による記名式の応援メッセージカードが入っていたことである。私には小学四年のK君から「この度は東日本大震災にて被災された皆様へつつしんでお見まい申し上げます。がんばってください」とあった。津波の犠牲になった義弟のためにも頑張ろうと決意を新たにした。K君、有難う。きつと沿道で応援してくれているだろうね、頑張るからね。

援してくれた港町の元気な男達は津波の被害に遭わなかっただろうか。ゴールでレイを掛けて迎えてくれたフラガールのお姐さんたちはどうしているだろうか。

本大会のテーマは、『心と心をつなぐのは今 Run for 東日本』、いわきサンシャインのTシャツを身に着けて、東日本大震災の被災地の復旧復興に向けた願いを込めて思う存分に走り抜こう。

やがて開会セレモニーが始まり、Qちゃんの出身校である岐阜商業のブラスバンドが格調ある勇壮な演奏を聴かせてくれた。大会長の高橋尚子さんが大会カラーの水色のシャツ姿で現れ、万人のランナーを前に元氣な挨拶も、いつも以上にテンションが上がっていた。

Qちゃんが絶叫した。「東日本大震災の状況に目を疑い呆然としました、自分に何が出来るか、いてもたってもいられませんでした、皆で力を合わせる時です、心と心をつなぐのは今です」そして被災地に向けた「頑張ろう!」「頑張れ!」のコールに、私も声を張り上げた。

ゲストの紹介が始まった。ハーフを五九分台で走るケニアのマサシ選手、東京マラソンで一躍脚光を浴びた市民ランナーの川内優輝選手、Qちゃんと世界を競ったキャサリン・ヌデレバ選手、世界のトップランナーがこんなに集まるとはさすがQちゃんだ。「Qちゃん、よかったね、大成功だね」と密かに祝福のコールを送った。

七時過ぎにホテルを出立、レンタサイクルで通い慣れた岐阜市街を走り抜け、長良川の花華橋を渡り、会場の岐阜メモリアルセンターに余裕で着いた。ちょうど金華山の頂に立つ天守閣の真上に太陽が輝いていた。旭日を頭上に天守閣に立つ信長の姿が見えるようである。

岐阜は京から見て東、まさに「日いずる国」である。岐阜城主となり「日出る国の王」となり、西の京にいる瓦解した室町幕府の「日没する国の王」の足利義昭から上洛の要請を受け、今まさに「天下布武」を宣言している信長の姿が見えて来るようだ。

メモリアルセンター内の更衣室で着替えを済ませ、荷物預り所に届けて早速周辺のジョッキングを始めた。

五月晴れで風もなく気温もさほど高くなくまさにマラソン日和である。スタートの三〇分前に集合場所に移動したが、周りは若い人が多い。プログラムに、六〇歳以上が全体の五パーセントで三〇歳台以下が半分を占めているとあったが、若者には負けてられない。

今日の出で立ちは、今年二月の福島県いわき市の「いわきサンシャインマラソン大会」の参加賞で貰ったTシャツである。グレーの地にピンクのハイビスカスがプリントされた上品で可愛い色合いが気に入っている。

大会の翌月に東日本大震災の大津波がマラソンコースの海岸線を襲ったが、いわきの海岸で大漁旗を振って応

長良川競技場の外に整列して午前九時にスタート、二分ほどでスタート位置を通過、かなりのハイペースである。金華橋を渡り岐阜市街を岐阜駅までのほぼ直線コースである。宿泊したホテル前で社員の姿を探したが見当たらず、商店街の沿道の声援を受けながら、やがて駅前で折り返したトップグループが反対車線を走ってきた。

カモシカのようなマサシ選手がダントツで来た。やがてケニア勢が四人、次いで日本選手が一人、その後いくつかの集団が続いてきた。我々も高速ですれ違うトップ集団に向けて「頑張れ!」と声援が送っていた。

駅前を折り返しての最初の五キロで二六分四二秒、先月の富山県魚津マラソンと同じペースだ。やがて長良川畔に出ると右手に新緑に包まれた金華山が迫り、頂の天守閣がはつきり見えてきた。まもなくコースは古い町並みの川原町である。ダークブラウン調に統一された格子戸の商家や町屋が連なり、小江戸の風情漂う狭い通り道を一万のランナーが走り抜けるのはさぞ壮観だろうが、観光客や商店主には迷惑だったに違いない。

川原町を抜け長良橋に出て、長良川沿いに上流に向かう片道五キロの往復コースである。左手に眺める雄大な長良川の色合いは、碧色とでもいうのだろうか、文字通りの清流である。桜並木がつくる木陰が続き、気温が高くなってきたのか、爽やかな空気が心地よい。

碧色の流れを眺めながらの走りが続いて、ようやくの一〇キロ標識で五四分四二秒。この五キロを二八分、先月の魚津マラソンに続いて二時間切りは確実のようだ。岐阜駅前を折り返してからのアップダウンを繰り返す上りが一〇キロ程続くと、さすがにきつくなってきた。

昨日のQちゃんトークショーの「上りを頑張れ！上り切ったら、皆は気を抜くから、そこからがチャンスだ、下りも頑張れ！」を実践しようとするのだが、誰も気を抜きそうにない。きつとみんなが昨日のQちゃんのアドバイスを聞いていたようだ。

第二折り返しの一三キロ地点の千鳥橋を渡りながら、鬱蒼とした山間を流れる碧色の長良川が左右に広がる美しい景観に思わずため息をついていた。Qちゃんがこの大自然を皆に見せたいという気持ちがよくわかる。

長良川右岸に沿った帰路の遙か前方に、金華山と高層ビル街が見えてきたが、あまりの遠さに気持ちが萎えてしまう。気温も二五度を超えて、ついに給水所に足を止めてしまった。脱水と熱中症だけはケアしなければ。それでもこの五キロがキロ五分四〇秒、まだまだ走れるぞ。しかし金華山がなかなか近付いてくれない。

路肩にリタイアするランナーを見かけるようになった。鵜飼大橋を過ぎて長良川プロムナード（遊歩道）に入ると、沿道の声援も賑やかになってきた。

長良橋の袂で、ゴールまでまだ二キロもあるのに「メモリアルセンターはすぐそこだよ」と元氣なおバサンの強烈なハイタッチに思わず「イタイ！」と悲鳴を上げたが、嬉しかった。左手の金華山に聳える岐阜城を望みながら、いよいよ長良川右岸の高橋尚子ロードである。

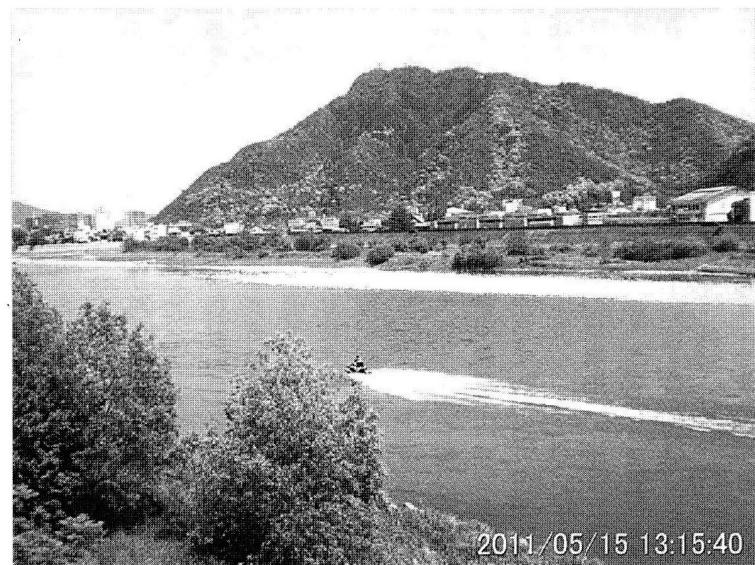
沿道に小学生から大人のハイタッチの列が連なり、彼らの元気を貰いながらも、キロ六分台に落ちてピッチが上がらない。二〇キロ地点で一時間五三分四三秒では二時間切りは無理そうだがベストは尽くそう。歩きたい誘惑に耐えながら最後の五キロを走り続けた。

ゴールの長良川競技場に入ると直線のトラックの先にQちゃんの姿が見えていた。前を走るランナーがQちゃんめがけて右に寄っていく。私もペースを落として右手を差し出し、笑顔のQちゃんの右手のハイタッチを受けた。Qちゃんありがとう。岐阜は素晴らしい場所だったよ。

ゴールタイムは二時間一六秒。四度も給水を取る暑さの中で、ほぼ二時間で走り切れたし、Qちゃんとハイタッチもできたのだから大いに満足である。大きなバスタオルをかけてもらい、体力補強のバナナをいただき、Qちゃんサイン入り完走証の順位も一般男子の中段だからよく頑張ったと自分を褒めてやろう。楽市楽座の露天コーナーで飛騨牛の串焼きを買い、金華山山頂の天守閣から見下ろしているだろう信長公にビールで乾杯した。

昨夜の鵜飼を見学した堤附近を走りながら、昨夜のオジサンがいけないか目を泳がせてみたが、暗闇だったので顔の記憶も定かでなく、残念である。明日のマラソンに出場するために来たと話しておけばよかったかな。

長良川の清流と金華山（山頂の左端に岐阜城天守閣を遠望）



【余話：信長の夢の跡を訪ねて「安土城址」】

信長が天下布武を發した岐阜城を訪ねたなら、信長が夢を実現した安土城を訪ねないわけにはいかない。

二〇二二年一月に京都での尺八コンクールの帰路に立ち寄る機会を作った。翌朝、JR琵琶湖線で安土駅に下車、駅前広場で織田信長公の立像が迎えてくれた。肩衣袴で左手に太刀を右手に扇子を掲げ、天下布武を宣しているのか、人間五十年の敦盛を舞っているのか。

商店街のウインドーに「第三八回あづち信長まつり」のポスターが貼られて「武者押し 令和四年一月一三日」とあり、昨日信長の武者行列があったようだ。

安土駅前の織田信長公像



観光案内所備えのパンフ「信長ゆかりの安土城下を歩く」お薦めの安土城郭資料館と安土楽市楽座館が月曜休館、歴史探訪を期待していた気負いの出鼻が挫かれた。

安土の町並みが、普通の町と少しも変わらないのは意外だった。室町時代が終わり関ヶ原で家康が勝利するまでの信長と秀吉の時代が安土桃山時代と呼ばれ、一時代の冠名となった安土の町が、安土城の落城と共に歴史から抹殺されてしまうとは、兵どもが夢の跡である。

街中を安土城に向かって一五分程でセミナリヨ跡地に着いた。安土城築城の翌年の天正八年（一五八〇年）に信長がイエズス会のイタリア人宣教師オルガンチノにこの地を与えてカトリック神学校を建設させたという。

安土山裾から三〇〇mほど南、東方に六角氏の観音寺山が遠望できる、のどかな好立地に建てられた三階建ての豪華壮麗な神学校は、一階に茶室の付いた座敷、二階は神父の居室、三階は教室と生徒の寮として使われ、諸国から集まった二〇数名の少年たちが寄宿して日本文学やキリスト教理やラテン語、修辞学、音楽等、近代教育の草分けに等しい教育内容だったとは驚きである。

信長とキリスト教の接点はいどこにあったのだろうか。宣教師ルイス・フロイスの著書「日本史4」第三章に、信長の奉行和田惟政が、正親町天皇の詔勅で堺に追放されていたフロイスらを京に連れ戻して信長に引見

させる場面がある。信長は二条城の建築現場で橋の板に腰をかけていきなり司祭（フロイス）に質問した。

「当国でデウスの教えが弘まらなかった時にはインドへ帰るかどうか訊ねた。司祭は、ただ一人の信者しかいなくてもいづれかの司祭がその者の世話のために生涯その地に留まるであろうと答えた。（中略）さらに彼は、伴天連はいかなる動機から、かくも遠隔の国から日本に渡って来たのかと訊ねた。司祭は、日本にこの救いの道を教えることにより、世界の創造主で人類の救い主なるデウスの御旨に添いたいという望みのほか、司祭たちにはなんの考えもなく、なんらの現世的な利益を求めることなくこれを行なおうとするのであり、この理由から、彼らは困苦を喜んで引き受け、長い航海に伴ういとも大いなる恐るべき危険に身を委ねるのであると返事した」

「司祭は、自分が都に自由に滞在してもよいとの允許状を賜りたい。それにより殿の偉大さの評判はインドやヨーロッパのキリスト教世界のような、殿のまだ知らない諸国にも拡がることだろうと恩寵を乞うた」「これらの言葉に彼（信長）は嬉しそうな顔付きをした。司祭は、彼が公方様（義昭）を大いなる威儀と名譽を持って彼の兄（義輝）の旧位に復帰せしめることで示した顕著な正義の業をいたく賞賛した。彼は司祭との交際が気に入ったことを認め」和田に將軍との引見を指示した。

信長は、フロイスの語る未知の世界観と巧みな弁舌に魅了されたのか、籠絡されたのか、永禄一二年四月八日に「伴天連が都に居住するについては、彼に自由を与え、他の当国人が義務として行なうべきいさいのことを免除す」る允許状を「真の教えの道と称する礼拝堂にいるキリシタン宗門の伴天連宛」てに認め、伴天連に都の住居と居住する場所で他の者が負う義務を免除する公方様（將軍義昭）の御札が公布された。

信長は信仰心を持ってキリスト教を受け入れたのだろうか。フロイス著「日本史5」第四十七章に、三七殿（信長の次男信孝）に関する興味深い記述がある。

「彼（三七殿）は、安土の司祭らや日本人の修道士らと交際し始め、しばしばデウスの掟について説教を聞くうちに、キリシタン以上の愛情と親近感を修道院に対して抱くようになった。（中略）彼は仏僧たちの宗派が欺瞞と迷信であるとしてこれを軽蔑、我らの聖なる掟だけが真理と道理にかなっており、デウスの教えを聞いてはキリシタンにならずにはおれぬと述べてそれを激賞した。（中略）父から気に入られ城中の一同から愛されていたこの若者は、父が喜び少なくとも悪く思わぬことを暗示するまではキリシタンになることを留保していた」とあり、愛息の信孝でさえ父信長がキリスト教をどう思っていたか分からず恐れて洗礼を受けられなかったという。

フロイスが信長について「日本史4」第三章に「神および仏のいっさいの礼拝、尊崇、ならびにあらゆる異教的占トや迷信的慣習の軽蔑者であった」と書いたが、潔癖な信長が現世的利益を求める宗教者を偽善者だと弾劾していただけで果たして無神論者だったのだろうか。信長の仏教迫害は、仏教そのものではなく、その因襲に毒された仏僧たちの欺瞞故であり、同じくキリスト教の保護も、信仰心があつての保護ではなく、キリスト教のもたらす西洋文明にあつたのではないだろうか。

南蛮貿易の利益と宣教師の持つ多様な西洋の文化や武器や学識を取り込むことが信長のキリスト教保護の目的であり、信長に抵抗する石山本願寺や一向宗など仏教勢力への牽制もあつたかもしれない。

石造りの百々橋を渡ると、安土山麓に立つ石碑「安土城址」の左側から摠見寺本堂跡に登る石段が樹林の中に延びていた。安土城は長篠の戦で武田勝頼を破った信長が翌年の天正四年（一五七六年）に重臣丹羽長秀を総普請奉行に標高一九九mの安土山に築城させた平山城で、天正七年五月に五層七重の天主を持つ安土城が完成した。天正一〇年六月の本能寺の変で信長が横死、混乱の中で安土城の天主と本丸は焼失、信長の三男信雄と孫三法師が二の丸に入るが、三年後の小牧長久手の戦いで信雄が秀吉に敗れて織田氏が終焉、安土城は廃城となった。

百々橋から山麓を東へ大手門跡までの安土山南面山裾の各所に、発掘調査で復元された外郭の石垣が積み重ねられ、大手門跡を挟んで東西に石垣が延びて枡形虎口と平虎口を配した織豊系城郭の奔りを今に伝えている。

大手道の入口に立つ安土城年表に「天正四年正月、信長、安土山に築城を命じる。六年正月、諸將を城中に招き城内の見物を許す。九年七月、天主及び惣見寺に提灯を吊し江中に舟を浮べ巡察使バリニャーニをもてなす。一〇年元旦、諸將を礼金百文にて惣見寺と本丸御殿の見物を許す」とあり、信長は安土城を自らの威光を天下に示す見世物に利用していたようである。

大手門跡から城内に入ると、幅約八mの石段が天主と本丸の主郭部がある山頂に向けて直線で一八〇mほど延びていた。勾配約一八度の大手道の延長線上に聳える五層七重の安土城天主閣が燦然と輝く姿は、参内する者を驚愕させ威圧していたに違いない。(下の写真)

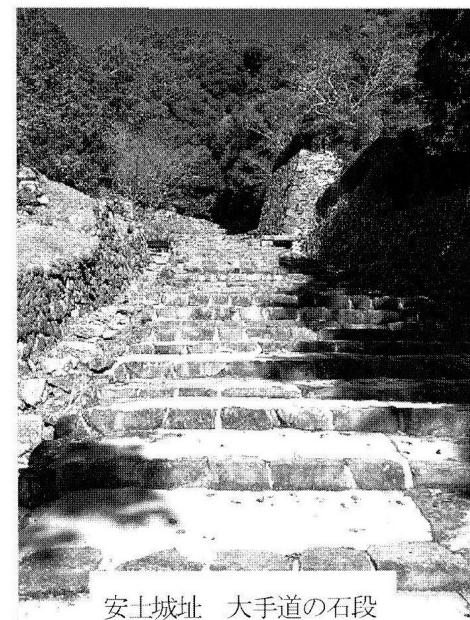
敵の攻撃から防御するため鉤型に屈曲させる道路がここでは真直ぐに延びた幅広いメインストリートであり、無防備である。安土城は、軍事的な防衛施設ではなく、天下布武を達成した平和の宮殿だったかもしれない。

大手道の登り口の右側に伝前田利家邸跡が、左上側に伝羽柴秀吉邸跡、大手道の上り詰めた右側に伝徳川家康邸跡の雛壇状の郭が左右交互に並んでいた。

いよいよ本丸跡である。天主台手前の低い杉林の広場に立つ本丸御殿説明板に「礎石の配列状況から天皇の住まいである内裏清凉殿と非常によく似ていることが分かった」とあり、太田牛一著の「信長公記」巻十五「御出仕の事」に「是より忝御廊下続きに参り、御幸の御間拝見仕り候へと御説にて、かけまくも忝き、一天万乗の主の御座御殿へ召し上げられ(中略)御廊下より、御幸の御間、元来、檜皮葺、金物日に光り、殿中悉く惣金なり(中略)正面より二間の奥に皇居の間と覚しくて、御簾の内に一段高く金を以て磨き立て光り輝き衣香当たりをはらひ、四方に薫じ、御結構の所有り」とある。

フロイス著「日本史5」第五章に「この城(天主)の一つ側に廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿を造営したが、それは彼のよりもはるかに入念、かつ華美に造られていた。我らの庭園とは万事において異なるその清浄で広大な庭、数ある広間の財宝、粹をこらした建築、珍しい材木、清潔さと造作の技巧、参観者に格別の驚愕を与えていた」とあるが、なぜ信長は天皇を招く御殿を、安土城の本丸内に、それも信長が居る天主より一段低い場所に渡り石段で繋げて建てたのだろうか。

陸奥の伊達政宗は菩提寺瑞巖寺に天皇来駕のために藩主御成の間より更に一段高い上々段の間を作っていた。



安土城址 大手道の石段

山裾から山頂に向かって主要な家臣の大邸宅が建て並ぶ様はさぞ壮観だったに違いない。それにしても家康は当時まだ信長と同盟関係にあつて信長の家臣ではなかったはず、前田利家はまだ柴田勝家の与力に過ぎず大手門近くの要所に屋敷を貰えるだろうか、そんなことを思い巡らせながら大手道を登ると、やがて七曲がりに屈曲する石段の坂道に変わります。まもなく山頂の主郭部に出た。

二の丸跡の奥に立派な織田信長公本廟があつたが、逆臣光秀を討った秀吉が信長の遺品を埋葬して一周忌法要を盛大に取り仕切ったという。本能寺の変に黒幕説や陰謀説があるが、真相は如何にと問いながら合掌した。

信長は天正六年四月に右大臣兼右近衛大将を辞した後官職に就かず、天正一〇年四月に征夷大將軍・太政大臣・関白の何れかを提案されたが、信長の返答が明らか

安土城本丸跡(本丸御殿から天主台に上がる石段垣)



になる前に本能寺の変が起き、信長が将来的に朝廷とどう対峙しようとしていたか分からず仕舞いとなった。

後に秀吉が関白に、家康は征夷大將軍になったが、信長は朝廷から官職を授かるということではなく、天皇の權威を超える權力を狙っていたのかもしれない。

本丸御殿跡から石段垣を天主台跡に上がると、背丈程の石垣に囲まれた二八四方の台地に、一一一個の礎石が整然と並んでいた。本能寺の変直後の天正一〇年六月に焼失して瓦礫と草木に埋もれて三五八年、昭和一五年の発掘調査で姿を現した礎石は地下一階部分だった。

絢爛な五層七重の壮大な天主を支える天主台の広さはこの二倍半だと図解と説明文にあったが、目の前に広がる地下一階部分を囲う石垣の外側は切り立つ断崖で崩壊激しく、図解される天主台の姿が思い浮かばない。

フロイス著「日本史5」第五章に「(城の)真ん中には彼らが天守と呼ぶ一種の塔があり、我ら(ヨーロッパ)の塔よりもはるかに気品があり壮大な別種の建築である。この塔は七層から成り、内部は四方の壁に鮮やかに描かれた金(色、その他)色とりどりの肖像が、その全てを埋め尽くし、外部は層ごとに種々の色分けがなされ、ある層は黒い漆を塗った窓を配した白壁となり、ある層は赤くあるいは青く塗られ、最上階は全て金色となつて、堅牢で華美な瓦で掩われ、雲を突くかのように

安土城の壮麗な天主は、大坂城や名古屋城の天守閣の奔りとされるが、なぜ安土城では天守ではなく天主なのだろうか。あえて使え分ける意味はなんだろうか。

天主は、ラテン語で神を表わすDeusの大文字で始まる固有名詞でキリスト教の唯一神を表わすDeusの訳語といわれ、天主(テンシュ)がDeus(デウス)の音訳語とする説とDeusの意味する天地万物の主(天之御主)が省略されて天主となった意訳語説がある。

太田牛一著「信長公記」の記述に、信長時代の清洲城と岐阜城に天主の名称が出てくる。どうも天主は近世の高層天守閣ではなく、城の中心をなす城主の住まう複層の御殿を天主と呼んでいたようで、安土城の天主には特に御を付けて御天主または御殿主と記していた。

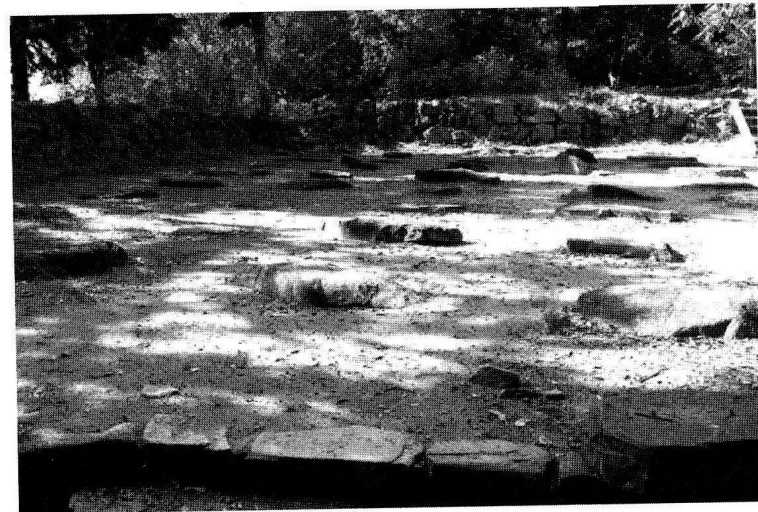
本丸跡からの帰路は、往路の大手通ではなく、南西に百々橋へ下りる惣見寺コースを取った。

天主台から三〇〇mほど下りた尾根の開けた広場に惣見寺本堂発掘跡があり、眼下に安土の町と西の湖が望めた。惣見寺に提灯を吊るしてライトアップ、城下と湖上から眺めさせて得意満面の信長の姿が浮かんでくる。

惣見寺本堂跡の石垣の一段低いところに三重塔が建っただけだが、信長が自らの菩提寺として建立、フロイスが「日本史5」第五章に「自らが単に地上の死すべき人間としてでなく、あたかも神的生命を有し不滅の主であ

何里も離れたところから望みできた」とあり、天主台の礎石群跡に立ち、青空に聳える絢爛な天守を思い描いた。それにしても安土城天主焼失に織田信雄放火説が有力だが、兄信忠が討死後の後嗣有力候補が放火するだろうか。

安土城本丸跡(天主台跡 往時そのままの礎石群)



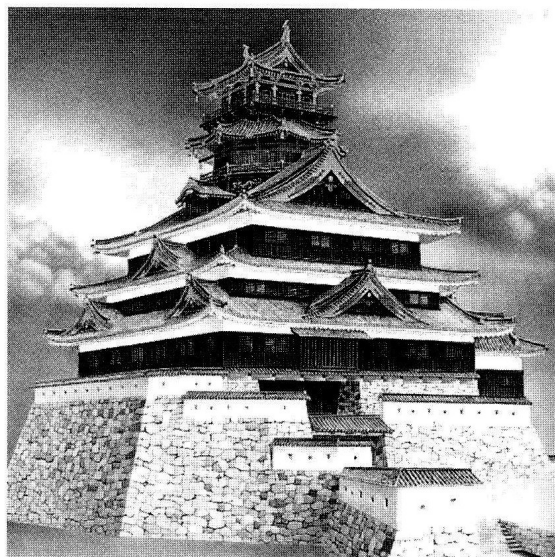
るかのように万人から礼拝されることを希望した。この冒瀌的な欲望を実現すべく自邸に近く城から離れた円い山の上に一寺を建立することを命じた」とある。

信長が、予自らが神体であると言い、神である自分を祀るため惣見寺を建立させたのだとしたら、信長はやはり天皇を超えて神になろうとしていたのかもしれない。

天主とはゼウスであり信長自身だったのだろうか。安土城はまさに信長の夢と野望実現の場だったが、僅か三年後に本能寺の変でその夢と野望は潰えてしまった。

安土城復元図

考証・原図／宮上茂隆 画／桝村太一



編集後記

まんじ一七九号の表紙絵は、干支の「午」にちなんだ田寺怜偉氏の「塞翁が馬」です。併せて寄稿された「縄文の魂が宿る神仏習合の山」は、絵描きさんでなければ描き出せない光と色彩と詩情に溢れていました。同人の最古参になる新井宏氏がまんじ二〇号に掲載された大和禎人氏の作品を紹介、まんじ創刊当時の同人が文学賞を志向する作家群だったことを回想しながら、智恵子抄のロマンに想いを馳せておられました。都市銀行に勤められた経験を生かしたような異色な銀行小説を次々に連載してきた匠克仁氏の二編が完結されました。次号から始まる新たな連載がどんな小説になるのか今から楽しみです。

探検家井出晃憲氏が寄稿されたカルムイキアの国名は知りませんでしたが、東洋と西洋の狭間で歴史に翻弄されるロシア連邦の共和国紀行は、ウクライナ問題に繋げて興味深く読ませていただきました。

静岡県森町在住の山本勉氏が自由民権家渋江保の考察を完結され、中国語学力を生かした池莉原作「你是一条河」の翻訳を寄稿されました。これから中国文学作品の魅力を堪能させてもらおうと楽しみです。

まんじ発行人忠内正之氏より退任の申し出があり、後任に同人の永田俊一氏が発行人に就任されました。忠内さんには公私とも大変お世話になりました。引き続きご指導を宜しくお願い申し上げます。

安藤 剛

「告知版」

まんじ合評会予定
2月28日(土曜日) 12時
会場…アルカディア市ヶ谷
(旧私学会館)

まんじ第179号

令和8年2月1日発行(非売買)

発行人 永田俊一

編集長兼事務局長 安藤 剛

〒362-0022

埼玉県上尾市瓦葺2055-29

TEL・FAX 048(721)2001

(郵便振替口座) No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

(印刷製本) 中川印刷株式会社 〒231-0036 横浜市中区山田町 7-1

田寺怜葦画

表紙の絵について「塞翁が馬」